

巨摩・若江北

(その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人 大阪文化財センター

巨摩・若江北

(その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

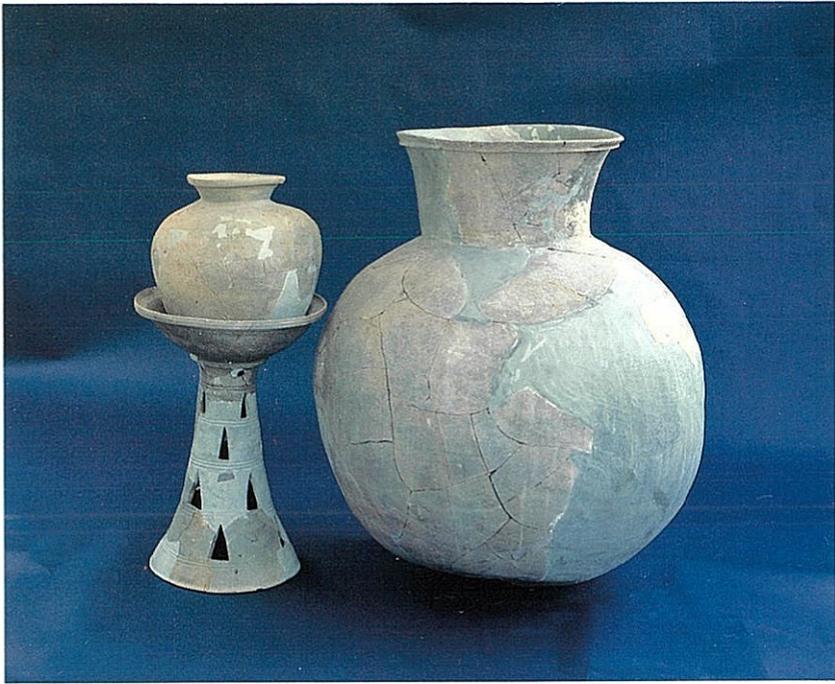
財団法人 大阪文化財センター



遺跡航空写真



古墳時代水田畦畔の土器



須恵器



銅鈴



中世井戸

序 文

巨摩廃寺遺跡・若江北遺跡は、その周辺に若江寺跡、巨摩廃寺跡、若江城跡、瓜生堂遺跡等多くの遺跡が所在しており、昭和54年から近畿自動車道天理～吹田線の建設に先立ち発掘調査を実施し、その結果、河内平野に古代河内湖周辺の縄文時代後半より弥生時代、古墳時代、歴史時代の集落跡、生産跡、自然地形などについての資料を追加することが出来た。

本調査概要報告書は、先に発掘調査を実施した時に、河川、現道路等によって未調査となっていた、橋脚部分、附替水路部分等を道路建設工事と併行して調査をおこなったものであり、従来、このような条件の所では遺構の破壊が進み成果をあげることが出来ないと考えられていたが、今回の調査においては多くの遺構・遺物を検出することが出来、今後の調査方法の検討に、より貴重な資料を得ることが出来た。

本遺跡の発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターはじめ調査関係、工事関係各位のご協力、ご援助をいただき深く感謝すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和59年 2 月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 籾 内 盛 雄

序 文

“自然環境”は、人間生活の基礎をなし、人間は、その時々“環境”に否応なく対応して生きていかなければならない。

“河内平野”に生活の場を求めた古代人達も、各々の時代の“自然環境”に影響されながら、粘り強く生き抜いてきた。

“河内平野”と呼ばれる広大な三角州は、特に“自然環境”の“変化”に対して敏感に反応する低湿地であり、そこに生きた人々が“変化”によって受けた影響は大きかったであろう。しかし、彼らは決して逃避することなく、調和を求めて“変化”に対応し、克服していった。

“河内平野”は、彼らの“戸惑い”“努力”“闘い”の歴史を、2000有余年埋蔵しながら今日に至っている。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる14遺跡の調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的に調査を依頼され、すでに長原、瓜生堂、巨摩廃寺、新家、西岩田、友井東、若江北、山賀、亀井の計9遺跡の本線部分の調査が完了し、美園、佐堂、久宝寺、城山、大堀城の5遺跡の調査を実施している。

本書は、巨摩廃寺、若江北両遺跡の上記の調査で実施出来なかった部分の追加調査の概要を記したものである。

今回検出された弥生時代及び古墳時代の遺構や遺物が、上記調査を補足するに十分な資料であることを確信するとともに、とかく河内平野に存在する遺跡は、弥生時代や古墳時代に注意が片よる傾向がある中で、当該調査に於いて検出された中世期の遺構や遺物は、巨摩廃寺遺跡に生きた人々の歴史を知る上で、また別の角度から貴重なものとなるであろう。

なお、本調査は、日本道路公団の施工になる近畿自動車道若江工区下部工工事と平行して実施され、極めて困難な条件の中での調査にもかかわらず、精度の高い成果を挙げた関係者一同に敬意を表するとともに、日本道路公団大阪工事事務所及び工事関係者一同に感謝する次第です。

最後に、大阪文化財センターは、設立以来、与えられた使命を確実に果たしながら、着実に発展してきた。今後、職員一同、さらに一層の研鑽、努力の覚悟を新たにするとともに、一般府民の方々を始め、関係各位のあたたかい御理解、御支援を願ってやまない。

昭和58年6月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤 三之雄

例 言

1. 本書は、日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、東大阪市若江西新町三丁目及び四丁目に所在する巨摩廃寺遺跡と若江北遺跡の第2次調査の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用59,804,000円は、すべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は、昭和57年7月5日から昭和58年4月30日までの間実施した。出土遺物の基礎的整理を主とする遺物整理業務も発掘調査と併行して実施した。また、遺構図面や写真資料等の概括的な整理業務は、現地における発掘調査の合間と調査終了から昭和58年5月14日までの間実施した。
5. 本調査並びに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪文化財センターが実施したもので、調査並びに本書作成に関係した者は、以下のとおりである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	井上定清（昭和58年3月まで）小林廣喜
	事務局次長兼総務課長	大塚恭朗（昭和58年4月まで）尾田勝之
	主幹兼庶務係長	阪上允子、主査 田中喜代子、主事 秋山芳廣 灰本明子・千野和久・田口宗義・宮本哲男・ 鎗山洋子
調査総括責任者	主幹兼普及係長	福岡澄男
	業務課主幹	棕尾孝彦
	業務課長	中井貞夫（昭和58年3月まで）石神 怡
	主幹兼業務第1係長	中西靖人（昭和58年4月から業務移管）
	業務第2係長	尾上 実（昭和58年4月から第5係長） 技師、平井貞子・高橋雅子・森井貞雄（昭和 57年10月まで）岸本道昭（昭和57年11月から）

6. 本調査及び整理作業には、以下の各氏の協力があった。
小川賢一（桃山学院大学）、小倉 浩（近畿大学）、唐津典継（近畿大学）、瀬川眞美子（佛教大学）、奈良谷学（大阪工業大学）、松岡俊光（佛教大学）、森脇 謙（近畿大学）
7. 本書の執筆分担は、主に巨摩廃寺遺跡の中世遺構と遺物を尾上が、他の遺物を高橋と岸本で行い、その他の記述については岸本が担当した上で最終的に三名が総括したものである。
8. 本書に使用した遺物写真は、すべて平井が撮影した。
9. 本書の遺構実測図の座標は、国土座標を使用し、方位は座標北である。また、標高は、O.P.

(大阪湾標準潮位)による。

10. 本書の遺構名称及び番号などは2遺跡にまたがる第2次調査という性格上、第1次調査のものを踏襲することとした。従って溝などが同一遺構面上でその延長上に検出された場合は、同じ名称を与え、今回の調査のみで検出された場合は、番号を順次加えていくこととした。なお遺構面の把握や遺構の呼称の方法も遺跡ごとに差異を生じている。巨摩廃寺遺跡では、概要報告書『巨摩・瓜生堂』(1981年)に準じ、若江北遺跡では、概要報告書『若江北』(1983年)に準じている。あわせ参照されたい。
11. 本文中の遺物番号は、土器と石庖丁について各々通し番号を与えた他、他の遺物については特に番号を付していない。これは、出土点数が少ないことによる。本書に使用する遺物の番号は、本文中及び図面、図版共に共通している。ただし遺物のうち、図面にあって図版にない場合、あるいは図版にあって図面にない場合がある。
12. 地区名の呼称については、第Ⅱ章第2節に述べている。
13. 本調査では、多くの中世土器の出土をみたことにより、府下の遺跡出土例も合わせて奈良教育大学三辻利一氏に瓦器の胎土分析を依頼し、その御報文を付章として掲載した。
14. 本調査中、水田土壌等について近畿大学川村三郎氏に種々御教示をいただいた。
15. 本調査では、写真・実測図などの記録と共に多くのカラースライドを作成している。本書掲載以外の資料、カラースライドについては、財団法人大阪文化財センターで保管している。広く利用されることを希望したい。

巨摩・若江北(その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目次

巻頭図版	1 遺跡航空写真	
	2 古墳時代水田畦畔の土器(上)(下)	
	3 須恵器	
	4 銅鈴(上)、中世井戸(下)	
序文		
例言		
第Ⅰ章	はじめに	尾上 実……1
第Ⅱ章	調査の結果	4
第1節	層序の概要	岸本道昭……4
第2節	地区の名称について	岸本道昭……7
第3節	巨摩廃寺遺跡の調査	尾上 実、高橋雅子、岸本道昭……8
第4節	若江北遺跡・北地区の調査	尾上 実、高橋雅子、岸本道昭……49
第5節	若江北遺跡・南地区の調査	尾上 実、高橋雅子、岸本道昭……69
第Ⅲ章	まとめにかえて	尾上 実……84
付 章	大阪府下の中世遺跡出土瓦器の胎土分析	三辻利一……87

挿 図 目 次

第 1 図	調査区位置図	2
第 2 図	土層略図	5～6
第 3 図	地区名称図	7
第 4 図	第 6 地区、弥生時代中期流水堆積出土石庖丁	8
第 5 図	弥生時代前期自然河川	9
第 6 図	弥生時代前～中期自然河川	10
第 7 図	弥生時代中期土壙39	11
第 8 図	土壙39出土遺物	11
第 9 図	弥生時代中期水田面	12
第 10 図	弥生時代中期集落面	13～14
第 11 図	溝73出土遺物	15

第 12 図	弥生時代中期遺構面Ⅱ	16
第 13 図	溝31出土遺物	17
第 14 図	溝31出土石庖丁	17
第 15 図	第 2 地区、弥生時代中期～後期の溝と堤	18
第 16 図	弥生時代後期(Ⅲ)遺構面	19～20
第 17 図	第 4 地区北端、古墳時代前期水田の重複状況	21
第 18 図	第 2 地区、古墳時代前期(庄内Ⅱ)水路	22
第 19 図	堤上面出土遺物	22
第 20 図	古墳時代前期(庄内Ⅱ)水田面	23～24
第 21 図	第 6 地区、水田畦畔内木片(1)	25
第 22 図	第 1 地区、水田畦畔内木片(梯子)(2)	25
第 23 図	古墳時代前期水田面Ⅲ、畦畔内遺物出土状況	26
第 24 図	古墳時代前期水田面Ⅲ、畦畔内出土遺物	27
第 25 図	古墳時代前期水田面Ⅲ	28
第 26 図	溝87出土遺物(1)	30
第 27 図	溝87出土遺物(2)	31
第 28 図	第 3 地区、柱穴 1	31
第 29 図	溝88出土遺物	32
第 30 図	古墳時代後期～中世遺構面	33～34
第 31 図	井戸17・18	34
第 32 図	井戸17出土遺物	35
第 33 図	井戸18出土遺物	37
第 34 図	井戸19	38
第 35 図	井戸19出土遺物	39
第 36 図	井戸20・21	40
第 37 図	井戸20出土遺物(1)	41
第 38 図	井戸20出土遺物(2)、銅鈴	41
第 39 図	井戸22	42
第 40 図	井戸22出土遺物	42
第 41 図	井戸23出土遺物(1)	43
第 42 図	井戸23出土遺物(2)、箸状木製品	43
第 43 図	井戸24	43
第 44 図	井戸24出土遺物	44
第 45 図	土壙33出土遺物	44
第 46 図	土壙34出土遺物	45
第 47 図	土壙35出土遺物	45

第 48 図	土城36出土遺物	46
第 49 図	第 I' 遺構面、堤と自然河川	47
第 50 図	自然河川出土遺物	48
第 51 図	第 I 遺構面 (弥生時代前期)	49~50
第 52 図	第 I' 遺構面 (弥生時代前期)	51~52
第 53 図	第 II' 遺構面 (弥生時代中期前半水田面)	53
第 54 図	第 2 地区、弥生時代中期包含層出土遺物	54
第 55 図	第 IV 遺構面 (弥生時代中期前半水田面)	55~56
第 56 図	第 V 遺構面 (弥生時代中期後半集落面)	57~58
第 57 図	第 VI 遺構面、水田耕土内出土遺物	59
第 58 図	第 VII-1 遺構面 (古墳時代前期水田面)	60
第 59 図	第 VII-1 遺構面水田畦畔内木片	60
第 60 図	第 VII 遺構面 (弥生時代後期水田面)	61~62
第 61 図	第 VII-2 遺構面 (古墳時代前期水田面)	63~64
第 62 図	第 VII-2 遺構面水田畦畔断面	65
第 63 図	第 VII-2 遺構面直上出土遺物	65
第 64 図	第 VII-2 遺構面直上土器出土状況 (写真)	65
第 65 図	第 I 遺構面直上層出土遺物	66
第 66 図	第 II 遺構面 (弥生時代前期~中期)	67~68
第 67 図	第 III 遺構面 (弥生時代中期)	69~70
第 68 図	第 IV 遺構面 (弥生時代中期)	71~72
第 69 図	第 1 地区、第 V 遺構面 S D 578 土器出土状況	73
第 70 図	S D 578 出土遺物	74
第 71 図	第 V 遺構面 (弥生時代中期後半集落面)	75~76
第 72 図	第 2 地区、第 V 遺構面上層の遺構	77
第 73 図	第 VI 遺構面自然河川出土遺物	78
第 74 図	第 1 地区、第 VI 遺構面下部の配石 (写真)	78
第 75 図	第 VI 遺構面 (弥生時代後期)	79~80
第 76 図	第 VII 遺構面 (古墳時代前期)	81~82

付 章 挿 図 目 次

第 1 図	大阪府下遺跡出土瓦器の Rb 量	87
第 2 図	大阪府下遺跡出土瓦器の Sr 量	88
第 3 図	大阪府下遺跡出土瓦器の Fe 量	89
第 4 図	大阪府下遺跡出土瓦器の K 量	90
第 5 図	大阪府下遺跡出土瓦器の Ca 量	90

第 6 図	Ca—Sr 分布図による瓦器の分類	91
第 7 図	遺跡分布図	94

付 章 表 目 次

第 1 表	大阪府下遺跡出土瓦器の分類	92
第 2 表	遺跡出土瓦器の時代ごとの分類	93

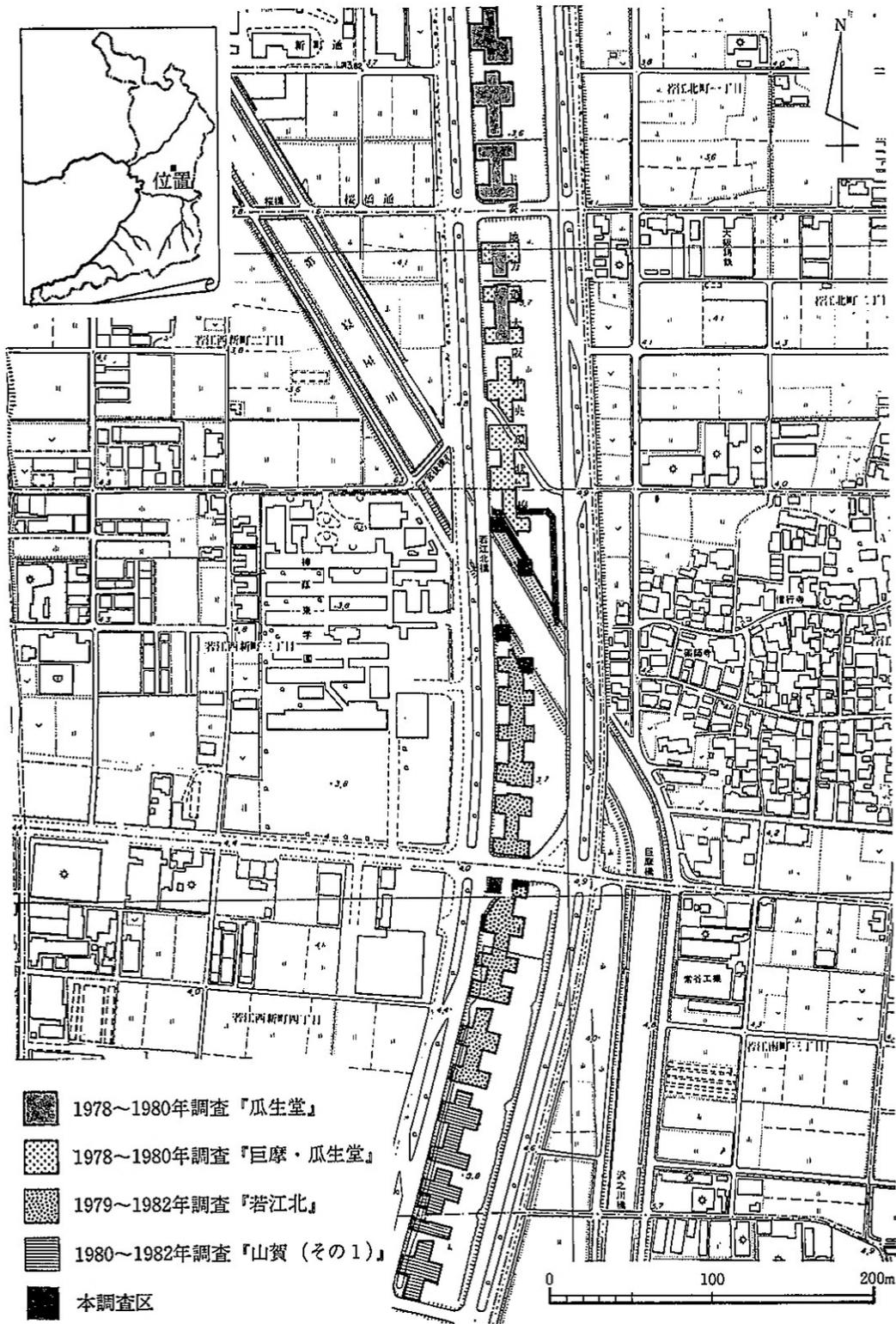
図 版 目 次

図版 1	若江北遺跡付近航空写真
図版 2	巨摩廃寺遺跡、弥生時代前期遺構面
図版 3	巨摩廃寺遺跡、弥生時代中期遺構面
図版 4	巨摩廃寺遺跡、古墳時代前期水田面(1)
図版 5	巨摩廃寺遺跡、古墳時代前期水田面(2)
図版 6	巨摩廃寺遺跡、古墳時代後期～中世遺構面
図版 7	巨摩廃寺遺跡、溝87須恵器出土状況
図版 8	巨摩廃寺遺跡、中世井戸(1)
図版 9	巨摩廃寺遺跡、中世井戸(2)
図版10	巨摩廃寺遺跡、中世遺構
図版11	若江北遺跡北地区、弥生時代前期遺構面
図版12	若江北遺跡北地区、弥生時代前期の自然河川と堤
図版13	若江北遺跡北地区、弥生時代中期水田面
図版14	若江北遺跡北地区、弥生時代中期遺構面
図版15	若江北遺跡北地区、古墳時代前期水田面
図版16	若江北遺跡南地区、弥生時代中期水田面(1)
図版17	若江北遺跡南地区、弥生時代中期水田面(2)
図版18	若江北遺跡南地区、弥生時代後期自然河川
図版19	若江北遺跡南地区、古墳時代前期遺構面
図版20	巨摩廃寺遺跡、古墳時代前期水田面Ⅲ畦畔内出土遺物
図版21	巨摩廃寺遺跡、古墳時代溝87出土遺物
図版22	巨摩廃寺遺跡、各遺構出土遺物
図版23	巨摩廃寺遺跡、中世遺構出土遺物(1)
図版24	巨摩廃寺遺跡、中世遺構出土遺物(2)
図版25	巨摩廃寺遺跡、中世遺構出土遺物(3)
図版26	巨摩廃寺遺跡、中世遺構出土遺物(4)
図版27	若江北遺跡、出土遺物
図版28	若江北遺跡南地区、出土遺物

第I章 はじめに

近畿自動車道天理～吹田線の未供用部分、松原～東大阪間は埋蔵文化財の宝庫とも言える河内平野の中央部を南北に縦断する形態をとって計画されており、予定路線内に多くの遺跡が含まれている事は早くより予測されていた。これらの文化財の取扱いについては工事計画が具体化した昭和46年以来、大阪府教育委員会と日本道路公団を中心に協議が進められ、昭和48・49年度には遺跡の範囲及びその埋没深度の確認を主目的とした試掘調査が財団法人大阪文化財センターによって実施された。その成果を基に調査計画が立てられ、昭和51年には長原遺跡の発掘調査に着手し、検出された重要遺構を保存すべく、度重なる協議によって道路構造の設計変更を受けながらその橋脚予定位置の調査を実施した。この長原遺跡の調査の実績と反省点を踏まえ調査方法に再検討を加えた結果、昭和53年には「トレンチ調査方式」によって瓜生堂遺跡の調査に着手した。すなわち、まず最初に道路予定敷中央に遺跡全長に及ぶ幅10mのトレンチを貫き、その調査成果を基に遺構保存の協議を進め、協議成立を待って決定した橋脚位置について調査区を拡張する方法である。以後、この方式により各遺跡の発掘調査を順次進めていっており、既にいくつかの遺跡については調査を終了し、その成果については調査概要報告書として適時刊行をしているところである。

東大阪市若江西新町に第2寝屋川をはさんで位置する巨摩廃寺遺跡と若江北遺跡についても、前者は昭和53年11月から55年12月まで、後者は昭和54年6月より57年1月まで発掘調査を実施し、それぞれ大きな成果をあげた事は調査概要報告書『巨摩・瓜生堂』『若江北』に記したとおりである。以後本書においては両遺跡の第1次調査と称する。しかるにこの両遺跡の第1次調査においては若干の未調査部分が残されていた。第2寝屋川両岸の橋脚予定地4ヶ所（日本道路公団による橋脚名称76B・77A・77B・78A）は現在供用中の堤防上に位置し、災害予防の点から調査を見合わせている。この4地点は巨摩廃寺遺跡南端部と若江北遺跡北端部に当り、両遺跡の関連を把握する上で重要な個所である。また右岸（巨摩廃寺遺跡側）では堤防に沿って農業用水管が埋設されており、橋脚工事に伴って移設が必要とされた。移設はまず仮設管による迂回路を設け、橋脚下部工事の終了を待って本移設する工程を取らざるを得ず、文化財の調査も仮移設部分、本移設部分の2ヶ所について必要となったものである。一方、若江北遺跡のほぼ中央部分では主要地方道中央環状線と府道四条～長堂線が交差し巨摩橋交差点と呼ばれているが、ここには中央環状線北行車線から東へ向う右折レーンが設けられていた。この右折レーン部にも3基の橋脚が予定されており、うち2基（84A・85B）の一部については調査を実施したものの（第1次調査C-1、C-2トレンチ）、その残部及び84Bの1基の調査は中央環状線の車線切り換え工事を待たざるを得なかった。これら両遺跡の未調査部分について一括して実施したのが今回の調査であり、以後本書においては第2次調査と称する。調査に関する大阪府教育委員会、財団法人大



第1図 調査区位置図

阪文化財センター、日本道路公団大阪建設局の三者契約は昭和57年7月締結され、現地調査は同年7月に着手し、58年4月に終了した。

調査は橋脚予定位置については鋼矢板による土止め支保工を施し、第1次調査によって確認された最終面まで実施した。一方、農業用水管移設部分は、工事の影響が地表下2 m以内に納まるため、当該部分の調査は上幅4 m、下幅2 m、深さ2 mの逆台形断面のトレンチに依る事とし、以下の調査は実施していない。一部では古墳時代前期水田面、他の大部分では弥生時代後期水田面までの検出にとどまり、部分的な坪掘によって弥生時代中期包含層の状況を確認した。

今回の調査は第1次の調査区にはば接して実施しており、その調査結果を十分に参考にして進める事ができた。よって今次調査の所見の多くは先の成果を補足する、もしくは若干の変更を加えるに至ったものである。本書の記述も第1次調査の概要報告書『巨摩・瓜生堂』『若江北』を前提としており、両書を併せ読まれたい。遺構面や遺構の名称についても巨摩廃寺遺跡、若江北遺跡それぞれについて第1次調査のそれを踏襲した。本書中において不統一なものとなったが了承されたい。また遺跡周辺の地理的歴史的な環境についても近畿道関連遺跡の多くの概要報告書に詳しく、それらを参照していただく事をお願いして、ここでは略しておきたい。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 層序の概要

巨摩廃寺遺跡と若江北遺跡の層序については、すでに刊行された2冊の概要報告書に詳しい。本書では第1次調査で見られなかった知見を中心に詳述し、再度概要を記してみたい。

巨摩廃寺遺跡では、弥生時代前期の土器片を含んでいた暗灰色粘土層の下層から切り込む自然流路を新たに検出したが、第1次調査4J地区でみられた自然流路より下層にあたる。

弥生時代中期の遺構面下約0.6mの流水堆積層の中では、新たに水田面を確認した。この水田面は、ごく薄い粘土層をベース面としており、標高はO. P. +1.4~1.8mと南側が高くなっている。

弥生時代中期遺構面上には、灰黒色の粘質砂土層が一面に存在するが、この層の上面をベース面として新たに切り込む溝を確認した。断面観察では、第1次調査4J地区で検出した溝31などはこの面から切り込まれたものである可能性が高い。

弥生時代後期の遺構面の状況は、第1次調査結果と大差ない。2~3層の粘土の堆積中、最下層で溝とそれに伴う堤を検出している。

古墳時代の水田面は、大きく2時期に分けられているが、今回の調査ではさらに上層の水田面を新たに確認した。また第1次調査J地区では不明であった庄内Ⅰ(水田面Ⅰ)とされる水田面を第4地区の土層断面で確認し、その上に庄内Ⅱ(水田面Ⅱ)、新たにその直上にも水田面を確認したわけである。この新たな水田面を古墳時代前期水田面Ⅲと呼称するが、部分的に広がる。

若江北遺跡でも、基本層序は第1次調査と大差はない。

弥生時代前期の遺構は、北地区で自然河川とそれに伴う堤を検出した。ただこの堤が築かれたベース面は、第1次調査で呼称した第Ⅰ遺構面と第Ⅱ遺構面の中間層であり、第Ⅰ'遺構面として新たに確認したものである。この層は第Ⅰ遺構面に広く存在する黒色の粘土層上面である。この堤は、第Ⅱ遺構面形成時まで南東側の水田を営むために機能していたと思われる。

また、北地区では第Ⅳ遺構面と呼ばれた水田面下約0.3~0.4mの流水堆積層内で新たな水田面を確認した。この水田面もベースとなる粘土層が薄く、検出は困難であったが畦畔を確認した。

さらに古墳時代前期の第Ⅷ遺構面と呼ばれた水田面の直下で、部分的に新たな水田面が確認され、古墳時代前期水田面は2層に分かれることとなった。

南地区では、第Ⅲ遺構面と呼ぶ水田面が3層に細分できる可能性を見出した。この地点では、3層にまたがる畦畔を確認している。しかし、上面が広く流水堆積層であるため、削られるなど全体的に見た場合不明な点も多い。

また南-第2地区では弥生時代中期遺構面(第Ⅴ遺構面)上に堆積する灰黒色粘質砂土上面をベース面として切り込む遺構を検出した。以上が今回の調査で得た新たな所見である。

第2節 地区の名称について

第Ⅰ章で、述べたように今回の調査区は、2ヶ所の遺跡にまたがっている。

調査中の写真撮影や遺物の取り上げに伴う記録は、地区名称を調査原因のまま、例えば78Aなどと道路公団の橋脚Noで呼称していた。

本書作成にあたっては、新たに地区名称を与えたので説明を加えておく(第3図)。

巨摩廃寺遺跡については、道路公団の橋脚予定位置が2ヶ所(公団橋脚76B、77A)、農業用水管仮設部分が第1次トレンチ部の調査を隔てて2ヶ所、農業用水管本管部分が1ヶ所、計5ヶ所の調査を実施した。

地区の呼称については、農業用水管仮設部分を3地区に分割した。第1次トレンチ調査区の西側を第1地区、東側の東西部分を第2地区、南北部分を第3地区と呼び分ける。

そして、農業用水管本管部分を第5地区とし、道路公団橋脚76Bを第4地区、77Aを第6地区と呼称し、合計6ヶ所の調査区を設定した。

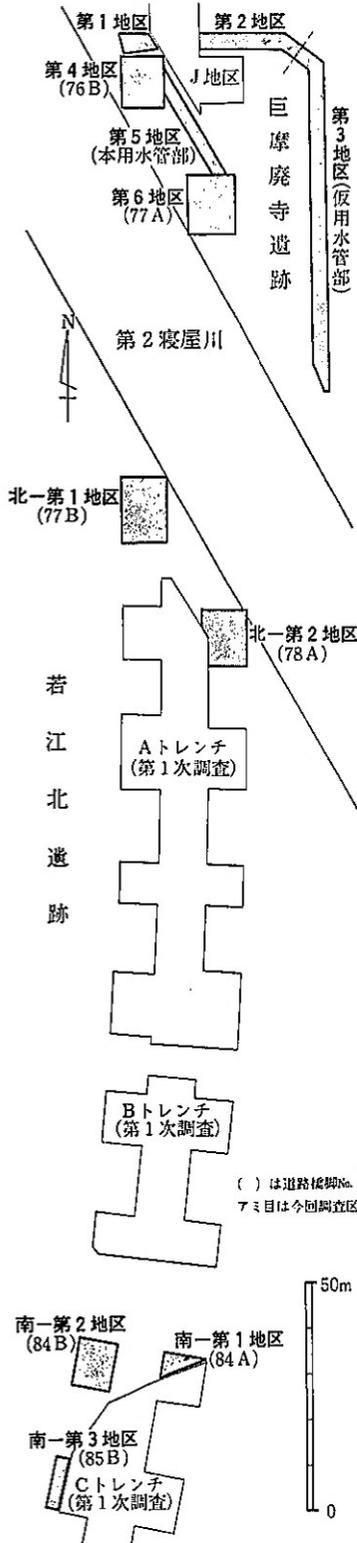
以上が巨摩廃寺遺跡での地区名であるが、用水管部分では仮管、本管部共工事の施工上掘削深度が限定されるため、発掘調査は、弥生時代後期の遺構面まで実施し、部分的に弥生時代中期の遺構面を確認するにとどめている。

若江北遺跡では、調査区が大きく2ヶ所に分かれている。

公団橋脚77B、78Aをまとめて若江北遺跡北地区と呼び84A・84B・85Bをまとめて南地区と呼び分けることとなった。

さらに77Bを北-第1地区、78Aを北-第2地区、84Aは南-第1地区、84Bは南-第2地区、85Bは南-第3地区と呼称している。84Aと85Bは第1次調査の残存部分である。

従って今回の調査は、大きく3ヶ所の地区に分かれ、合計11ヶ所の小地区に名称を与えた。以下の記述は、3ヶ所ごとにまとめて述べていくこととし、小地区名も必要に応じて使用してゆくことにしたい。



第3図 地区名称図

第3節 巨摩廃寺遺跡の調査

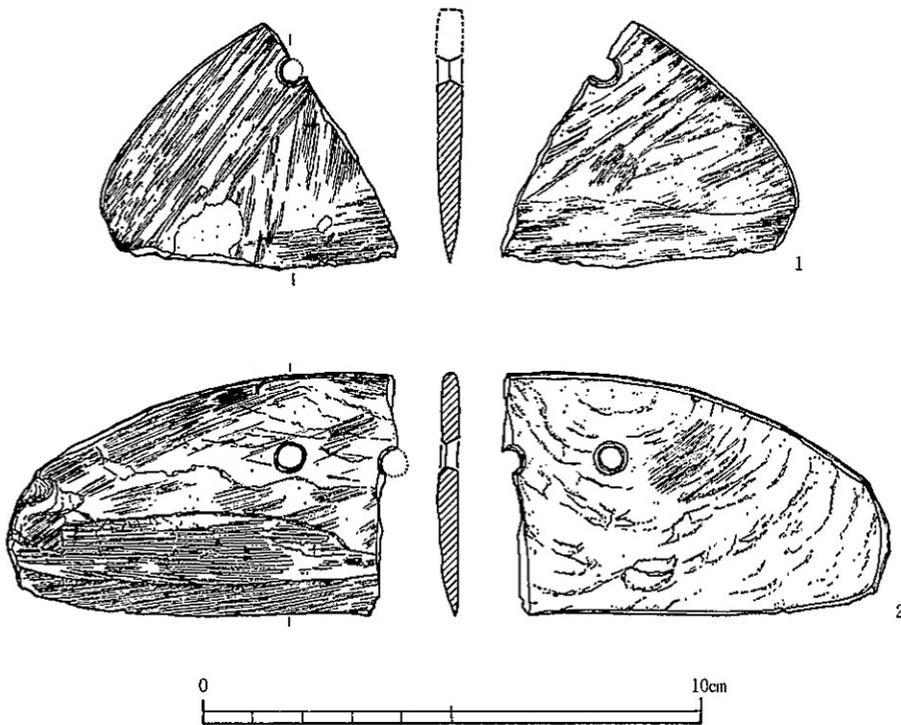
1 弥生時代前期の遺構と遺物 (第5・6図、図版1)

弥生時代前期の遺構は、第4地区と第6地区で検出している。第4地区では、第1次調査で弥生時代前期の土器片を含んでいた暗青灰色の粘土層の下層から切り込む自然河川を検出した。この面は、やや黒っぽい粘土層でその下層は若江北遺跡で第I遺構面と呼ばれる層と対応すると思われる。自然河川の切り込まれた面は、O. P. +0~0.2mで南が高くなる。河川は、幅約5m、深さ0.4m程のもので東西方向に走っており、東がやや幅広となる。内部には、植物遺体と自然木が充満していたが、土器など遺物は出土しなかった、第6地区の対応面に遺構は、存在しなかった。

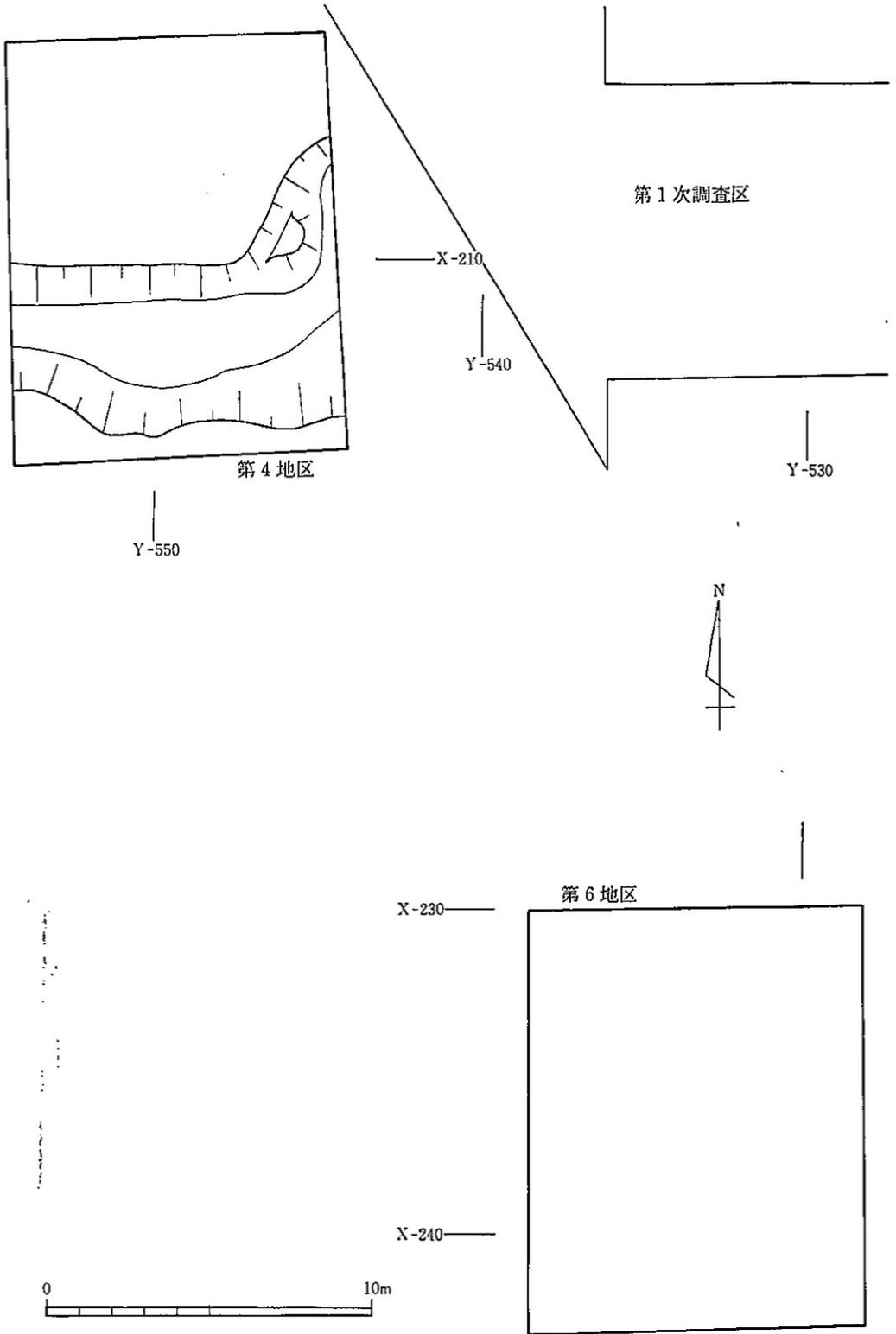
第6地区では、第1次4J地区の調査で検出された自然河川の続きを確認した。層位的にみると、この河川の切り込み面は前述した第4地区の自然河川の2層上の植物遺体を含む暗灰色粘土層である。この層の上面は、流水堆積層となっており、この自然河川は特に流れの強い部分に相当する状況を呈している。第6地区では、北東から南西に流れており、第1次調査結果と照合すれば、大きく流れは彎曲しているが第4地区には見られない。流路両肩で足跡を検出した。

2 弥生時代中期の遺構と遺物

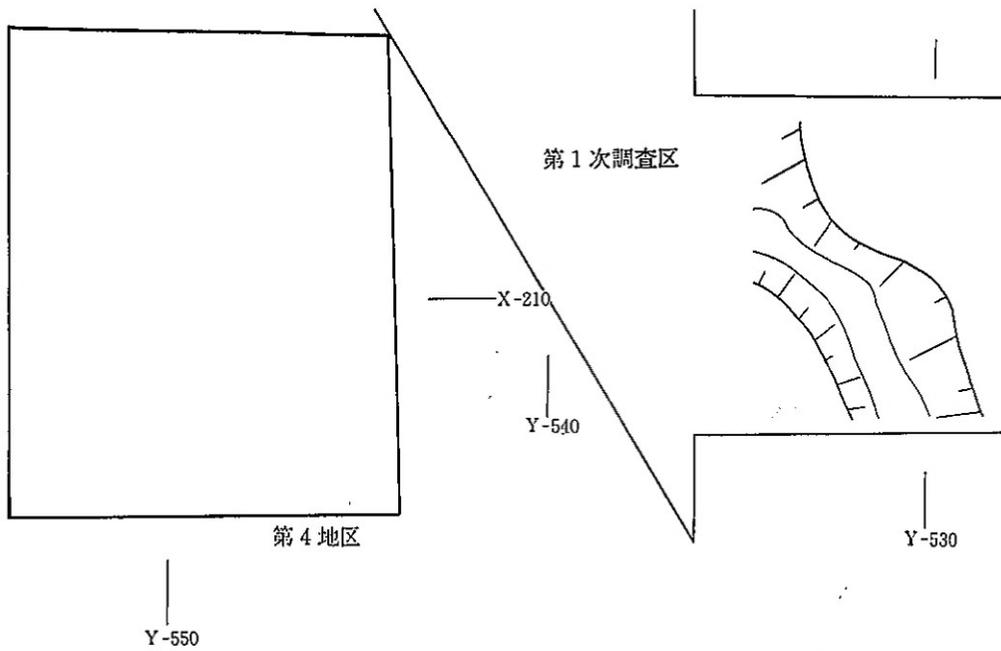
弥生時代中期の遺構面は、3面確認した。そのうち最下層の水田面は、今回の調査で新しく確



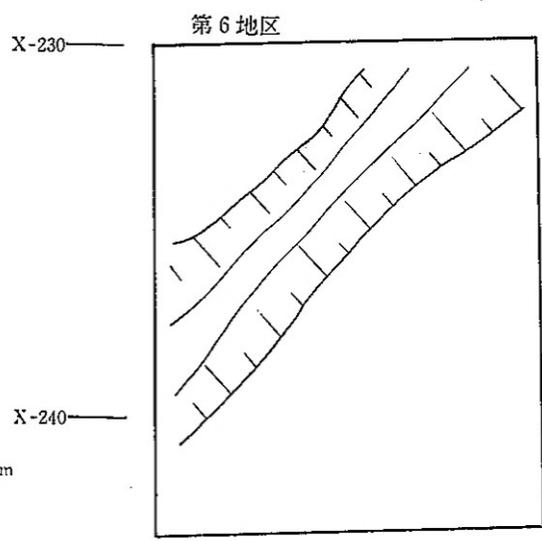
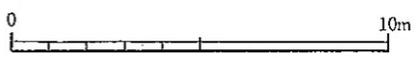
第4図 第6地区、弥生時代中期流水堆積出土土庖丁



第5図 弥生時代前期自然河川



(アミ目は足跡)



第6図 弥生時代前~中期自然河川

認したものである。

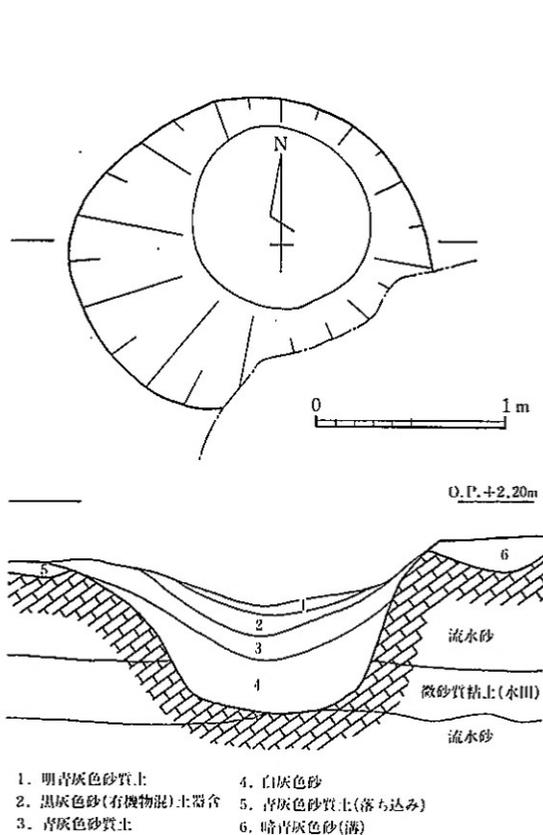
第4図と図版22に示す石庖丁は、新たに検出した水田面の下層に広がる第6地区の流水堆積層から出土したものである。この流水堆積層内には、遺構は検出しなかったが、薄い粘土層があり、1はその上、2はその下の流水層から出土した。従って第6図に示した自然河川は弥生時代中期まで下がる可能性もある。1は、明緑灰色を呈し、背は面を形成し両刃、2は、黒緑灰色を呈し、背は丸く片刃である。

a 水田面（第9図、図版3）

水田面は、薄い粘土層をベース面とし、残存状態はよくなかったが畦畔、足跡、小溝を確認した。水田面は、O. P. +1.4~1.8mで検出し、南が高い。第4地区では、ほぼ水田一区画を検出したが、南側の畦畔は不明瞭で、東側の畦畔は幅広である。足跡は全面に認められた。また、水田面では畦畔の方向とは約45°の角度で、6本の小溝が掘られていた。内部は上層の流水砂が入っており意味は不明である。第6地区では未攪乱部分で1条の畦畔がみられたにすぎない。

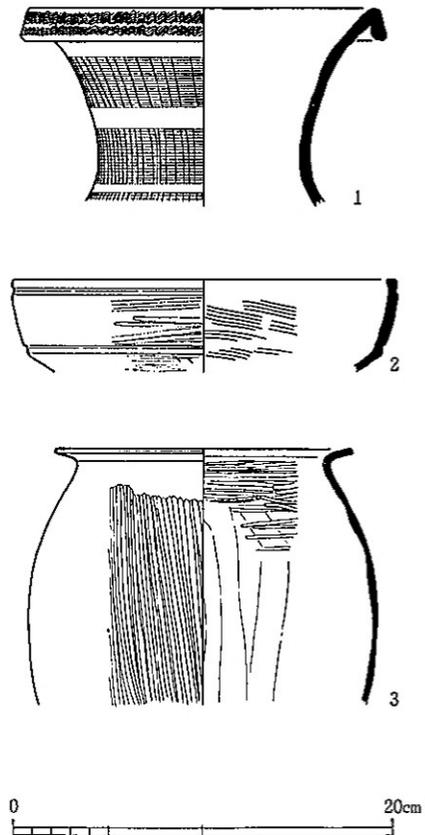
b 集落面（第10図、図版3）

弥生時代中期集落面は、第1次調査で中期遺構面とされたものに対応する。第4地区で、土壇（井戸）、溝、ピットなどを検出し、第6地区では、溝を2条検出したにとどまる。

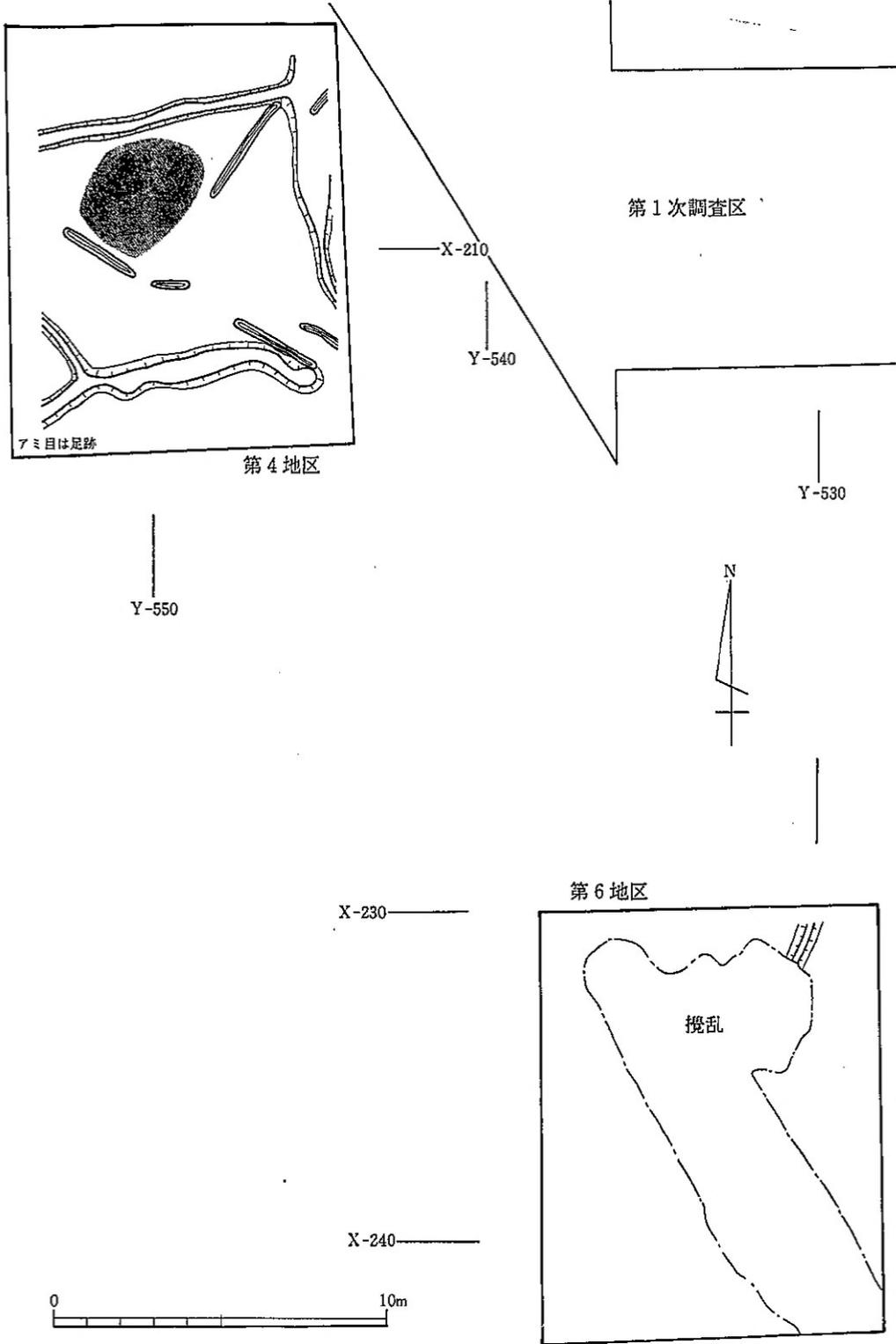


- | | |
|------------------|-----------------|
| 1. 明青灰色砂質土 | 4. 白灰色砂 |
| 2. 黒灰色砂(有機物混)土器含 | 5. 青灰色砂質土(落ち込み) |
| 3. 青灰色砂質土 | 6. 暗青灰色砂(溝) |

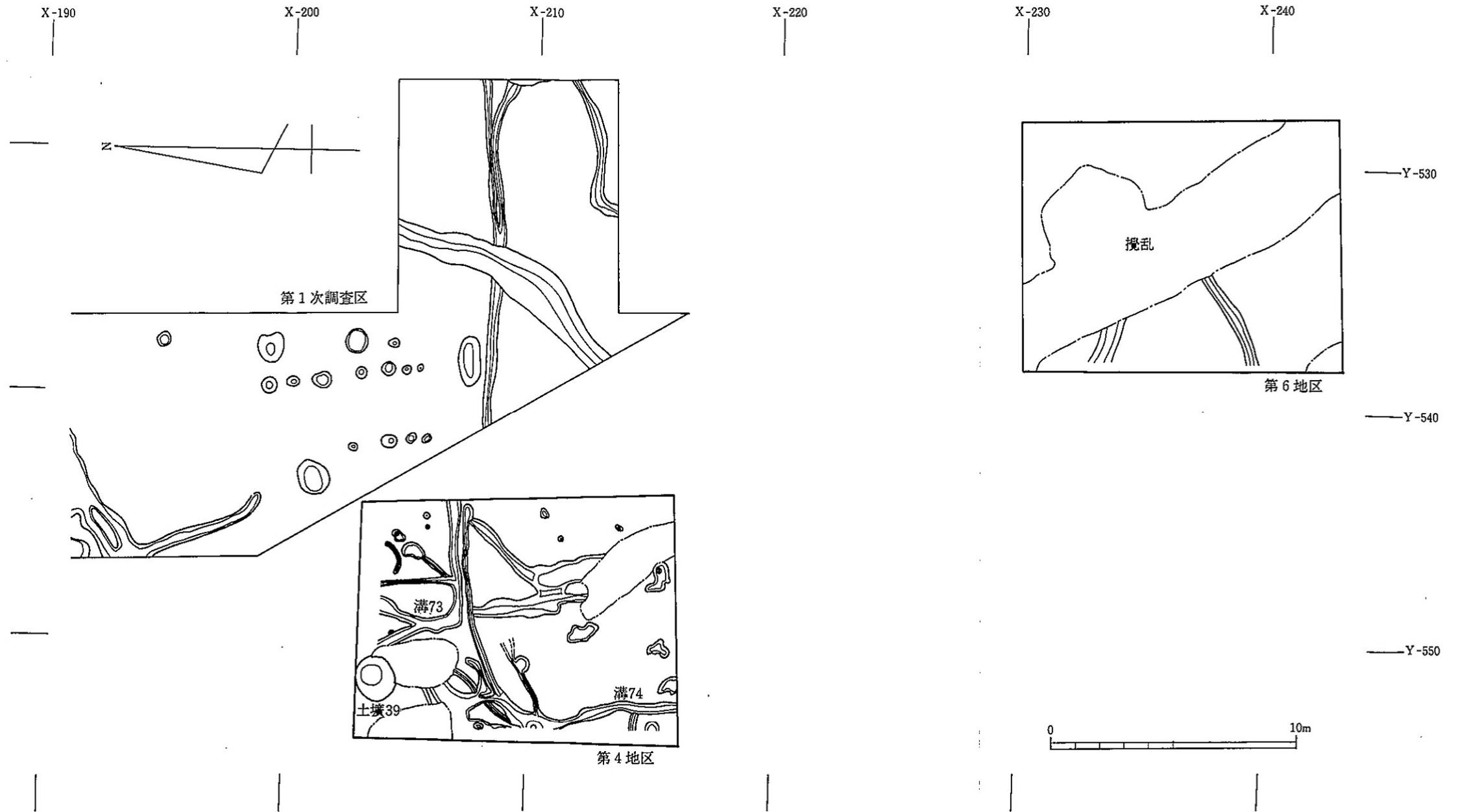
第7図 弥生時代中期土壇39



第8図 土壇39出土遺物



第9図 弥生時代中期水田面



第10図 弥生時代中期集落面

弥生時代中期集落面は、青灰色微砂質土層をベース面としており、遺構内には一様に灰黒色粘質砂土が入り込んでいる。前回の調査で指摘されたように、ベース面のやや下部から確認される遺構もあったが、これはやはり上面で見つけにくいものの例と考えている。

土壌（第7・8図）

土壌39は、第4地区の北端西寄りで見出した。径約2.0m×1.6mを測る楕円形を呈し、深さは約0.9mである。西側の肩は、浅い落ち込みを切り込み、東側の肩は、溝73の分流を切り込んでいる。

内部は、砂の互層堆積である。底部付近は白灰色の粗砂で、底は水田面下の流水堆積層に達している。中央部に黒灰色の有機物の混合する砂層があり、弥生土器が出土している。第8図に示したものは、そのうち実測可能なものである。この土壌は、井戸と考えられるが、井戸枠等の施設・遺物は検出していない。

壺形土器(1)は、口縁端部を下方に拡張する。口縁部端面に波状文、頸部に篋状文が施される。外面には黒色物質を塗布。鉢形土器(2)は、体部より曲折して立ち上がる口縁部で、外面に凹線文を2条廻らす。外面は篋磨き調整されるが、体部には篋削りが残る。内面には、刷毛目調整後ヨコナデを施す。甕形土器(3)は、口縁部が丸みをもって外反する。内外面は、篋磨き調整される。以上の土器は、生駒西麓産の胎土をもつ。他に高杯、底部等の小破片がある。

溝（第10・11図）

溝は、集落面全域に複雑に交錯して掘られている。基本的には同一平面上に検出した。

第6地区では、溝を2条検出しただけで遺構は希薄である。

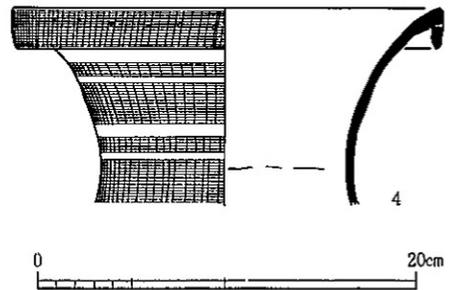
第4地区で見出した溝73、74は、その方向から第1次調査の溝30と連続すると考えられる。ただしややずれていることと、溝74は東側で途切れている点で断定し難い、溝30は、東側で2条のものが合流しており、今回の調査区で再び分かれたと考えることも可能であろう。

溝は、他の溝と切り合うものも多いが先後関係などは明確なものが少ない。

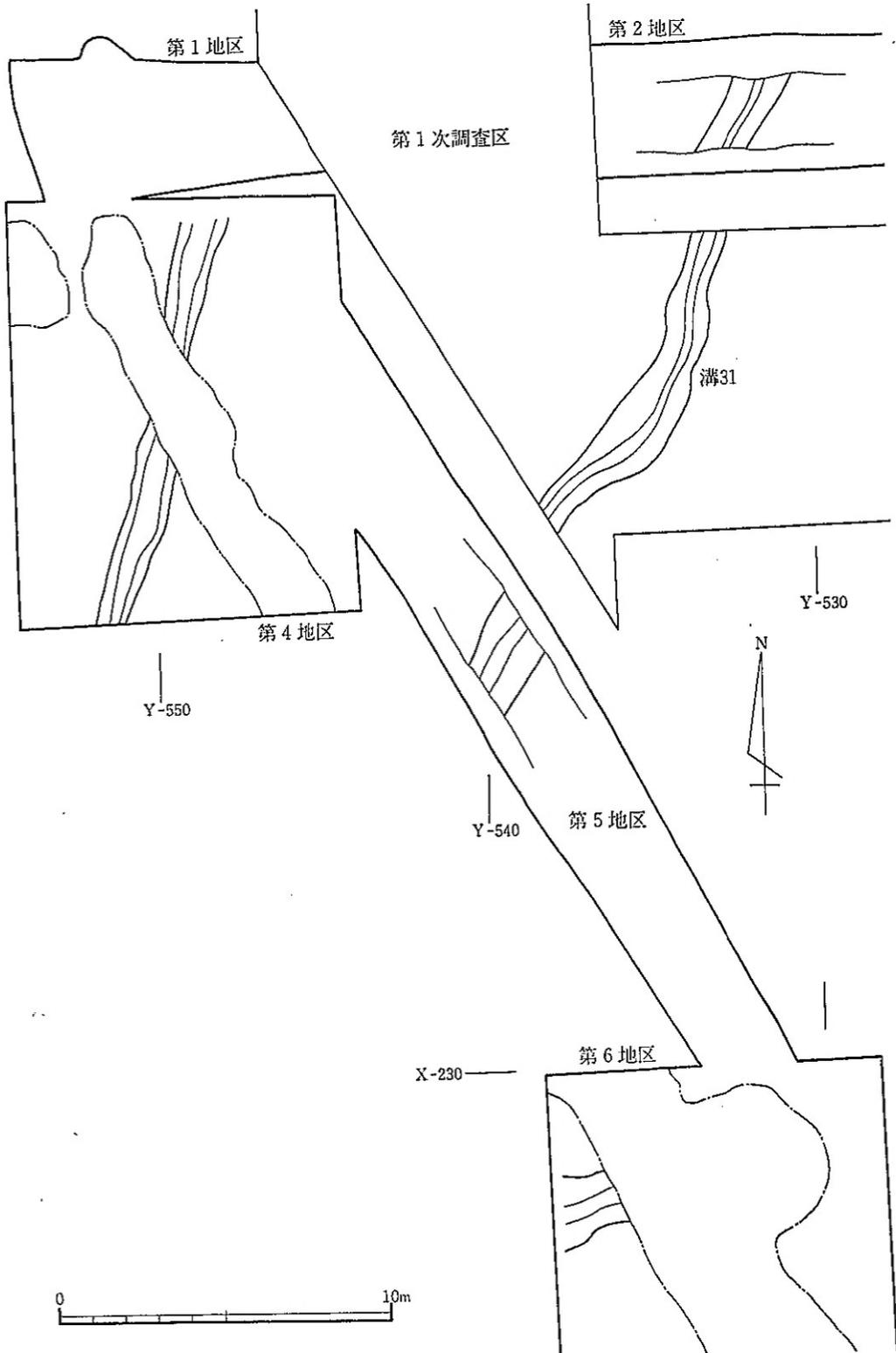
溝73が、北へ屈曲した地点で第11図に示す弥生土器が出土している。壺形土器(4)は、口縁端部を下方に拡張する。口縁部の文様は、篋状文、刺突文の組み合わせ。生駒西麓産の胎土で色調は茶褐色を呈す。

その他の遺構と遺物としては、不定形の土塊、ピットが存在するが性格は不明である。遺物も土器細片を含む程度である。その他、遺構面上を覆う灰黒色粘質砂土からも土器片を得ているが、いずれも時期的には弥生時代中期後半を示している。

なお、第1次調査で4丁地区から検出されている溝31については、後述するように本来灰黒色粘質砂土層上面から掘り込まれた遺構の可能性もある。ただし第10図には加えてある。



第11図 溝73出土遺物



第12図 弥生時代中期遺構面Ⅱ

c 弥生時代中期遺構面Ⅱ（第12～14図）

弥生時代中期遺構面Ⅱは、前述した集落面上に堆積する灰黒色粘質砂土層上面をベース面とする。この面に遺構が存在することは、今回の調査で確認された。

第4地区では、幅1m余りの溝がほぼ南北に走っている。埋土は、下層が暗黄灰色砂で上層が暗灰色粘質土の2層の堆積が見られた。深さは0.2m程である。

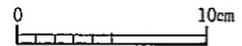
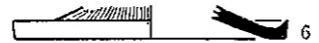
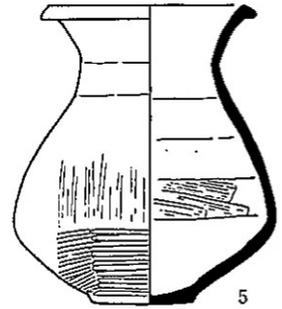
第6地区でも、東西に走る溝状の落ち込みが検出されている。

ところで、第2地区及び第5地区で弥生時代後期の面で、溝とその両側に盛られた堤が検出されている。この遺構の断面を観察してみると、溝・堤の下にさらに古い溝と堤が重複しているのが判明した。この古い方の溝と堤は灰黒色砂質土層をベース面として形成されている。従ってこの溝は第1次調査の溝31に平面的に連続し、遺構面Ⅱのものである。第13・14図の遺物は、第2地区の溝下層から出土した。

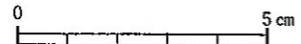
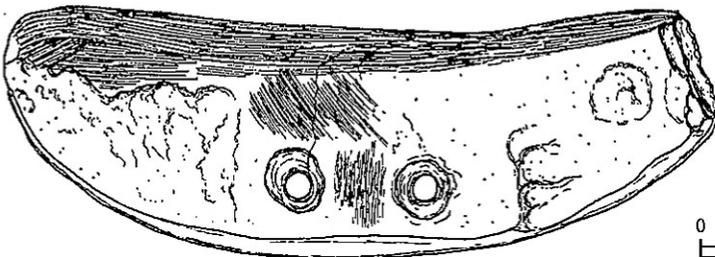
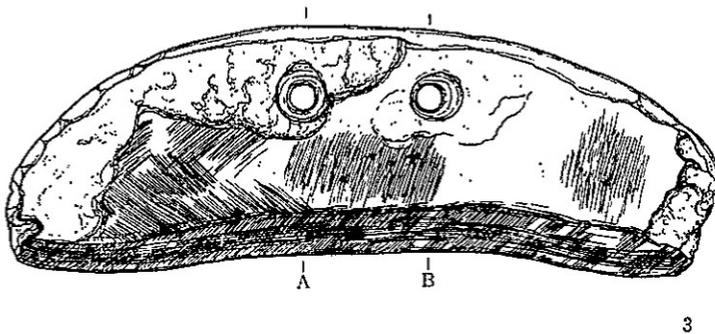
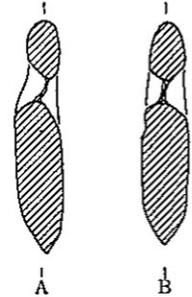
小型壺形土器(5)は、口縁端部を下外方に拡張し、腰部が低く張る。表面の磨滅が著しい。6とともに生駒西麓産の胎土である。

石庖丁(3)は、緑色片岩製でほぼ完形品。刃は両刃で内彎しており背は丸い。穿孔は、ねじれたような状況である(第14図・図版21)。

この弥生時代中期遺構面Ⅱについては、後述する若江北遺跡の南-第2地区でも遺構が確認されている。しかし、遺構密度や内容は貧弱であり、遺構面としての存続期間は短いものであったと思われる。



第13図 溝31出土遺物



第14図 溝31出土石庖丁

3 弥生時代後期の遺構と遺物 (第15・16図)

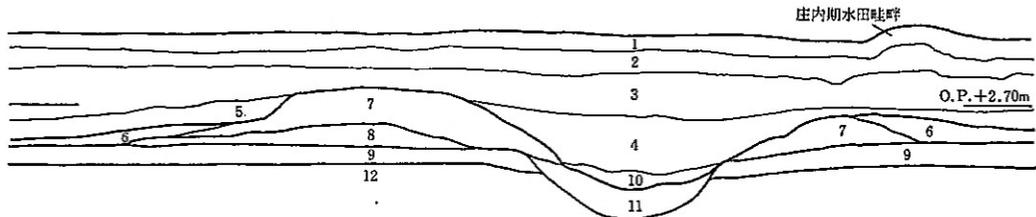
弥生時代後期に対応すると考えられる面は、第2地区で3面、第4地区で2面確認している。

しかし、厚い粘土の堆積と植物遺体を含む層が見られる状況で平面的には把握が困難であり、今回の調査では、遺構は溝と堤が確認された他は、遺物は検出してない。

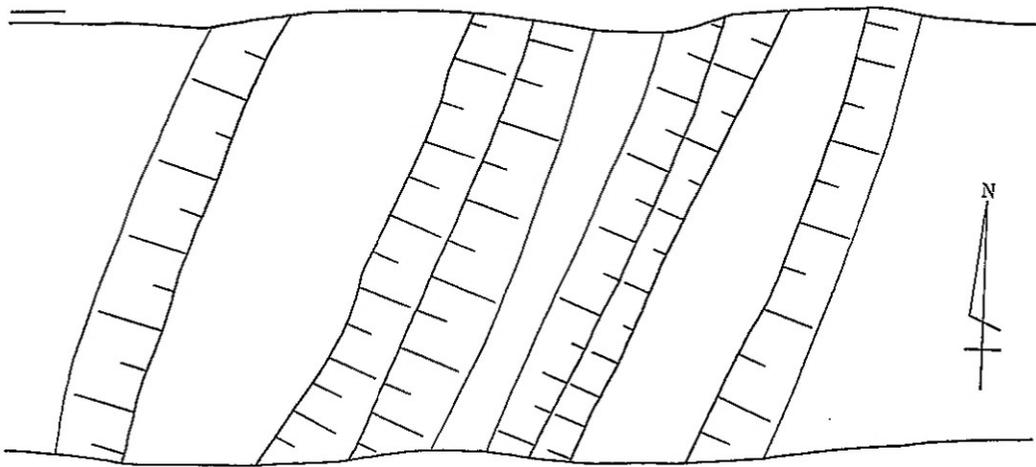
溝と堤は、第1次調査で後期Ⅲ遺構面とされる面で確認した。これは、第2地区と第5地区で検出し、前述した弥生時代中期のものと重複している。溝は、幅約1.0mで両側に0.2~0.3mの堤を盛っている。堤上面から測ると溝の深さは0.4mとなる。溝は東北から南西にかけてやや蛇行しながら流れている。堤盛土のうち、下の弥生時代中期と考える盛土は青灰色粘土、後期のものはその直上に暗灰色粘質土が盛られている。部分的には明確に区別しにくい場所もある。第5地区の西側堤では3回にわたって盛られている状況が確認できた。

これらの遺構は、水田に伴う水路と思われるが、他の地区では明確な遺構を検出し得ていない。

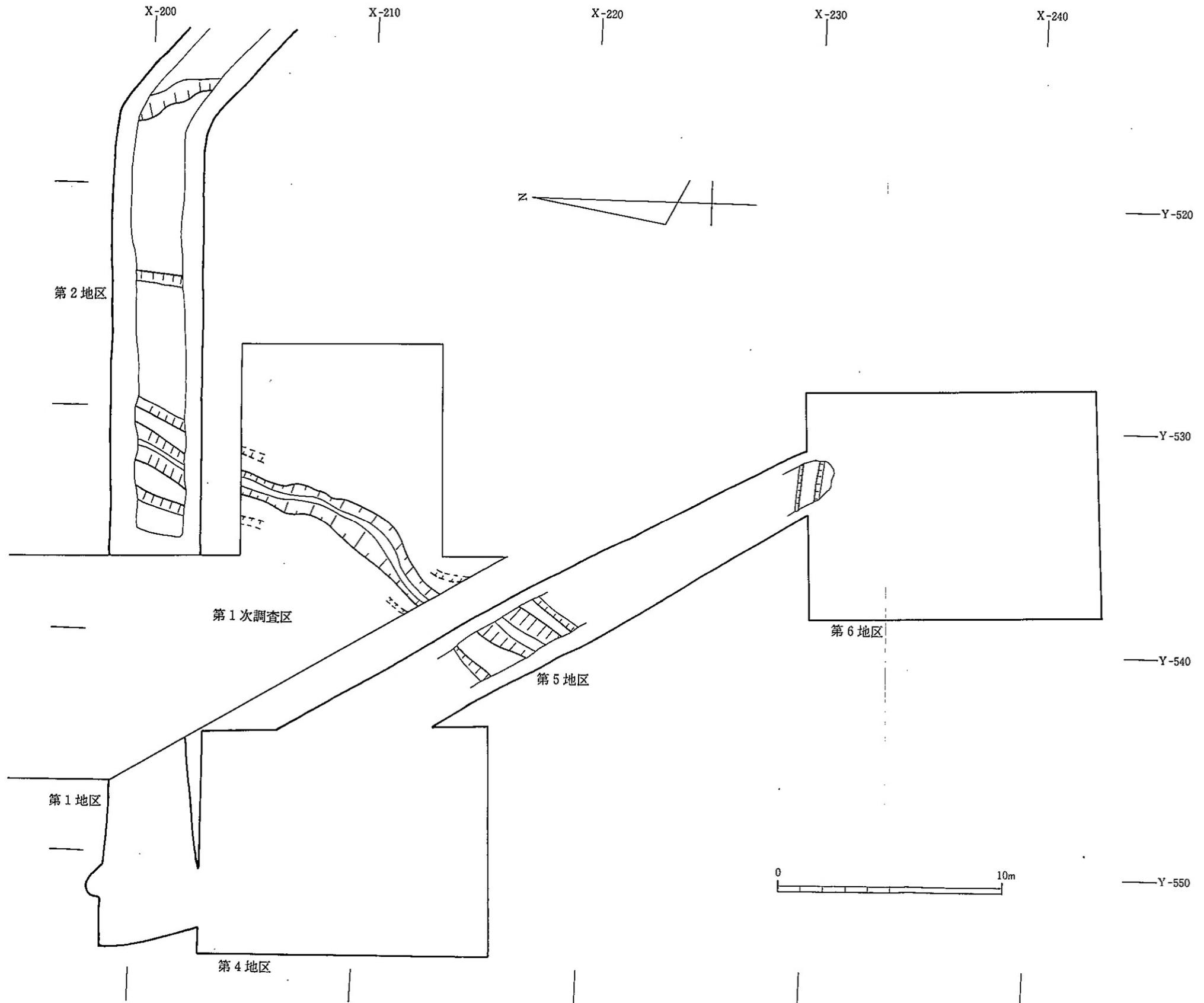
また溝下層から、第13・14図に示す遺物を検出したため中期と後期に区別してはいるが、実際は、中期末頃から後期始めにかけて連続して営まれた水路であると考えている。



- | | | |
|-------------------------|------------------|-------------------------|
| 1. 暗青灰色粘土(微砂含む)(庄内期水田層) | 5. 暗褐色粘土(植物遺体含む) | 9. 灰黒色粘質砂土 |
| 2. 黄青灰色粘質土(微砂混り) | 6. 灰色粘土(弥生後期水田層) | 10. 灰色粘土(微砂含む)[溝31(新)] |
| 3. 緑黄灰色粘質土 | 7. 暗灰色粘質土(堤盛土) | 11. 暗黒褐色粘土(砂混り)[溝31(古)] |
| 4. 暗褐色粘質土 | 8. 青灰色粘土(微砂含む) | 12. 青灰色微砂(弥生中期遺構面基盤層) |



第15図 第2地区、弥生時代中期～後期の溝と堤



第16图 弥生時代後期(Ⅱ)遺構面

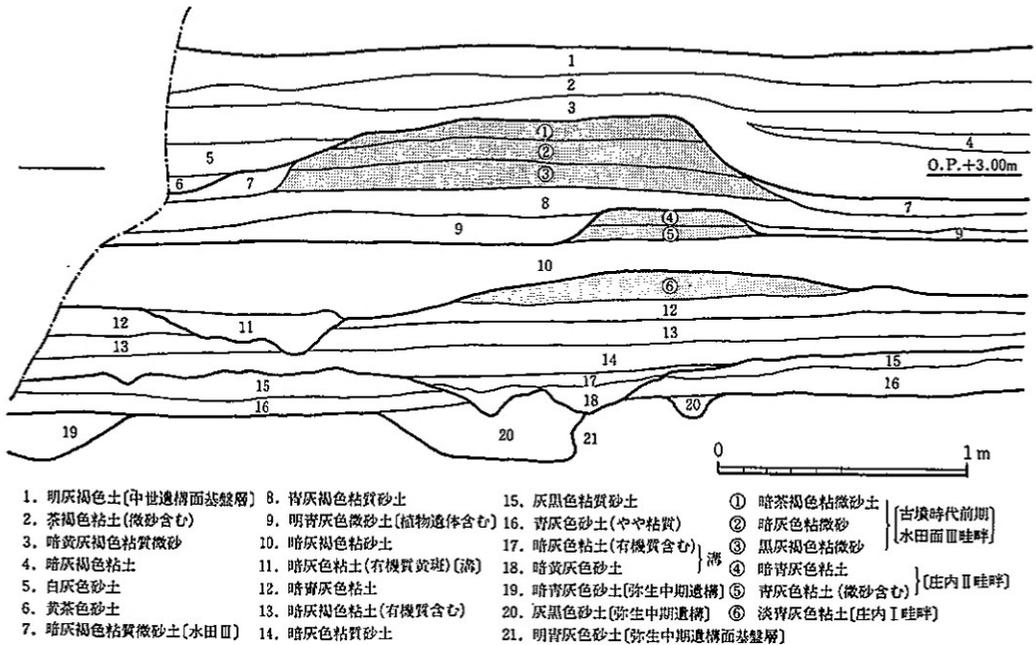
4 古墳時代前期の遺構と遺物（第17～25図、図版4・5・19・20）

古墳時代の遺構は、前期が3面を数える水田面を確認した。水田面は、前期（庄内式～布留式古段階）のもので3面認められた。第4地区では、3面共確認し、その重複状況を部分的にはあるが観察することができた。最も古い水田面は、弥生時代後期の水田と思われる粘土層上に畦畔を確認した。この水田面の時期の帰属が問題となるが、弥生時代後期～古墳時代初期にかけて営まれたと考えるのが妥当かと思われる。畦畔は下幅約1.6m高さ約0.1mのゆるやかなもので、すぐ西側に溝を伴っている。これは先の調査で、庄内Ⅰと呼ばれた水田面に対応しうと思われるが、上下層が同様の厚い粘質土層のため、平面的には検出できず、断面で認めたものである。他の地区では確認できなかった。

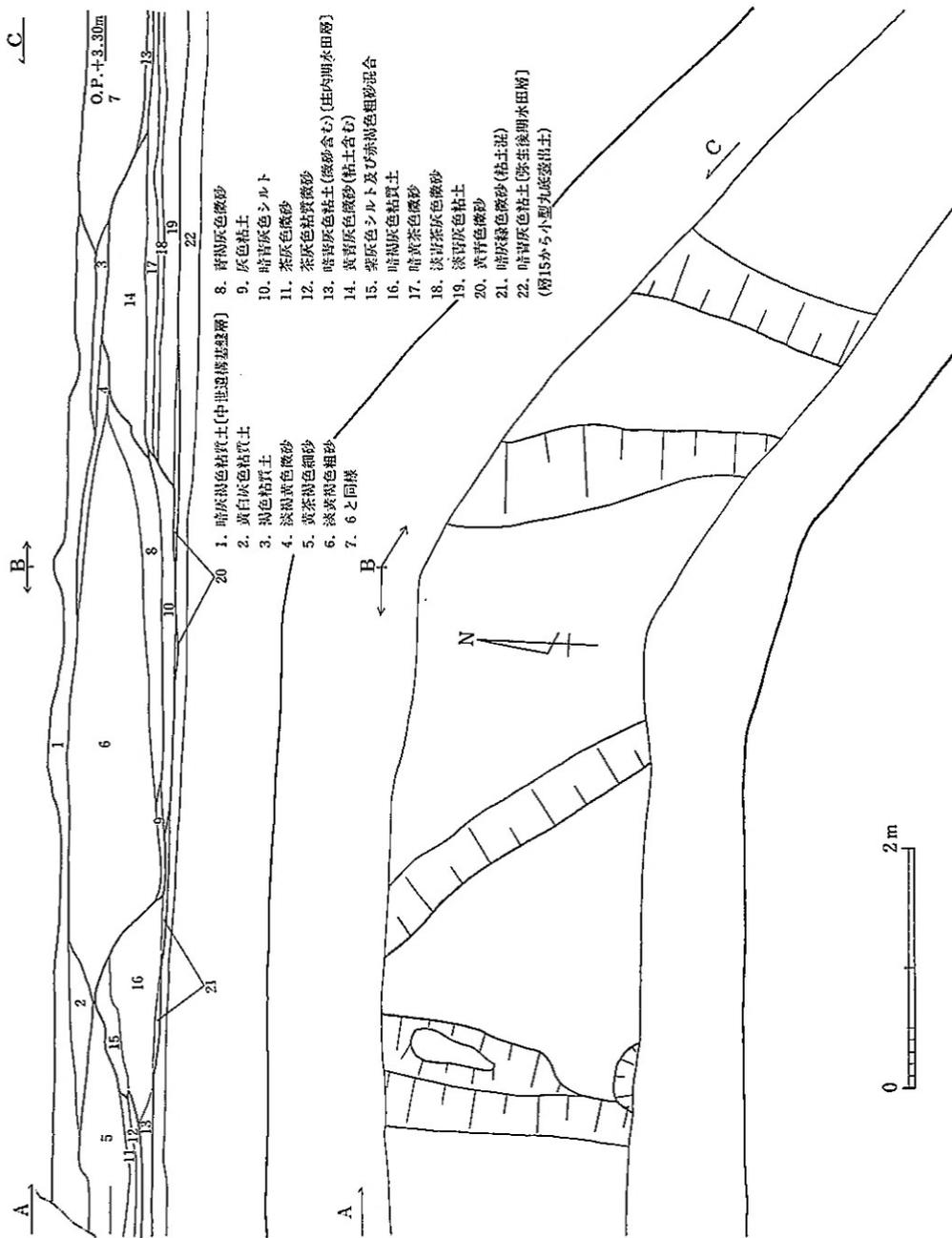
庄内Ⅰ水田上面には、微砂を含む粘土層が一面に広がっており、この上面に安定した粘土の堆積が見られる。これが第1次調査の水田面Ⅱ（庄内Ⅱ）に対応し、畦畔・足跡などを各地区で検出した。この水田面は、O.P.+2.7～3.1mに広がっており、北東から南西に向けて低くなっている。畦畔は、基本的に1～2回粘土を盛って形成されている。畦畔の大きさは、下幅約0.8m前後、高さ0.15～0.2m前後のものが大半である。

そのうち、第1・4地区及び第5地区でみられた畦畔は、一連のものと思われ、これより南西側には粘土層がみられるものの畦畔は認められなかった。第3地区では、東西に延びる1条の畦畔と、中央付近に大小の畦畔がややかたまって検出された。

水口と考えられる溝状の凹みは、第6地区の畦畔で認められた。

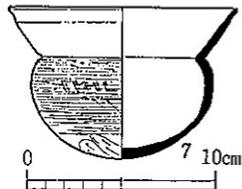


第17図 第4地区北端、古墳時代前期水田の重複状況

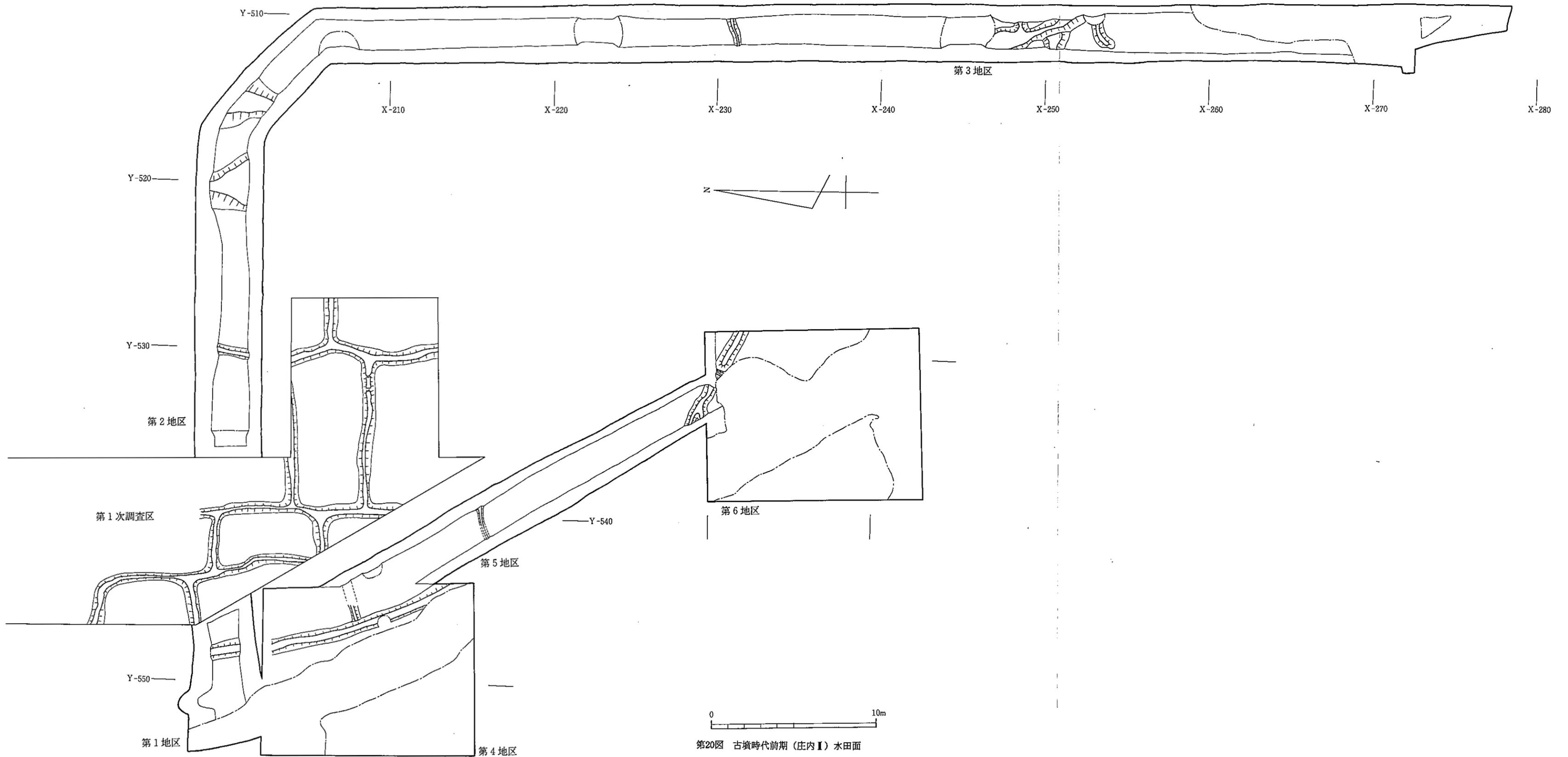


第18図 第2地区、古墳時代前期(庄内Ⅱ)水路

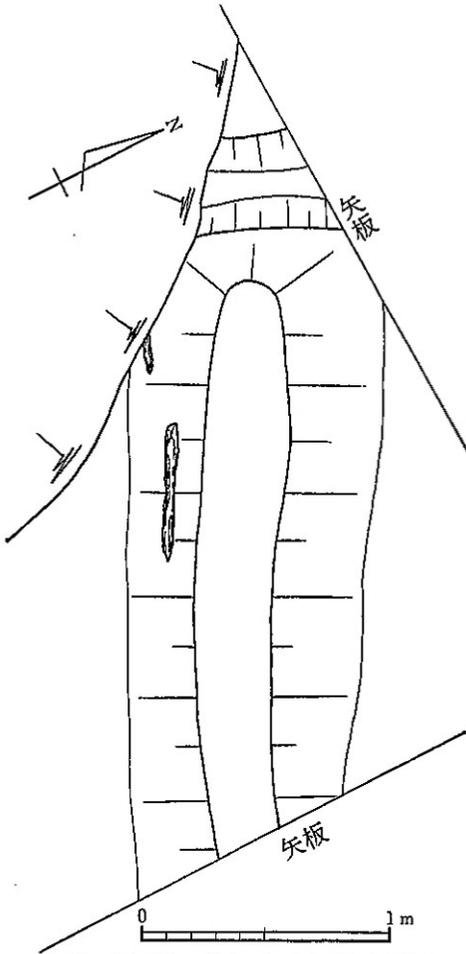
第2地区東端で検出された水路は、両側に0.5~0.6mの堤を盛り、幅約4m、堤上面から深さ0.6mを測る。水流は激しかったようで内部に砂が堆積している。水路底は、弥生時代後期の面にまで達している。堤の西側の上面には、シルトと粗砂の混合層が存在し、第19図に示す小型丸底壺が出土した。この層を盛土とするなら、この水路は、布留式期まで連続して営まれたと考えられ、庄内式期に造られた堤を布留式期に補修したと推定されよう。



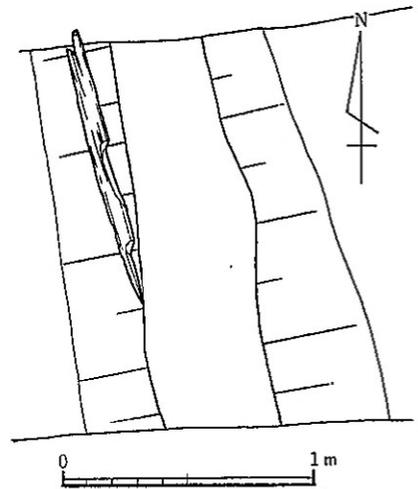
第19図 堤上面出土遺物



第20图 古墳時代前期(庄内Ⅰ)水田面



第21図 第6地区、水田畦畔内木片(1)



第22図 第1地区、水田畦畔内木片（梯子）(2)

庄内Ⅱの水田畦畔内では、第21・22図に示すように、木片が埋置されているのが認められた。

第21図は、第6地区の畦畔内の木片出土状況である。畦畔に平行して南側の斜面に埋置されていた。本来的には、畦畔盛土内に置かれ、その当時視認できるものではないのであろう。

第6地区では、2本の木片がみられ、畦畔内で約0.2m離れて存在する。西側のものは、現存長0.2mを測り、大部分攪乱で失われている。東側のものは長さ0.56mを測るが、2本共腐蝕が激しく加工の有無などを知ることができない。

第22図に示したものは、第1地区の水田畦畔での木片出土状態である。本例も畦畔西側の斜面に置かれていた。この木片は、長さ約1.2mを測るもので、腐蝕されてはいるが加工痕を認めることができた。これは、梯子の廃材と考えられ、2ヶ所に足かけ部の削り込みがみられる。

このように水田畦畔内に木片が存在する例は、今回調査の若江北遺跡、北-第1地区でも認められ、これも古墳時代前期の水田である。また、若江北遺跡第1次調査AトレンチSC701の水田畦畔からは、槽状木製品を始め、7点もの木製品が出土している。これらの例でも畦畔に平行して埋置されている点で同様であり、畦畔内に土器が置かれる例と合わせて今後留意しておきたい事実である。なお、弥生時代の水田畦畔では例を見ない。

ところで、水田は、長方形を呈するものが比較的整然と区画されている。第1・4地区周辺では長辺が南北方向、第1次調査4J地区の付近は、長辺が東西方向という区画の計画性が認められる。

第2地区東端の水路は、この水田面の主要な用水路として機能していたと考えられると共に、第1・4・5・6地区を走る畦畔は、この水田の縁辺を区画するものの可能性がある。

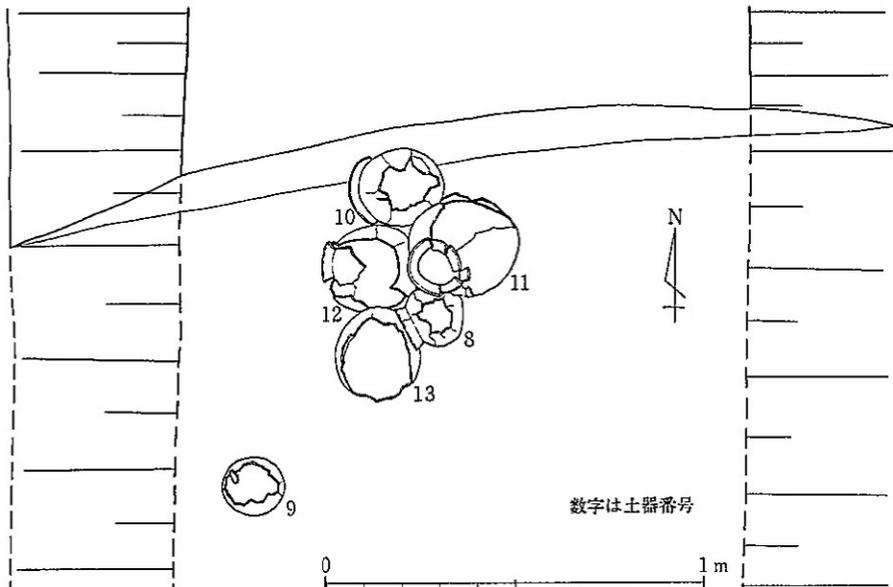
古墳時代前期水田面Ⅲ（第23～25図、図版5・20）

古墳時代水田面のうち、庄内Ⅱ水田面上には粘質の微砂が一面に堆積する。第1・4地区ではこの粘質微砂層内でやや粘土っぽい部分があり、土器が出土したことから畦畔と判明した。周囲には、薄い粘土層が広がっていた。他の地区では、対応層が薄くなっていたり存在しなかった。

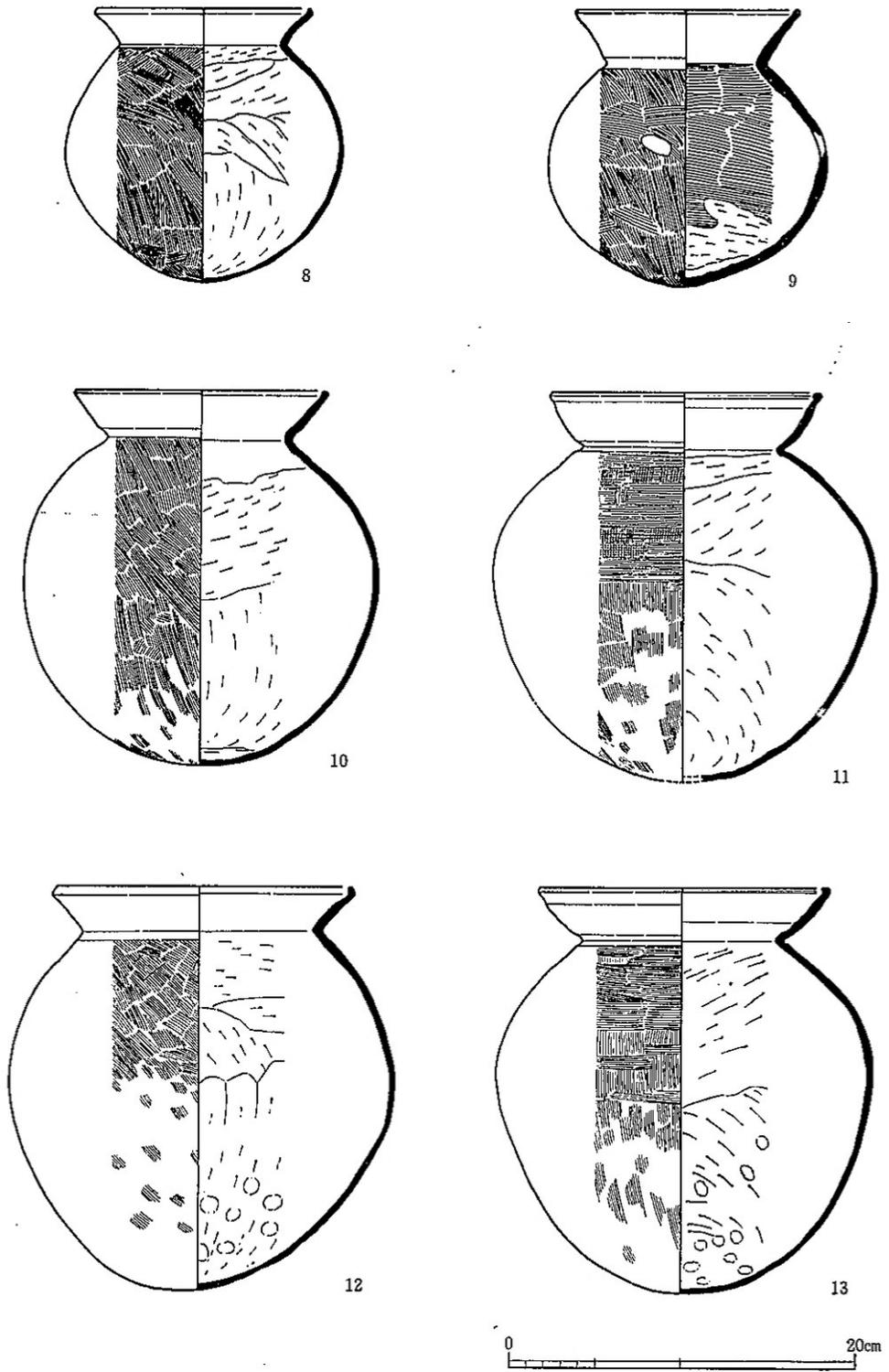
この畦畔は、下幅約2.1m高さ0.3mの大型のもので、3層にわたる盛土が観察される。今回の調査では南北に延長13mにわたって検出した。小畦畔は不明である。

第4地区では、畦畔内に6個の布留式甕が置かれていた。現在破損しているが本来完形品を置いたものだろう。9はやや南に離れており、他はひとつかたまりとなっていた。土器の周囲で掘り方などは見出せず、他に遺物もなかった。畦畔を盛る作業に伴い、何らかの目的で人為的に置かれたものと考えられる。この水田面は、庄内期から続けて営まれた水田の一部であろう。

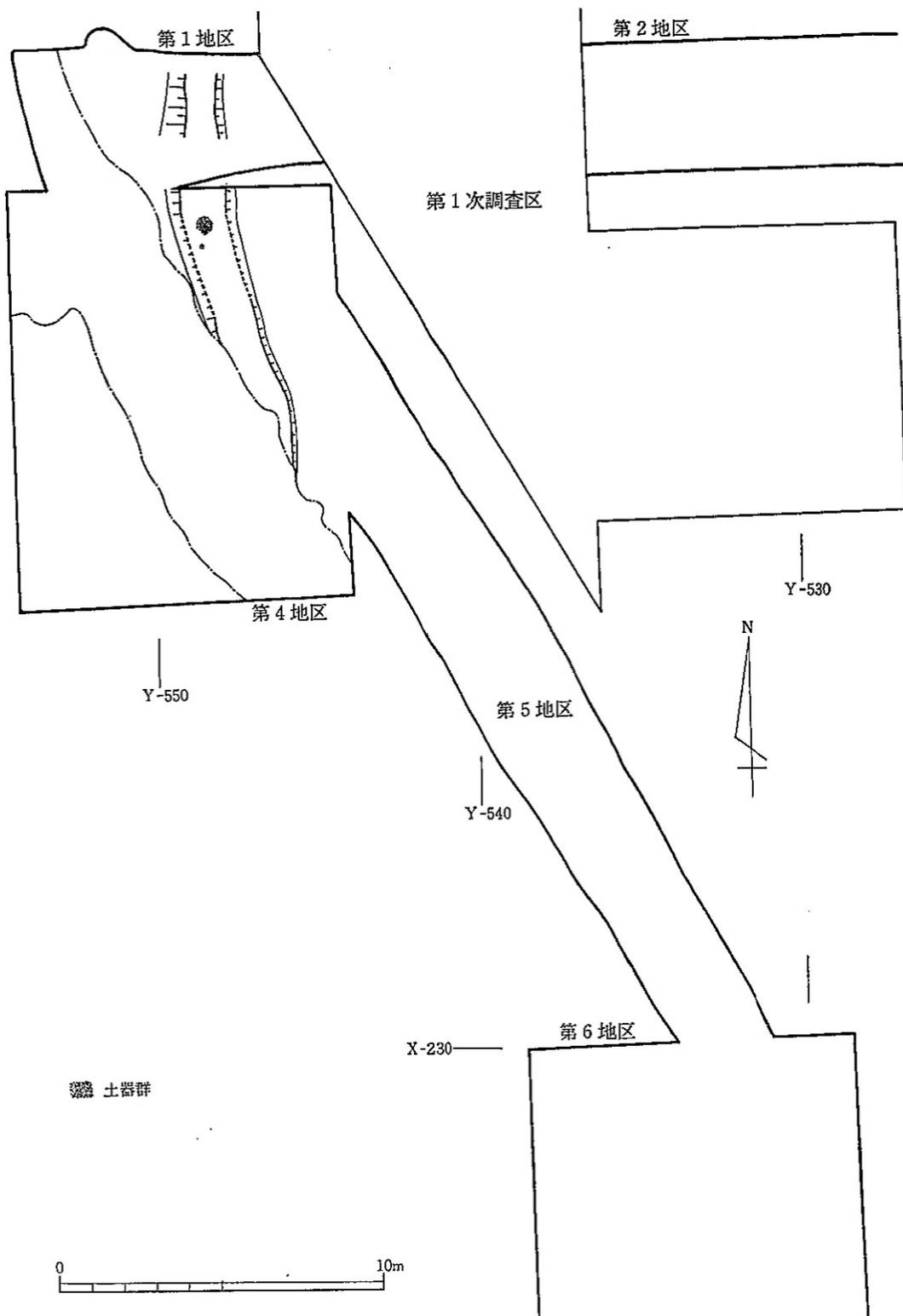
遺物は、第24図に示す。8・12は『く』の字形に鋭く外反する口縁部で、端部は内傾気味につまみ上げられる。外面は刷毛目調整、内面は篋削り調整される。底部は、8がやや尖り、12は丸底に近い。10は球形胴で丸底、頸部がしまる。口縁端部は丸くおわり、内方へわずかに肥厚する。内面の篋削りは頸部近くまで及ぶ。9は、やや扁平な体部と『く』の字形に外反する口縁部。端部は丸く、内面は凹む。調整は内外面に刷毛目を施すが、内面の下半は篋削り。器壁はやや厚い。体部には穿孔がある。11・13は、肩の張る体部と、内彎して立ち上がる口縁部をもつ。13は、端部が水平に肥厚し、内傾せずよく凹む。調整はともに外面が刷毛目、内面は篋削りである。どちらも丸底である。8・10・12は角閃石を含む生駒西麓産の胎土で、色調は8が淡褐色、他は暗茶褐色を呈している。9・11・13の土器は、上記3点とは胎土・色調が異なる。これらの土器は、煤の付着あるいは黒色の塗布物がみられ、内面に炭化物が残るものもある。以上6点は、庄内式甕の様相を残すものの、既に布留式甕の特徴を備えた布留式古相の土器群と考えられる。



第23図 古墳時代前期水田面Ⅲ、畦畔内遺物出土状況



第24図 古墳時代前期水田面Ⅲ、畦畔内出土遺物



第25図 古墳時代前期水田面Ⅲ

5 古墳時代後期～中世の遺構と遺物（第26～48図、図版6～10・21～26）

調査区全体に広がる黄色粘土を基盤として多くの遺構が検出された。遺構はほぼ全域にわたって確認されるが、後世の攪乱による遺構面の損傷部分が大きく、特に第4・5地区では農業用水管の、第3地区南半では工業用水管の施設工事によって大きく損なわれる他、第2地区西半や第3地区の一部では黄色粘土が削平され、下層の流水砂層（古墳時代中期）を露呈する。柱穴、井戸、土壇、溝等が検出されているが、うち溝87のみが出土遺物より古墳時代後期の所産と考えられ、他の大部分は平安後期以後の中世集落に関わるものである。遺構面上を厚く覆う茶褐色泥砂層からは多量の瓦器・土師器・陶磁器等の中世遺物に混じって、少量ではあるが古墳時代前期から平安時代にかけての遺物も出土しており、中世集落形成時にかなりの遺構が削平を受けたものであろう。集落遺構の終焉は包含層出土の遺物より見る限り室町時代前半に置けよう。以後、再びこの地は水田として利用されたと見え、水溜め、井戸、小溝等の水田関連遺構も検出されているが、それらの個々の年代を特定する事は困難である。

本遺構面に関わる遺物の多くは整理作業が進捗しておらず、今回は主要な遺構と遺物の紹介にとどめておきたい。

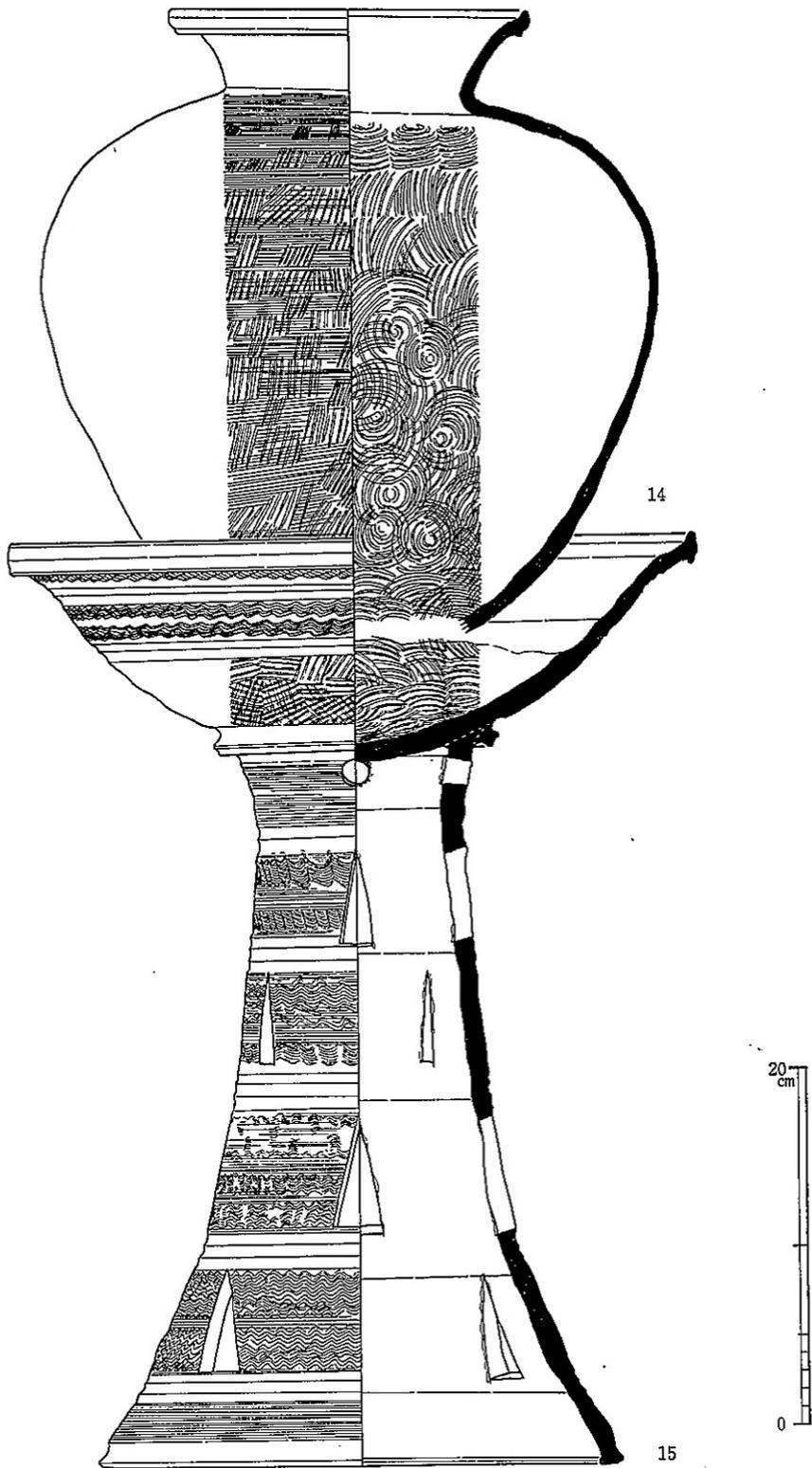
溝87（図版7）

第3地区北半を東南から西北へ蛇行して流れるようだが、検出長が短かく定かではない。西北方向への延長も検出されていないのは、第2地区西半が1段深く削平されているゆえであろうか。幅約4m、深さ0.6mの浅い鍋底状の断面形から自然流路の可能性も考えられる。溝内堆積は大きく2層に分けられる。下層は明らかに流水に伴う堆積で、砂を基調に薄い粘土層をもはさみ、遺物は含まない。下層堆積上面には須恵器器台と大小の甕が計3個体出した。甕（大）は横転し、甕（小）は天地逆転して検出されたが、いずれも投入時に既に完形を失っていたと考えられ、また器台は脚台部の大部分を失っている。この3個体はそれぞれの破片がほぼ集中していたとは言え、一部では破片相互に錯綜しており、また一部の破片はかなり離れた位置に遊離している。破損品となった3個体を一時に廃棄したかの出土状況である。これらの須恵器を覆うように堆積する層は灰褐色の泥砂で、上述須恵器破片の他、古墳時代土師器の小片を少量含む。

須恵器（第26・27図、図版21）

14は、甕で全体の約1/3が残っており、底部を欠く。口縁部径約20cm、胴部最大径34.5cmを測る。口縁部は、丸く収めつまみ上げられており、シャープさに欠ける。胴部外面には、タタキ目のち全体にカキ目を施している。内面は、一面に青海波文が認められる。胎土は、少し砂粒を含む程度で、色調は暗灰色、焼成は良好である。

15は、器台である。図面で完形復原できた。復原器高52cm、口縁部径38.5cm、脚端部径約30cmを測る。口縁部は、上下に拡張し端部は丸く収められている。受部外面に2条の凹線文帯がめぐり、上段には1条、下段凹線文帯間には2条の波状文が施されている。一部にカキ目も認められる。受部下半は、外面タタキ目で内面は青海波文が認められる。



第26图 清87出土遗物(1)

凹線文帯は、ナデを強くした程度なので、凹凸の条数は明確ではない。

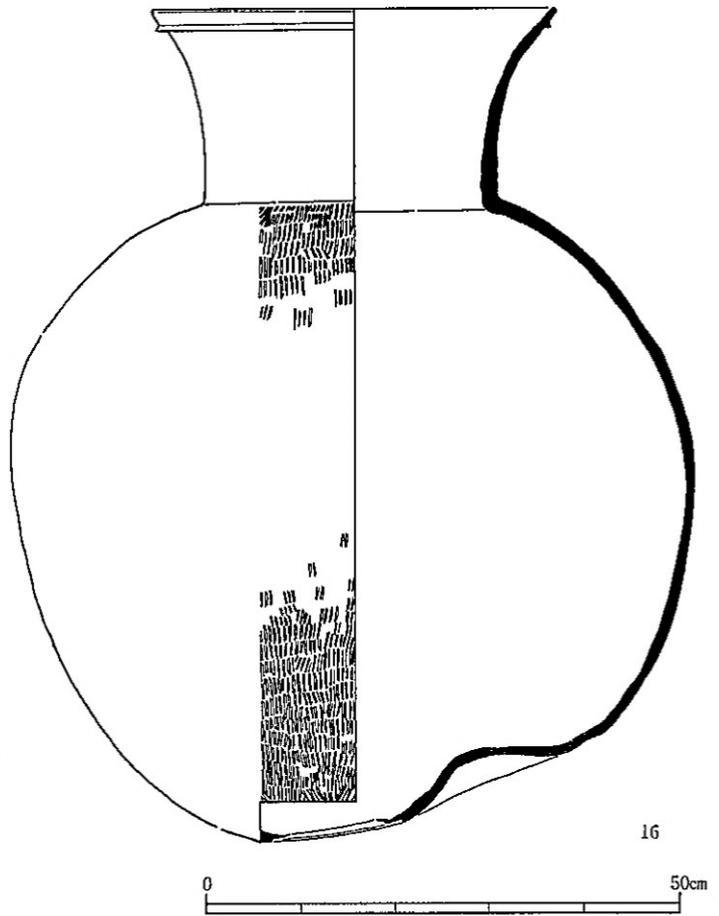
受部と脚部接合部には凸帯がめぐる。脚部では、5条の凹線文帯とそれに分割された6文様帯が存在する。最上段には、円形透し孔が4個、その下には4段にわたって三角形透し孔が各々4個千鳥に設けられている。ここには、波状文が施されるが、不明瞭なものである。他は全体にわたってカキ目が施される。胎土は精良、色調は暗灰色、焼成は良好である。なお凹線文帯はナデ状のもので受部同様凹凸の条数は明確でない。

16は、大甕である。形態的には壺形を呈する。破片はかなり不足するが、ほぼ完形復

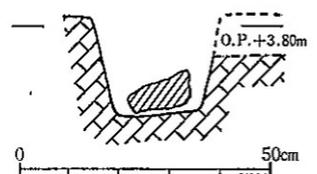
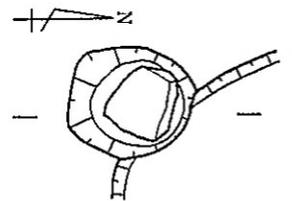
原することができた。器高約88cm、口縁部径約42cm、胴部最大径約72cmを測る。ゆるやかに外反する口縁部には、一条の三角形凸帯がめぐらされ、球形胴には外面肩部及び胴下半にタタキ目が認められる。その他内外面は、タタキ目や青海波文などは見られない。底には径約4.5cmの楕円形の穿孔がある。輪積みによる接合部が抜けたものであるが、使用時に抜けたものであろうか興味深い点である。胎土は大粒の砂粒を含み、色調は青灰色、焼成は良好である。陶質土器として報告されたものに非常に良く似た例がある。⁽¹⁾

柱穴群

建物群を構成したであろう柱穴は、第3・4・5地区で検出された。第4地区の柱穴は、比較的整正な掘方を持ち、一部に柱痕も認められた。第3地区の柱穴では、小型円形掘方内に花崗岩の小礎石が据えられている（第28図、図版10）。調査区の狭小さに加えて、遺構面がかなり削平を受けていると予想され、いずれも建物や柵列



第27図 溝87出土遺物(2)

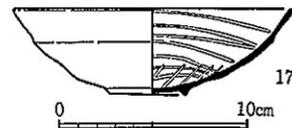


第28図 第3地区、柱穴1

としての復元はできていない。柱穴埋土からは少量ではあるが、瓦器・土師器の細片が出土し、中世の所産たる事を示している。

溝

古墳時代後期の溝87については先に述べた。また東西、もしくは南北に並行して検出された幅0.2~0.4mの小溝は近世以後の水田耕作に関わる溝であろう。他の大部分は中世集落に関わるものと考えられるが、個々の性格は必ずしも明確ではない。第1次調査で検出された溝62は、第2地区西端で東肩、第5地区南端で西肩が確認された。当初の掘り込み面は、中世集落対応面であるが茶褐色泥砂（中世遺物包含層）の堆積後も数回掘り直しが確認できる。本来、中世集落を取り囲む、もしくはその一部を画する機能を持った濠として掘られながら、集落廃絶後も位置を変える事なく、おそらくは水田耕作に関わる水路としてその命脈を保ったものであろう。この度重なる改修によってか、溝埋土よりの遺物の出土はほとんど無く、その掘削時期を特定する事はできなかった。溝88はごくわずかな延長だけが検出された幅0.6m、深さ0.1mの浅い溝であるが、その底部に密着して完形の瓦器椀1点が出土した。瓦器椀は、外面のミガキを全く失っており、13世紀中葉の所産と考えられる（第29図）。



第29図 溝88出土遺物

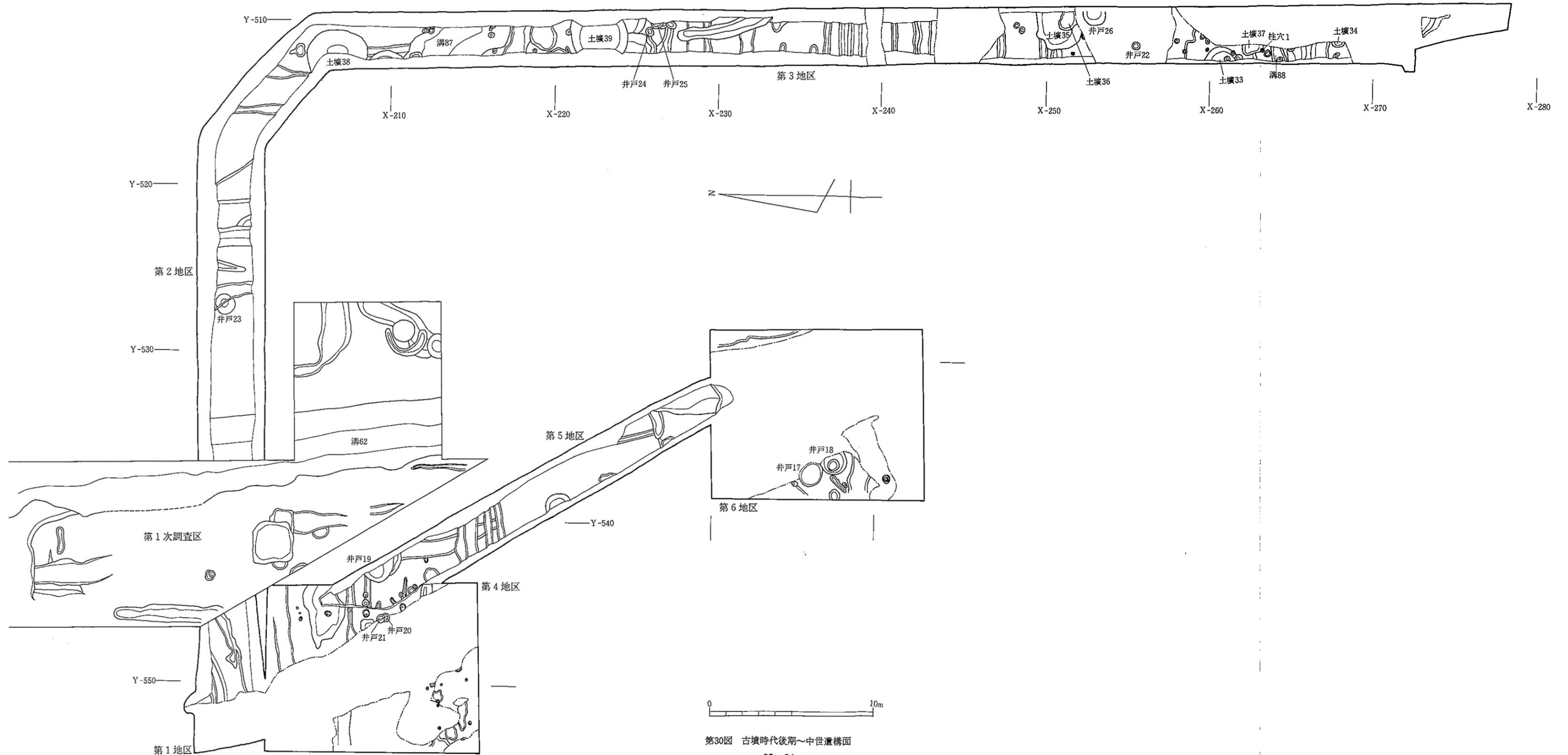
井戸

10基の井戸が検出されたが、攪乱によって損なわれるもの、大きく削平を受け底部のみを検出したもの、調査区外に延びるため全形を確認できないものなどが多い。多くの井戸の掘方は黄色粘土と砂層を貫き、粘土層（古墳時代前期水田層）の上面をわずかに窪ませて底部としており、流水堆積砂層より取水した事を示す。井戸19及び26のみは更に深いものとみられるが、ともに底部までの調査は実施していない。豊富な遺物を含むものについては、以下やや詳しく紹介する。

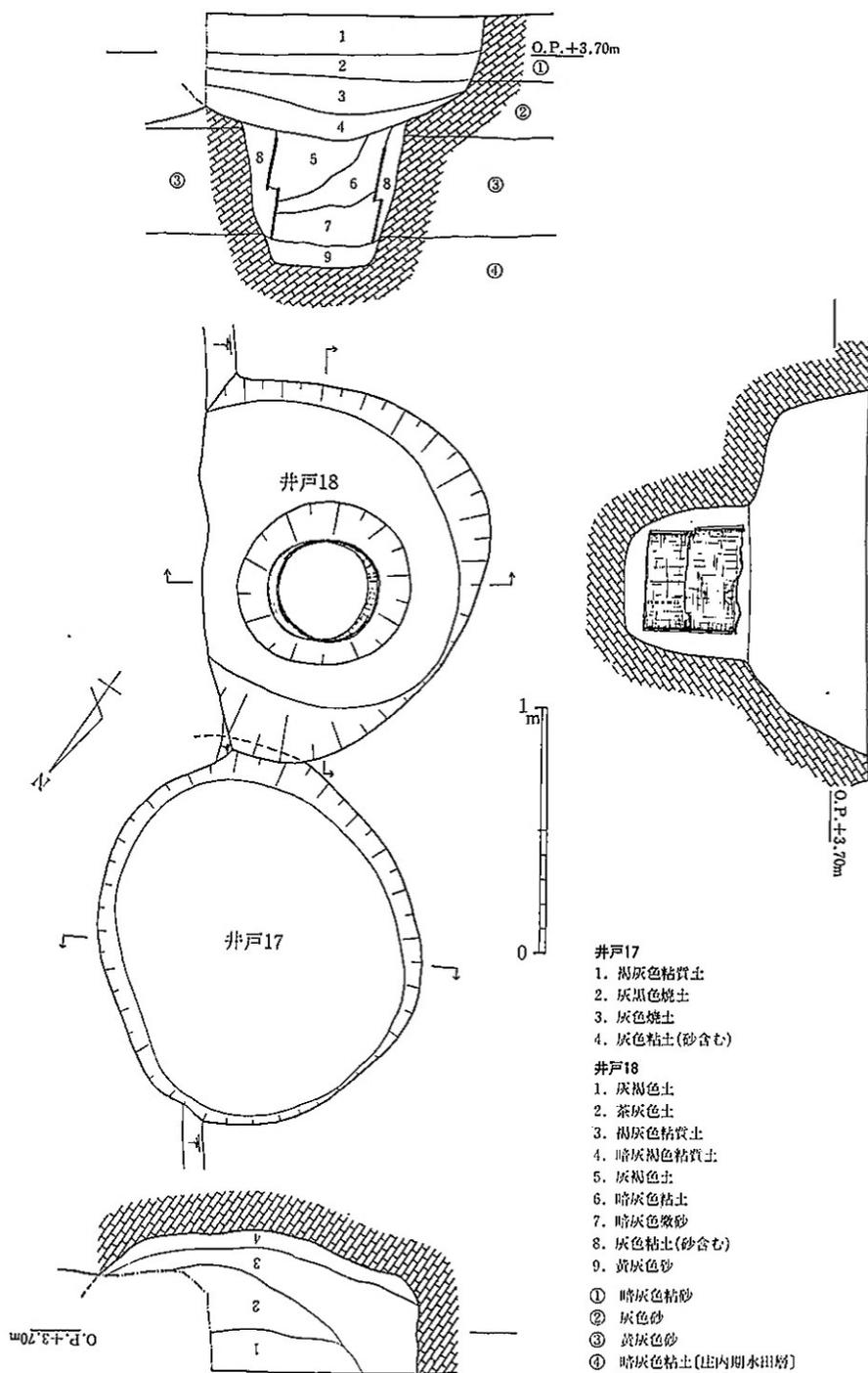
井戸17（第31・32図、図版8・23・26）第6地区で検出。直径1.5mの円形プランに復元できるが、北東肩部は農業用水管施設時に破壊されている。また一部は井戸18と重複しており、本井戸が先行する事が確認できる。検出面よりの深さ0.55mを残すが、これは上面をかなり削平された結果と考えられる。埋土は3層に大別でき、中層は焼粘土塊を含む炭・灰層で、焼粘土塊にはスサが見られる。焼失家屋の土壁であろうか。遺物の大部分はこの中層から出土している。

遺物は黒色土器の椀が6点、土師器の大皿が9点、小皿が30点、土釜が5点、甕が1点を数える他、少量の埴輪片が混入している。瓦器は含まれていない。

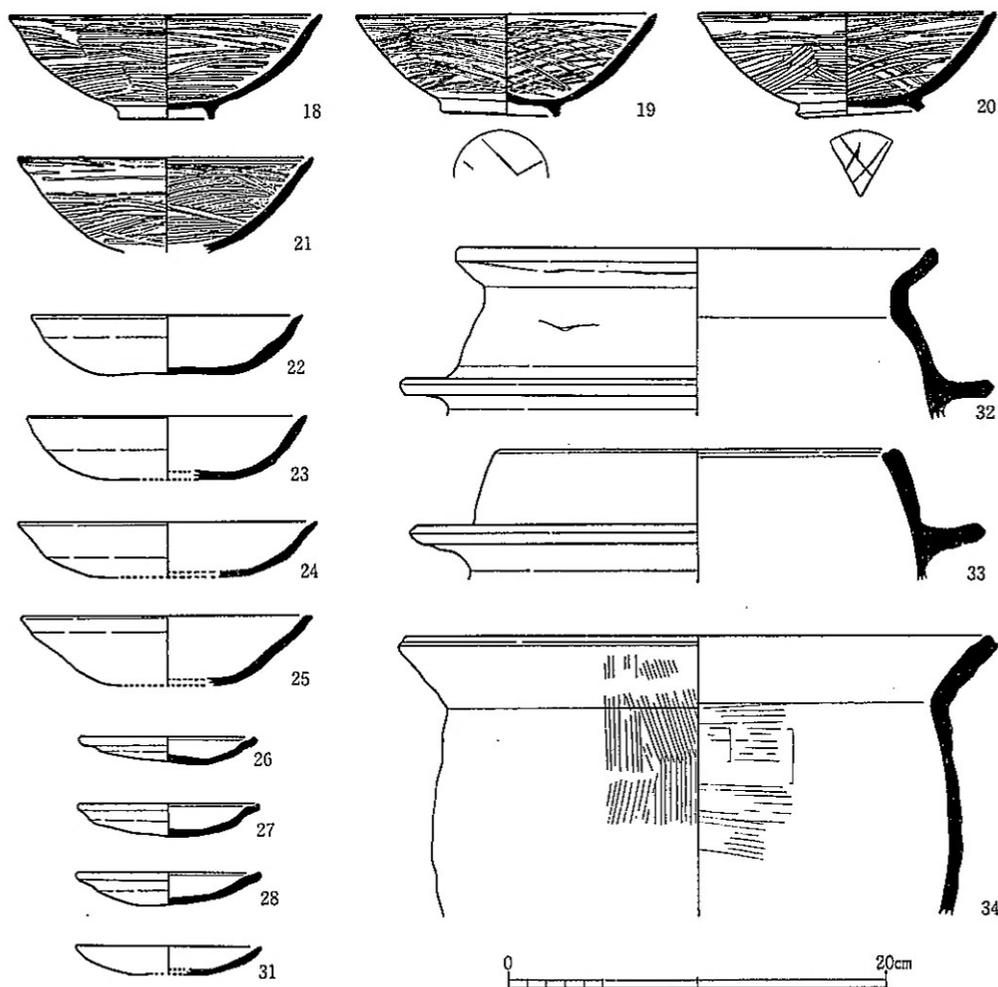
椀は全て黒色土器B類であるが、細部ではかなりの差異が見られる。口縁部を単に丸くおさめる19の他は、その端部に幅3mm程度の太く鈍い沈線が見られるが、21では2条施され、20では平担面をなすように施されるなど必ずしも定形化したものではない。19、20では外面ヘラミガキの下にヘラケズリが認められ、特に19では口縁端部まで施される。他は不明。外面のヘラミガキは明確な分割性は持たない。また内側面も必ずしも水平方向には巡らず、19などでは斜格子状を呈する。見込み部のヘラミガキは20が乱方向に、21が平行線状に施されるが他は不明。19、20の底



第30図 古墳時代後期~中世遺構面



第31図 井戸17・18



第32図 井戸17出土遺物

部外面には鋭い刃先のヘラ、もしくは針状工具による細い刻線が焼成後に施されている。

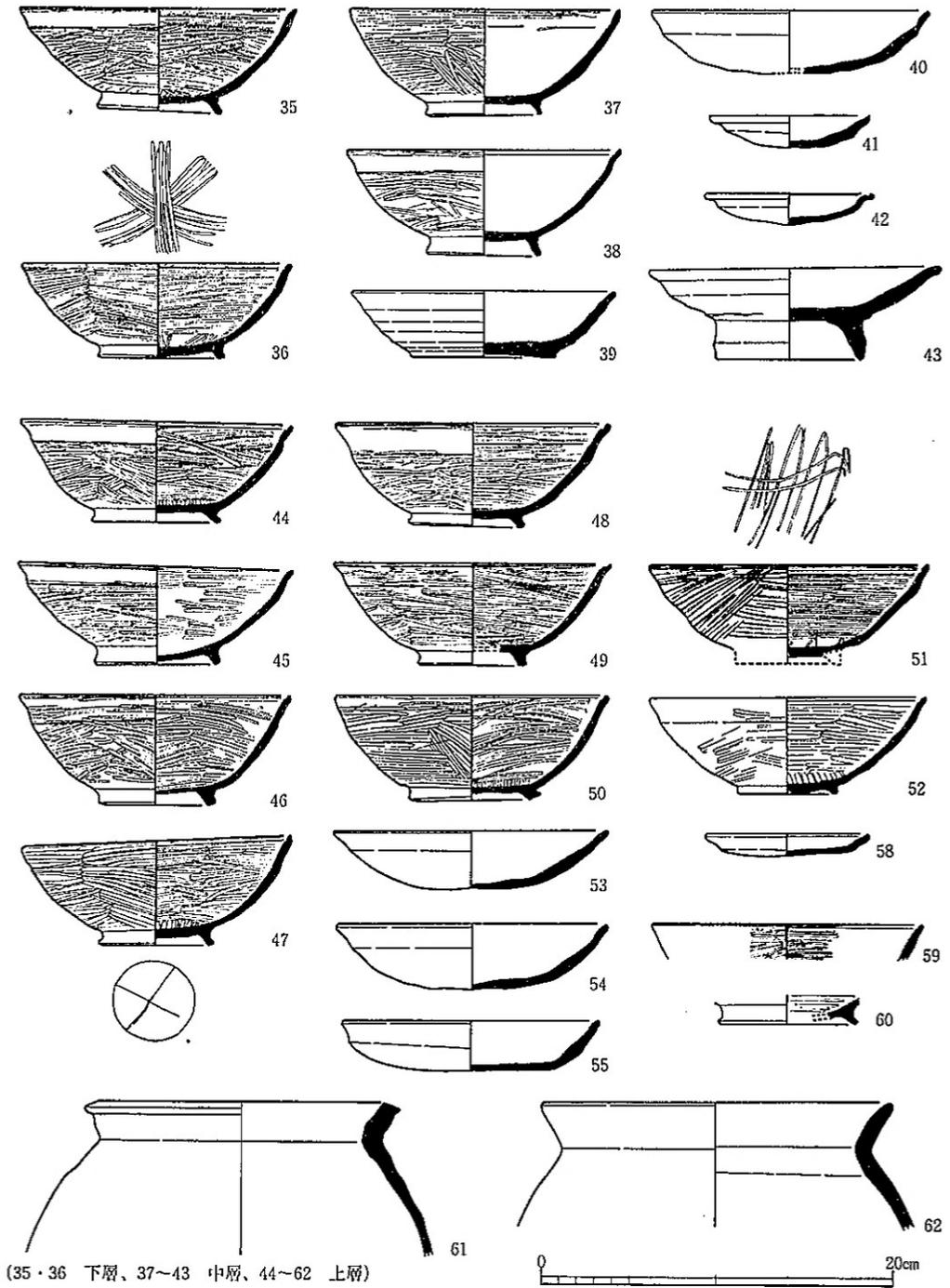
土師器の小皿は、大部分が口縁部を内側に巻き込むように肥厚させるが、1点(31)のみは外面に全く調整を加えない粗雑な作りで器形の歪みも著しく胎土も砂質。土釜には2種類見られる。

32は菅原の分類に依る河内 B₁ 型に当るが、33は同分類に該当するものが見当たらない。33は生駒西麓産とされる胎土である。甕(34)は内外面ともハケ調整を施し、土釜とともに煤が付着する。これらの土器群は瓦器椀成立の直前に位置付けられよう。

井戸18 (第31・33図、図版8・23・24) 井戸17の東南に接して掘られ、明らかに後出する。直径1.5mの円形に復元できる。掘方の底部を更に一段深く掘り下げて曲物2段を据える。曲物の直径は40cm。埋土は曲物掘方埋土(下層)、曲物内埋土(中層)、曲物埋没後の埋土(上層)の3層に大きく分けられる。中・上層は井戸17と同様に多量の灰・炭と共に焼粘土塊が含まれる。遺物は中・上層から多量に出土した他、下層からも2点の瓦器椀が出土している。

下層から出土した2点の瓦器椀はともに約1/2大の破片である。35は橋本分類の和泉型に属し、

外面ヘラミガキの下にはヘラケズリの痕跡が明瞭にうかがえる。見込み部のヘラミガキは乱方向。36は口端部内面に鋭い沈線を巡らし、体部内面のヘラミガキはレコード圏線状に密に施される。外面のミガキは3分割され青海波状をなす。見込み部には6~9条の3方向の平行線状ヘラミガキを交差させて施す。⁽⁴⁾大和型の範疇に含め、川越編年のI-C型式に相当するものか。



(35・36 下層、37~43 中層、44~62 上層)

第33図 井戸18出土遺物

中層からは瓦器椀が2点、須恵器杯が1点、土師器大皿が1点、小皿2点、台付皿が1点出土している。瓦器椀は2点とも内面に煤状炭化物の付着が著しい。38は口縁部内面に幅の広い鈍い沈線を巡らし、外面はヘラケズリの痕跡が著しい。39はロクロ成形による杯で、底部には廻転糸切り痕が見られる。軟質で土師器に似る。台付皿(43)は作りが粗雑で、ヨコナデも粗い。上層出土片と接合された。上層出土の瓦器椀は13点を数えるが、うち3点(51、52)は大和型もしくは楠葉型に属する。他は和泉型であるが、その多くは口縁端部直下に沈線を巡らす。沈線は大和型とは異なり幅の広い鈍いもので、より端部に接して施されるため、段状となるものもある。48の内面には煤状炭化物が付着し、47の底部外面には刻線が施される。また数点の黒色土器B類椀も出土している。本遺構出土遺物の多くが完形か大きな破片であるのに比べて黒色土器は、小破片ばかりである(59、60)。埋土への混入の可能性もある。10数点出土している土師器大皿の大部分(53、54)はやや深く丸い底部から大きく口縁部を伴うが、やや小型の1点(55)のみは、平坦な底部とやや内彎する口縁部を持つ。小皿(58)も10数点の出土を見たが、全て口縁部を屈曲させ端部が肥厚する。成形が粗雑で個体差が大きい。甕(61、62)は2点出土した。砂を含み、火熱の痕跡が著しい。他に小片であるが土釜片も出土している。

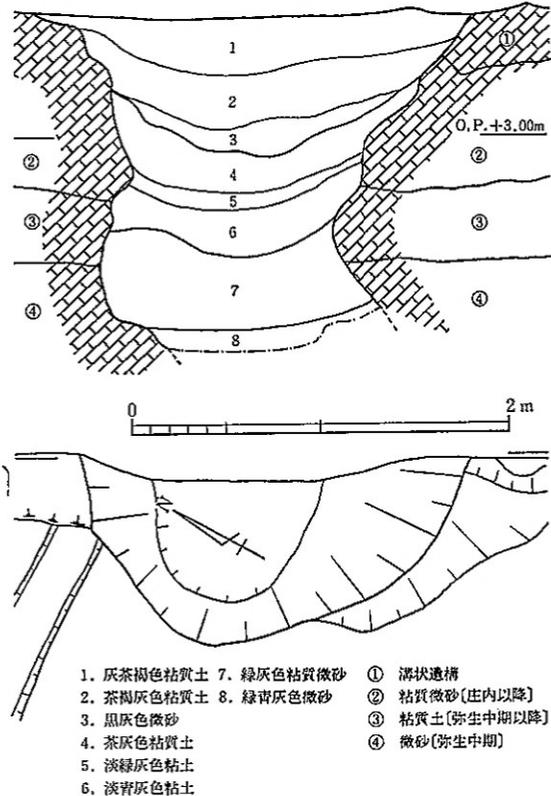
なお本遺構からは多量の瓦器椀が出土するにもかかわらず、瓦器小皿は全く確認できない。

これらの土器から本遺構の時期を、井戸17に次ぐ瓦器椀成立直後に求める事ができよう。

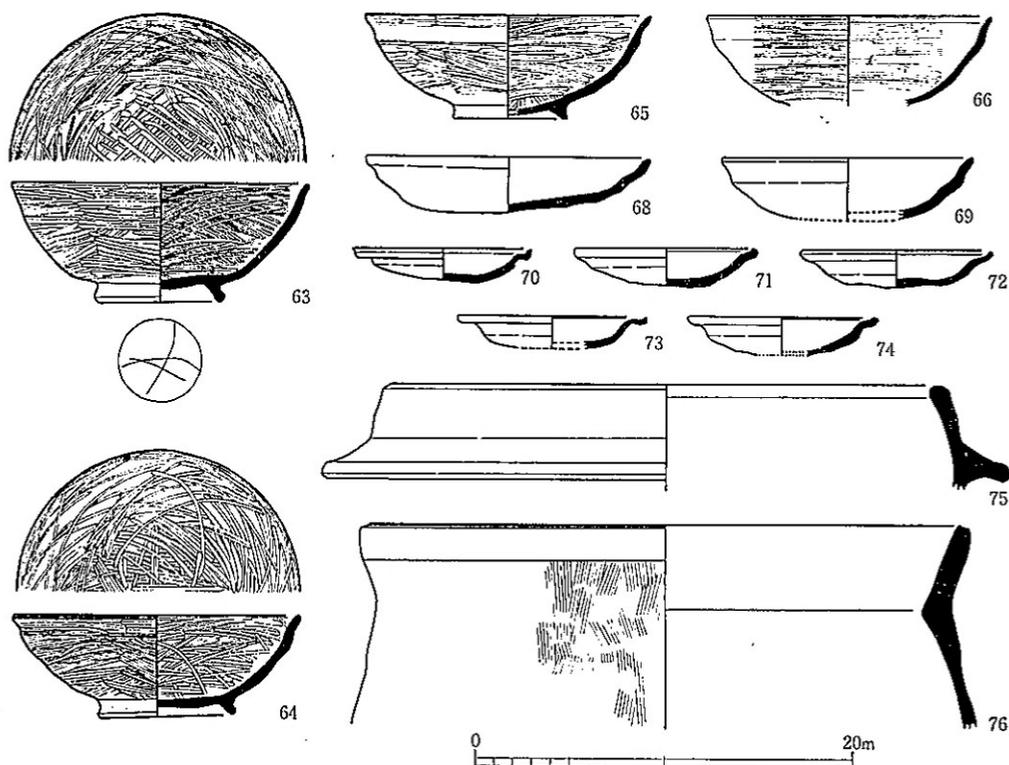
井戸19 (第34・35図、図版25・26)

第5地区の北端近く、トレンチ西北壁にかかって半円形に検出された。直径約2mの円形に復元できよう。調査は現地表面下2mまでで中止したため、井戸底面は確認していない。曲物や木組井筒等の痕跡は確認できず、素掘りの井戸と考えられる。埋土には少量の炭化物や焼粘土塊を含む。

出土遺物の点数はかなり多いが、瓦器椀や土師器皿の一部を除いて小破片が多く、個体数の確認は困難である。瓦器椀の見込み部のヘラミガキは格子状(63)、平行線状(65)、乱方向(64)と様々に施されている。63の底部外面には刻線が見られる。また炭素を全く吸着せずに橙黄色



第34図 井戸19

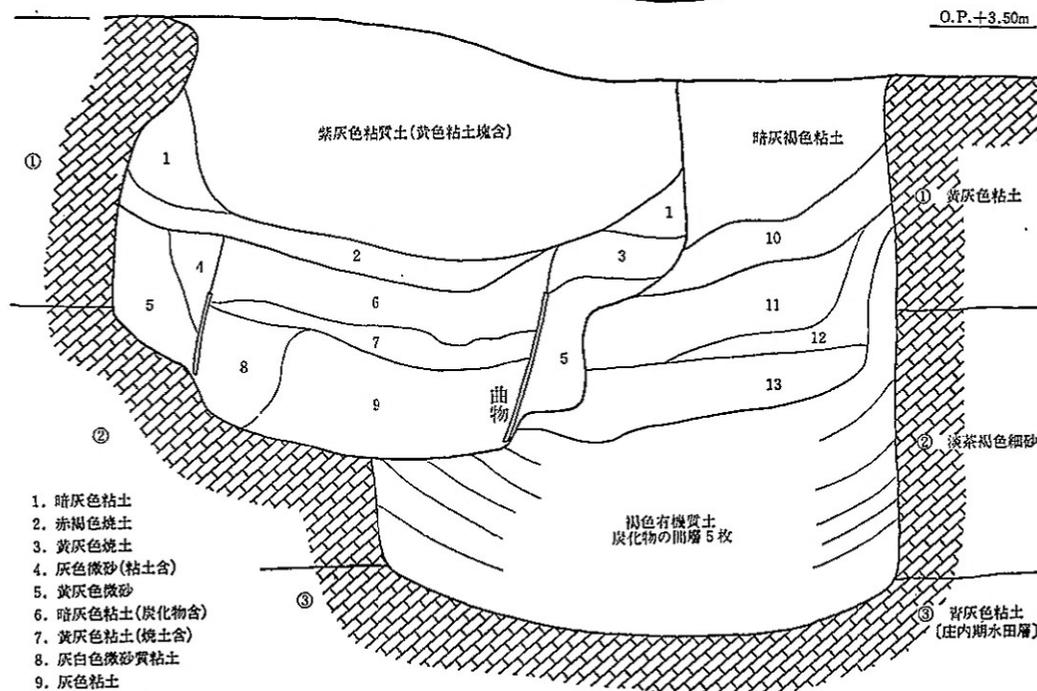
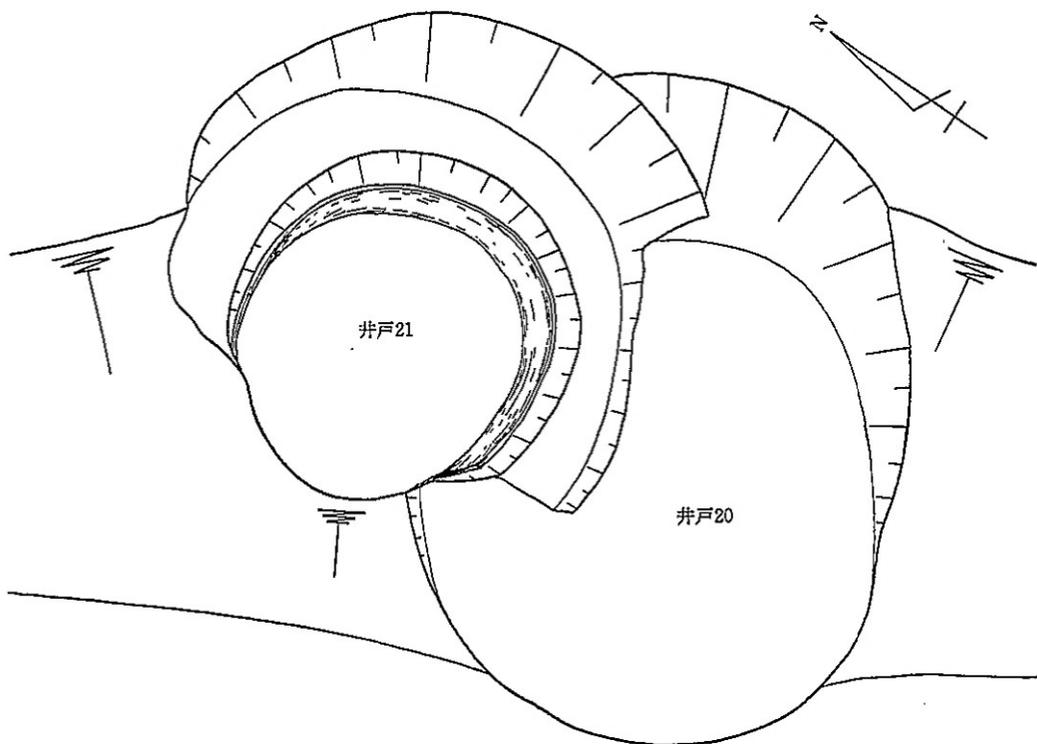


第35図 井戸19出土遺物

を呈する個体 (67、写真のみ) もある。66は大和型で川越編年の I-C 型式に当ろう。土師器小皿の大部分 (70~72) は成形が粗雑で器壁も厚いが、73、74の2点のみは器壁がやや薄く、表面調整も丁寧に施され胎土も精良である。平安京城において多量に出土する土師器に似る。搬入品と考えれば、他個体はこれを模倣した在地の土器であろう。75は内傾する口縁の端部を丸くおさめる土釜で、口縁の外反しないのは井戸17例と併せて2点のみの出土である。他に胎土から河内 B₁ 型、大和 B₁ 型に当ると見られる土釜片も出土している。甕 (76) は外面にハケ調整、内面にナデ調整が施される。この他、白磁の椀・皿の小片、及び火を受けた砥石片も出土しているが、瓦器小皿はない。和泉型瓦器椀の口縁部に沈線は見られず、井戸18よりは後出の要素と見られる。

井戸20 (第36・37・38図、図版8・22・25) 第4地区で検出されたが農業用水管施設で損壊を受けている。井戸21に先行する。直径0.8~0.9mの円形に復元でき、深さ0.6mを測る素掘りの井戸である。埋土は大きく2層に分かれる。下層は何層ものビート質の薄い有機土からなり、上層は焼土を多量に含み、井戸廃棄時の人為的な埋土と考えられる。遺物の大部分は下層より出土した。

瓦器椀が8点の他、小皿が2点出土した。椀 (77、78) はともに緻密なヘラミガキの下にヘラケズリ痕が観察できる。見込み部のヘラミガキは78が平行線状に、77が周縁部と一体となって乱方向に施される。小皿 (79、80) は、外面底部まで緻密なヘラミガキが全面覆い、見込み部は乱方向

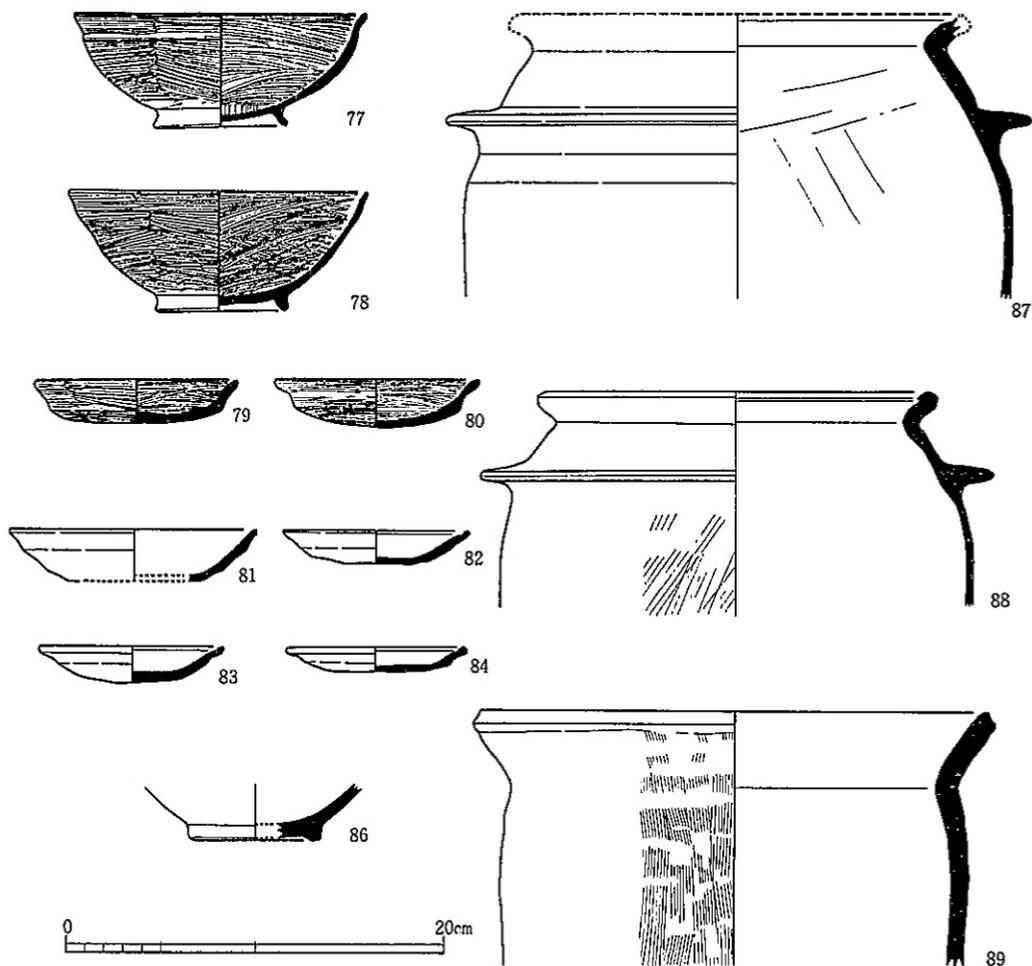


1. 暗灰色粘土
2. 赤褐色焼土
3. 黄灰色焼土
4. 灰色微砂(粘土含)
5. 黄灰色微砂
6. 暗灰色粘土(炭化物含)
7. 黄灰色粘土(焼土含)
8. 灰白色微砂質粘土
9. 灰色粘土
10. 2と同色同質
11. 灰褐色粘土(微砂含)
12. 灰白色微砂(炭化物含)
13. 灰白色細砂

(断面は攪乱によって削られた壁面の図化)

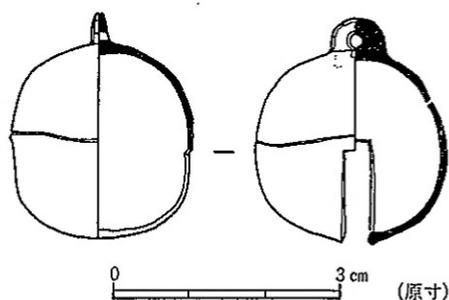
0 50cm

第36図 井戸20・21



第37図 井戸20出土遺物(1)

に施される。土師器大皿(81)はやや小振りの1点のみが確認できる。11点を数える小皿(82~84)は全て口縁部を屈曲させるが、端部の肥厚とともに退化が著しい。土釜は河内 B₁ 型(87)と大和 B₁ 型(88)が1点出土した。88を含めて本遺跡出土の大和 B₁ 型土釜は全て灰褐色の微砂質の胎土で、他との識別は容易なので搬入品であろう。甕(89)は、1点のみの出土で、外面をタテハケ、内面をナデによって調整し、土釜とともに煤の付着が認められる。他に白磁碗の底部片(86)も出土している。



第38図 井戸20出土遺物(2)、銅鈴

下層からは、青銅製の鈴が出土した。外径2.6cmの球状の体部に半円形の鈕を伴い、鈕には直径1.5mmの孔が穿たれる。厚さは体部で0.7~1.0mm、鈕部で2mmを測る。体部の一部を欠くが窓部の幅は3mmに復原できる。鑄造によるものであろうが、鈕部にはヤスリ状工具による整形痕が

見られる。また体部中央には刻線が巡らされ、これも同様にヤスリ状工具によるものか。

瓦器小皿の出現や土師器小皿の形態の変化などは井戸19より更に新しい要素である。井戸17～20出土土器は瓦器椀成立直前から、その成立、定形化への変化を示す11世紀代の好資料であろう。

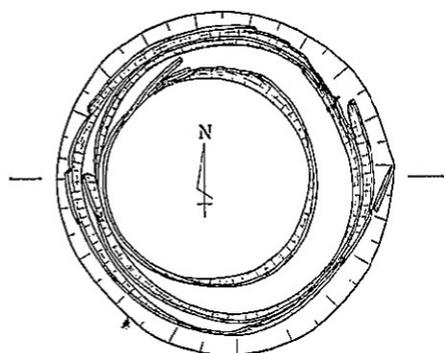
井戸21 (第36図、図版8) 井戸20の埋没後、ほぼこれに重複して掘られている直径0.8m、検出面より深さ0.6mの掘り方に、曲物1段が据えられて検出された。掘り方は浅いが、その底部はかろうじて湧水層たる流水堆積砂層に達している。曲物は腐朽が著しく、かろうじて確認できたに過ぎないが、直径43cm、高さ21cmを測る。井戸廃絶時の埋土には焼粘土塊や炭化物を多量に含むが、曲物裏込め土にはほとんど含まれない。

瓦器や土師器の細片少量が出土したに過ぎず、時期の特定はできない。

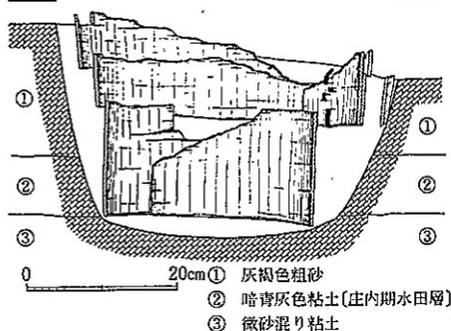
井戸22 (第39図・40図、図版9) 第3地区南半部、攪乱墳の底部に検出された。掘り方の直径は0.45m、深さは0.3mを残す。検出面自体が既に古墳時代中期の流水堆積層に当り、掘り方底部は古墳時代前期水田層を貫いて下層の礫層にまで達している。井筒として曲物3段が検出されている。最下段はほぼ完存し、直径28cm、高さ15cmを測る。中段は直径36cmで、この曲物のみ下方にまわしの側板を巡らしている。本遺跡出土曲物の中で確認できた唯一例である。直径39cmの上段は中段に重なるように据えられている。また掘り方東側の裏込め土中には7cm幅の板材が見られる。井戸底に密着して瓦器椀2点、土師器小皿1点、底部片1点が出土し、土師器小皿のみが完形に復元された。土師器底部片(93)の器種は不明であるが、底部外面に糸切り痕が見える。瓦器椀の形態は井戸20より明らかに後出のものであり、土師器小皿も大きく変化している。

井戸23 (第41・42図、図版22・26) 第2地区で浅い土坑状に検出された。埋土は、灰・炭化物層からなり、破片ではあるが多くの遺物が出土した。

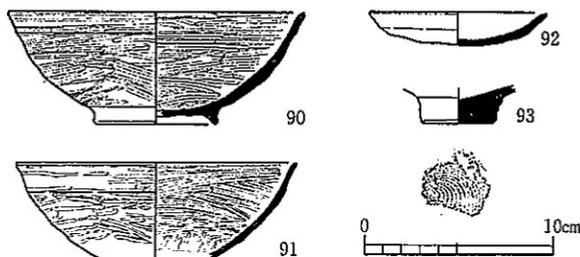
94は和泉型、95は大和型の瓦器椀で、後者は川越編年のⅡ-B型式に当ろう。瓦器小皿(96)のヘラミガキは見込み部には斜格子状に施すすが、周縁部及び外面



O.P. +3.00m



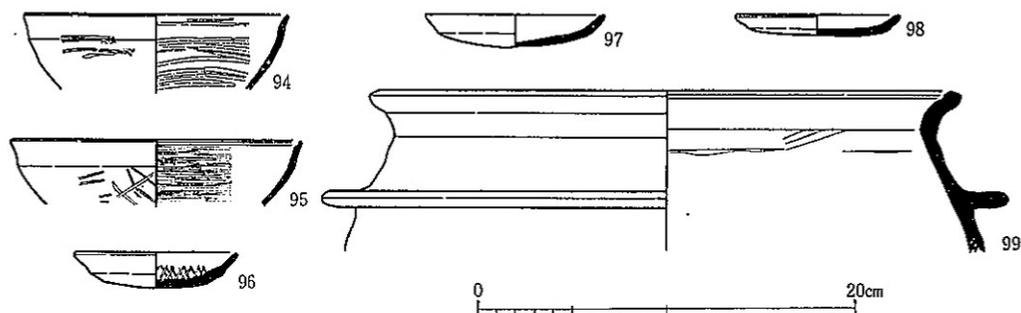
第39図 井戸22



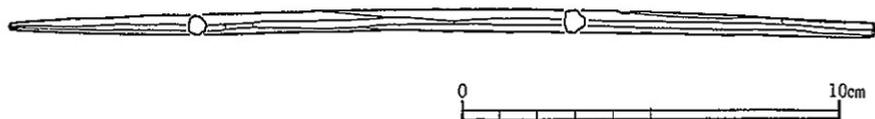
第40図 井戸22出土遺物

には施さない。土釜(99)は、大和 B₁ 型に属するが、口縁部の肥厚はごくわずかとなっている。

箸状木製品も1点出土している。7～8角形の棒状に削り出し、端部はやや細くなる。樹種は未鑑定。



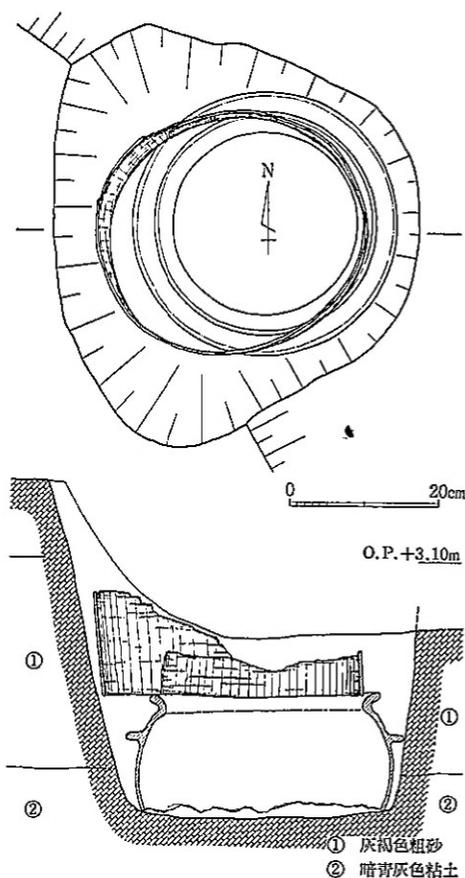
第41図 井戸23出土遺物(1)



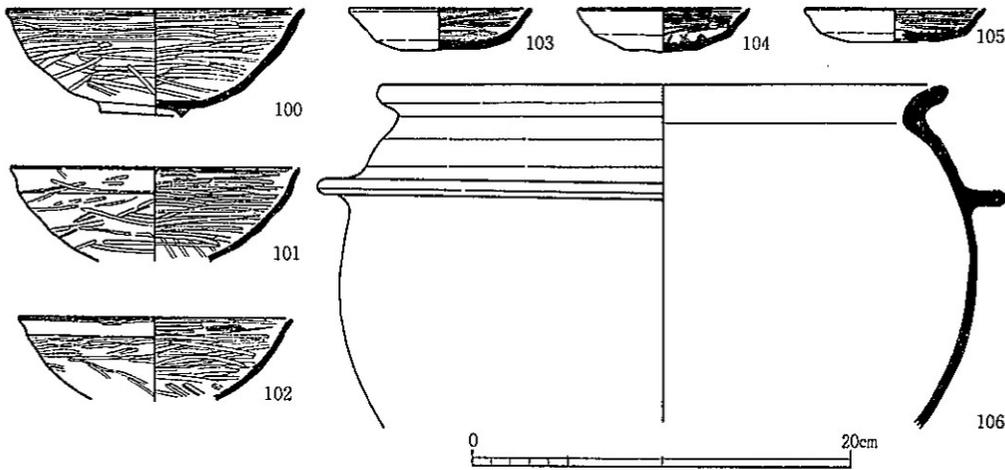
第42図 井戸23出土遺物(2)、箸状木製品

井戸24 (第43・44図、図版9・26) 第3地区中央やや北寄りに検出された。掘り方の直径は0.6mを測り、深さは、検出面から0.5m残存していた。掘り方底面には、底を抜いた土釜が据えられており、口縁部に乗せたように曲物が検出されている。曲物は1段だけが確認できた。検出面は既に流水堆積砂層を露呈しており、掘り方底部は古墳時代前期水田層を掘り穿めている。井筒として利用した土釜は河内 B₁ 型に属する土師器で、外面に煤が、内面に炭化物が付着しており、炊飯具として使用されたものの転用であろう。

井筒内埋土からは瓦器の椀と小皿が出土している。瓦器椀(100~102)の外面ヘラミガキはかなり粗いものとなっているが、未だ分割性はかろうじて留めている。内面見込み部には、100、101が格子状に、102が平行線状に施される。瓦器小皿(103~105)は内面のみにヘラミガキが施され、見込み部の形状は103が平行線状、104、105が斜格子状を呈する。



第43図 井戸24



第44図 井戸24出土遺物

井戸22～24は、瓦器碗においてヘラミガキの省略化が始り、また口縁部を屈曲させた土師器小皿を伴わない等の点から、その年代を12世紀代に考える事ができよう。

井戸25 井戸24のすぐ東南に接して検出された。直径0.6m、深さ0.5mの小土坑であるが、埋土中より曲物片が検出された。掘り方底部は井戸24と同様に古墳時代前期水田層にまで達している。

出土遺物は少量の瓦器・土師器細片に限られ、時期を特定する事はできない。

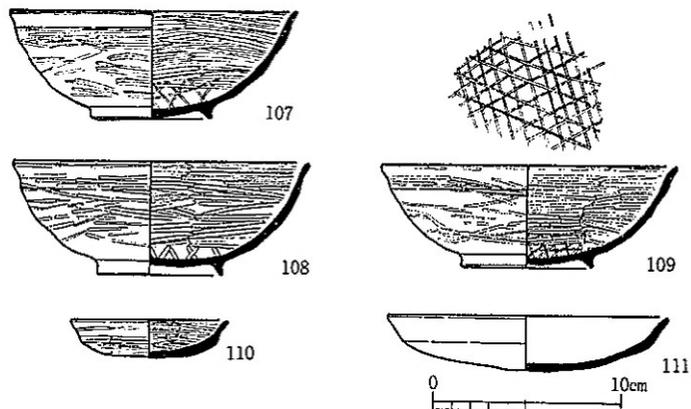
井戸26 第3地区南よりの攪乱部に検出された。木製桶を井筒として利用し、2段を検出したが更に深くなると考えられる。桶には底板の痕跡が見られず、転用品ではない。籠は竹製で3段に巡る。近世以降の農耕用井戸であろう。

土坑

検出された土坑の数は多いが、特に第3地区南半部に集中する。主要なもののみを簡単に紹介する。他は不定形の浅い落ち込みが多く、遺物も土器細片をわずかに出土するに過ぎない。

土坑33（第45図） 第3地区西壁にかかって半円形に検出された。平面形が円形を呈するものであれば直径2.3m前後に復原できよう。深さ0.5mとやや深いが、この付近では遺構のベースたる黄色粘土が厚いため、井戸の取水層となっている流水堆積砂層にかろうじて達しているに過ぎない。従って井戸の可能性は低いと考えた。埋土は灰や炭化物の他、多量の焼土塊を含む。

出土した土器の点数はかなりの多いが、大部分は小片で埋土への混入であろう。本遺構



第45図 土坑33出土遺物

に伴うと考えられるのは瓦器椀3点、瓦器小皿1点、土師器皿1点のみである。瓦器椀(107～109)は外面ヘラミガキの粗雑になりつつある段階のものであるが、内面は十分に密に施される。見込み部のミガキは3点とも3方向の平行線を交差させている。瓦器小皿(110)の外面には粗くはあるが、底面に至るまでヘラミガキが施されている。土壌35・36とともに12世紀代の所産であろう。他に火熱を受けた花崗岩片も出土している。

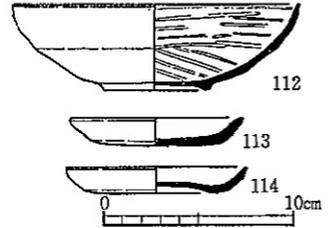
土壌34 (第46図) 第3地区の南端で損壊をまぬがれた一部だけが遺存して検出された、深さは0.3mと浅いものである。

埋土からは瓦器椀1点、土師器小皿2点と、他に土器細片少量が出土している。13世紀代に属するものであろう。

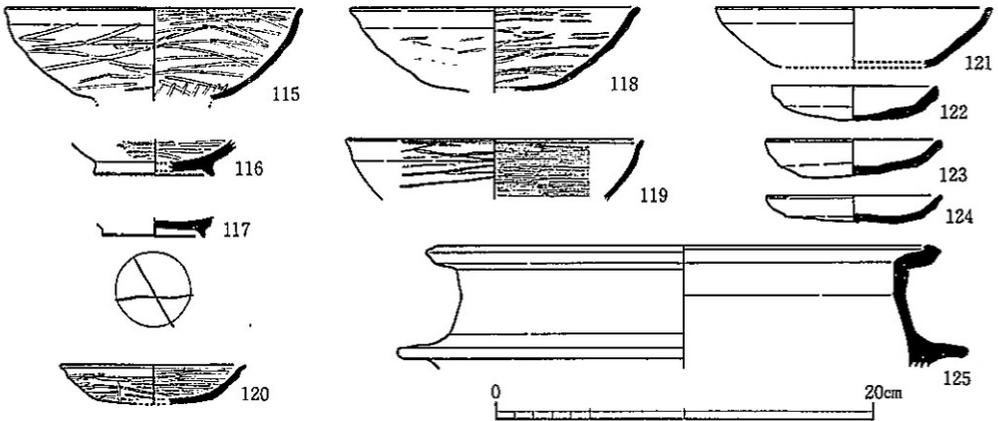
土壌35 (第47図、図版26) 全形は確認できないが直径3m前後の不整円形に復原できよう。深さ0.4mの浅い鍋底状を呈し、

埋土には炭化物を少量含むが焼土塊は見当たらない。埋土中より瓦器の椀・小皿、土師器の大皿・小皿・土釜等が出土している。

瓦器椀(115～119)は外面ヘラミガキの粗略化が著しい。119は大和型。115は炭素を全く吸着せず灰色を呈する。117の底部外面には刻線が見られる。土師器小皿のうち、122の底部外面には板目が見られる。土釜(125)は大和 B₁ 型に属する。



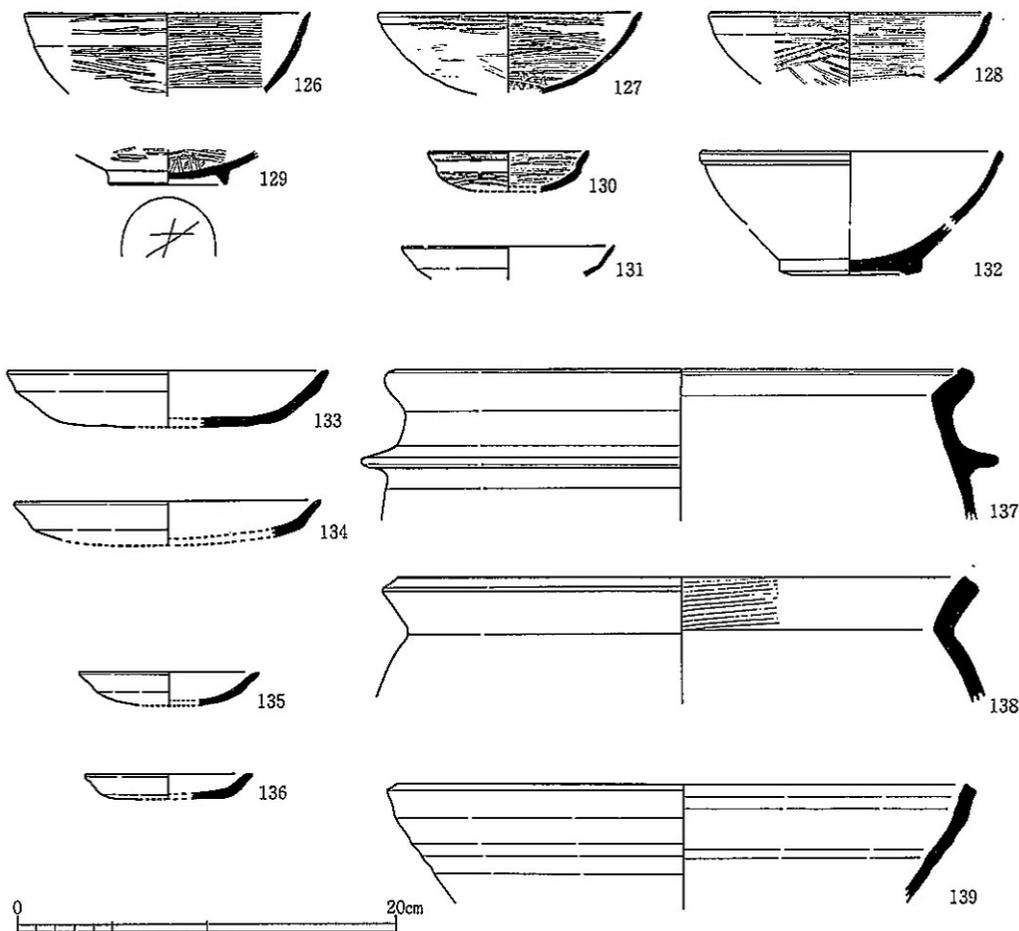
第46図 土壌34出土遺物



第47図 土壌35出土遺物

土壌36 (第48図、図版26) 土壌35埋没後、その上面から掘り込まれた土壌で、直径1.5m前後の不整円形を呈するものか。深さ0.4mを測る。出土土器の点数は多いがいずれも破片である。

瓦器椀には大和型(128)、和泉型が双方みられる。129の底部外面には刻線が認められる。瓦器小皿(130)はやや小ぶりで深い。土師器には大皿(133、134)、小皿(135、136)がともに認められる。河内 B₁ 型の土釜(137)は外反する口縁部が厚く短くなり始めている。土師器甕(138)は口縁部内面のみにごく粗い原体によるハケ目を施す。スリ鉢(139)は東播系の須恵器で他に同地方産と考えられる平行タタキを施した甕体部片も見られる。白磁は皿(131)と椀(132)が見られ、森田分類⁽⁵⁾によれば前者は皿Ⅶ-1類に、後者は椀Ⅱ-1類に当るものか。後者の口縁部片と底部片は



第48図 土城36出土遺物

同一個体か否か定かではない。重複関係からは明らかに土城35に後出するものではあるが、遺物からは近接した時期が考えられよう。

土城37 隅丸方形の土城で、南北長1.3m、深さ0.6mを測る。側壁は、ほぼ垂直に掘られている。埋土には、炭・焼土塊を含み、少量の土器片が出土したのみで時期の特定はできない。

土城38・39 (図版10) ともに直径3.5~4.0mの円形に復原できよう。土城38は深さ1.6mを測るスリ鉢状を呈し、土城39は底面を確認していないが、ほぼ同様の形態であろう。埋土はともに泥土質で、特にその下層は青灰色を呈し、滞水状態による還元作用を示す。掘り込み面は中世遺物包含層上面にあり、近世以降の水田耕作に関わる水溜めと考えておきたい。

〔註〕

- (1) 内田俊和、橋口達也「調査の内容—6号土城墓」『古寺墳墓群』 甘木市教育委員会 1982年
- (2) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983年
- (3) 橋本久和「中世土器研究予察」『上牧遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会 1980年
- (4) 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983年
- (5) 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978年

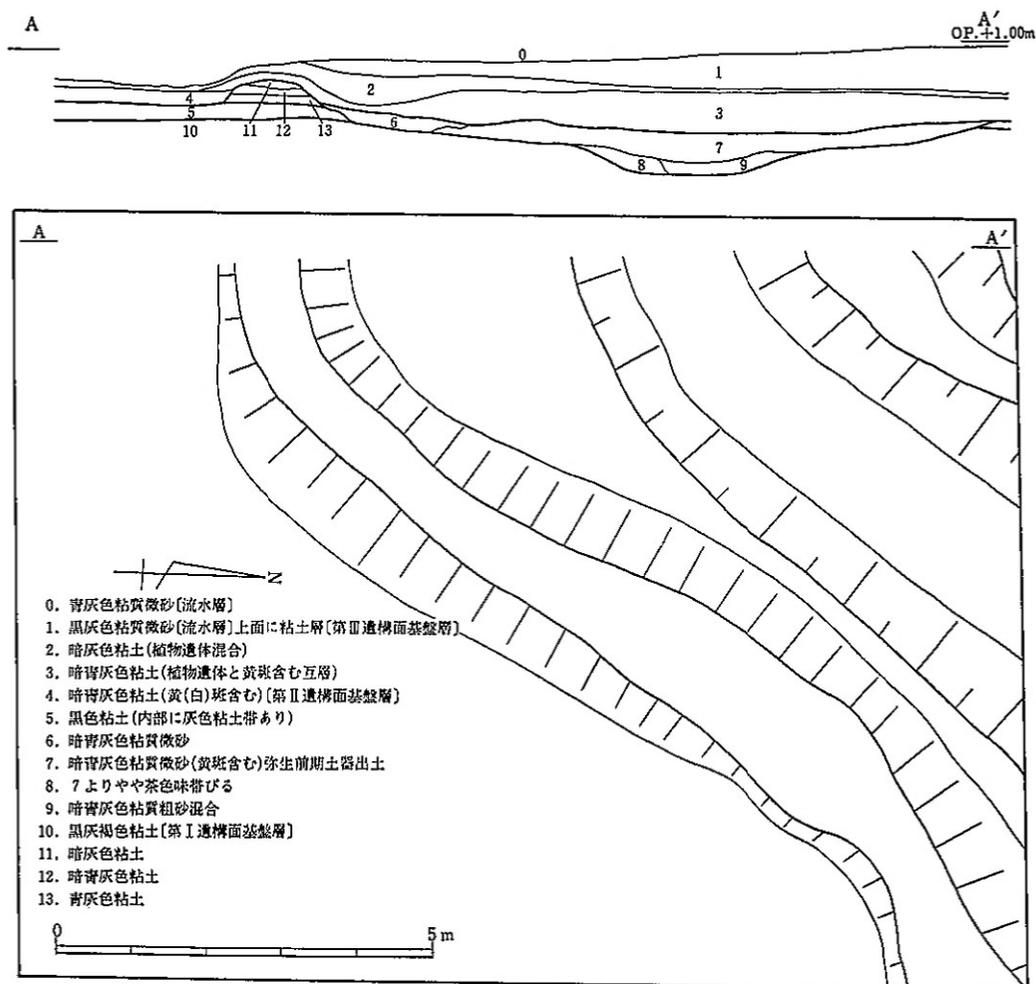
第4節 若江北遺跡・北地区の調査

1 第Ⅰ遺構面（第51図、図版11）

第1地区で、溝を1条検出した。この溝は、南東から北西に向けて延びている。基本的には直線状に延びているが、肩は小さく蛇行を繰り返している。北西側は、上面からの自然河川に切られ、検出長9.0m、幅は平均1.0m、深さ0.1~0.3mを測る。埋土は、黒色粘土で遺物は出土しなかった。第2地区でも遺構・遺物共に存在しなかった。

2 第Ⅰ'遺構面（第49・50・52図、図版11・12・27）

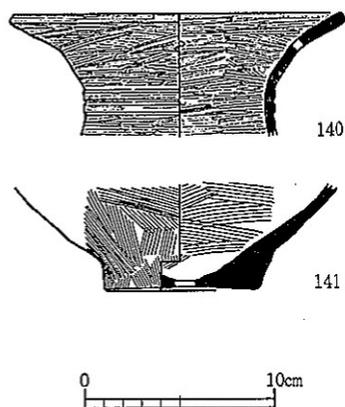
第1地区では、第Ⅰ遺構面上層、第Ⅱ遺構面との間で新たに第Ⅰ'遺構面を検出した。この層は、黒灰色~黒茶色のややシルト味を帯びる粘土層で、自然河川とそれに伴う堤を確認した。第1次調査の報告にあるように、この付近はやや谷状に低くなっており、第Ⅰ遺構面の上面は粘土が堆積する過程で一時期水田などを営む生活面として機能し、自然河川を制御するために堤を築いたのであろう。堤は、下幅で1.8~2.2m、高さ0.3~0.4mで3層にわたる盛土が認められる。



第49図 第Ⅰ'遺構面、堤と自然河川

堤は、北東～南西に延びており調査区西端でやや西寄りに向きを変えるようである。盛土は、基本的に灰色のシルト質の粘土で、周囲に堆積している粘土とは区別が困難である。堤西側の自然河川は、幅5～8mで深さ0.6m、北東から南西に流れていたようである。埋土は、粘質の砂っぽいもので、植物遺体を多く含んでいる。巨摩廃寺遺跡第4地区の自然河川と同様の流れであろうか。なお、この河川は、第Ⅰ遺構面形成時から流れていた可能性もあり、上面には一面植物遺体がみられることから第Ⅱ遺構面形成時にも湿地として澱んでいた状態と考えられる。堤東側では、黄(白)斑を含む粘土層が堆積しており、この上面を第Ⅱ遺構面として把え、水田と考えている。他に遺構は、確認していない。

自然河川の堆積土内から、弥生時代前期の土器が出土した。従ってこの堤と自然河川は、弥生時代前期から中期前半にかけて機能してはいるが、中期前半には河川の流れは途絶えていたと考



第50図 自然河川出土遺物

えている。

壺形土器(140)は、頸部の削り出し突帯上に沈線文を1条施す。内外面は筥磨き調整で、一部刷毛目が残る。口縁下に紐孔が1ヶ所残存する。復原口径17.5cmを測る。図版27-142は、段と沈線文の組合わせて沈線文が3本残る。

底部(141)は、内外面を刷毛目調整される。やや上げ底で中央には焼成後穿孔がある。外面には黒色物質の塗布が認められる。

3 第Ⅱ遺構面(図版12)

第Ⅱ遺構面は、黄(白)斑を含む粘土層で水田と考えられる。第1地区では、前述した堤が機能し、埋没しかけていた自然河川と水田面を区別していたであろうと思われる。あるいは、この時期に、新たに盛土を施すような事もあったかも知れないが、明確ではない。第2地区でも、粘土層の堆積が見られるが、畦畔等の遺構も検出しておらず、遺物も出土していない。

4 第Ⅲ遺構面

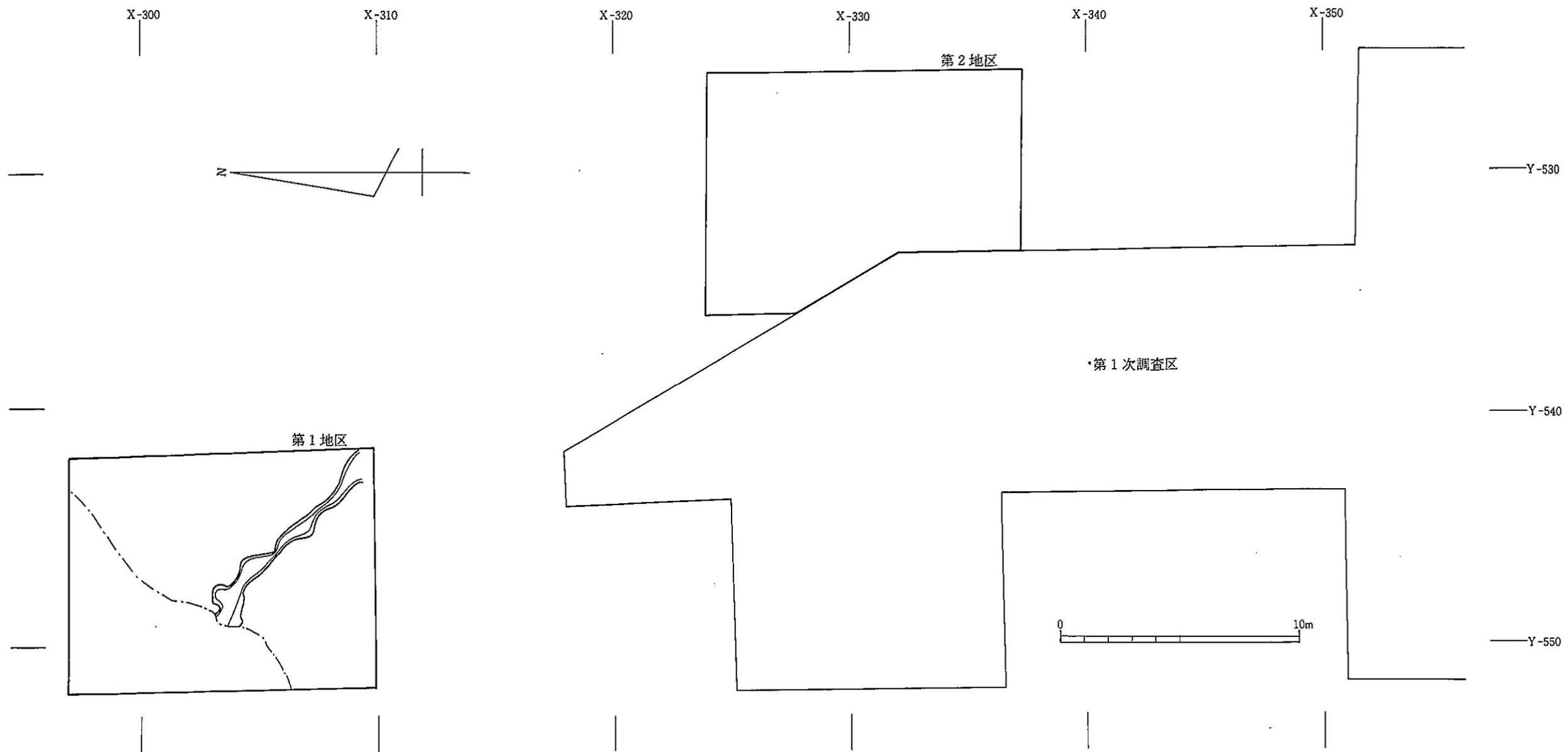
第Ⅲ遺構面も粘土層である。今回の調査では、何ら遺構・遺物共に検出していない。ただ、上面の流水堆積層によって一部分が削られ、落ち込む部分が第1地区で認められた。

5 第Ⅲ'遺構面(第53図、図版13)

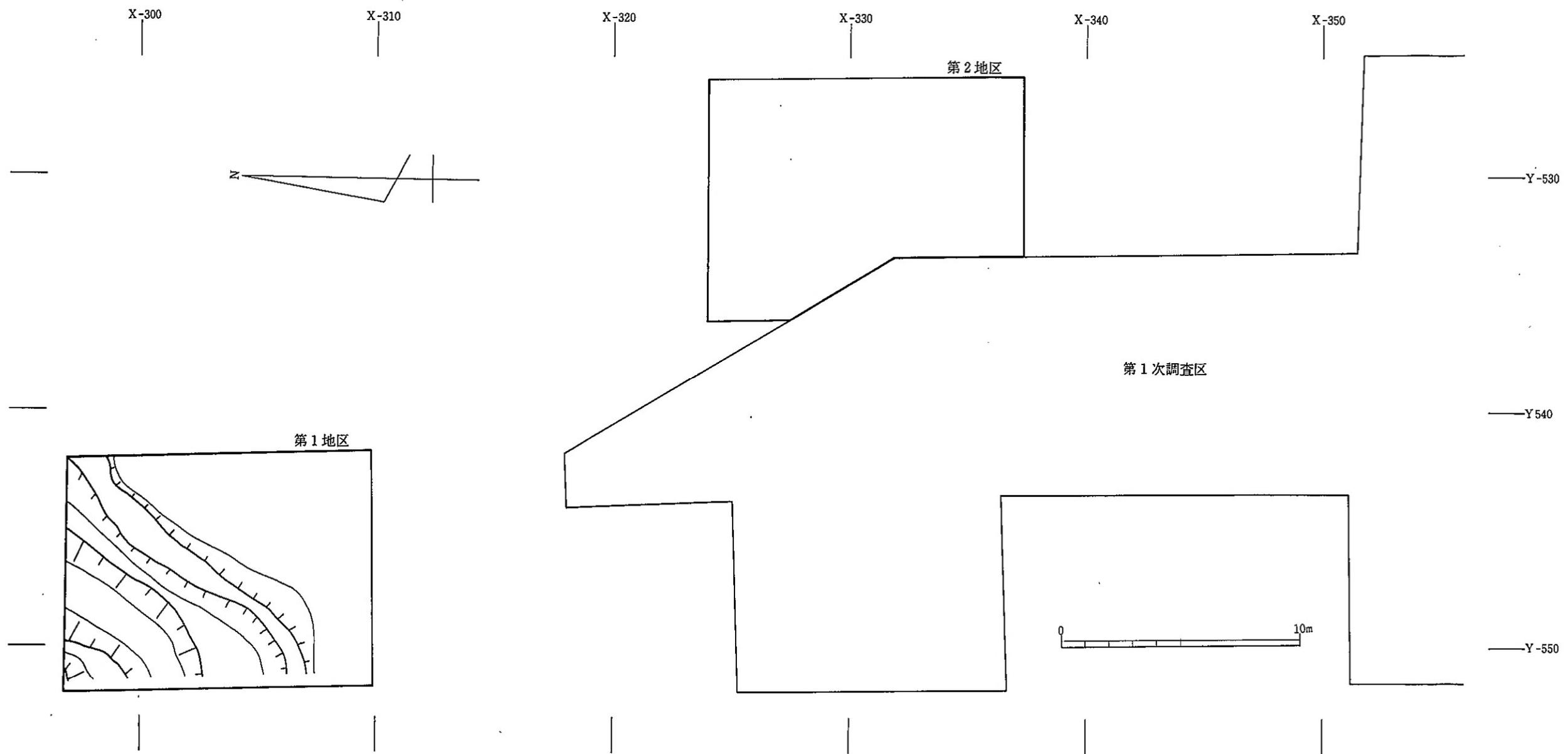
第Ⅲ'遺構面は、第Ⅲ遺構面上約0.6mの流水堆積層内に存在する薄い粘土層である。この粘土層は、従来検出されていない水田面であることが今回判明した。これを第Ⅲ'遺構面と呼称する。

この水田面のレベル値は、O. P. +1.2~1.8mで南の方が高くなっている。

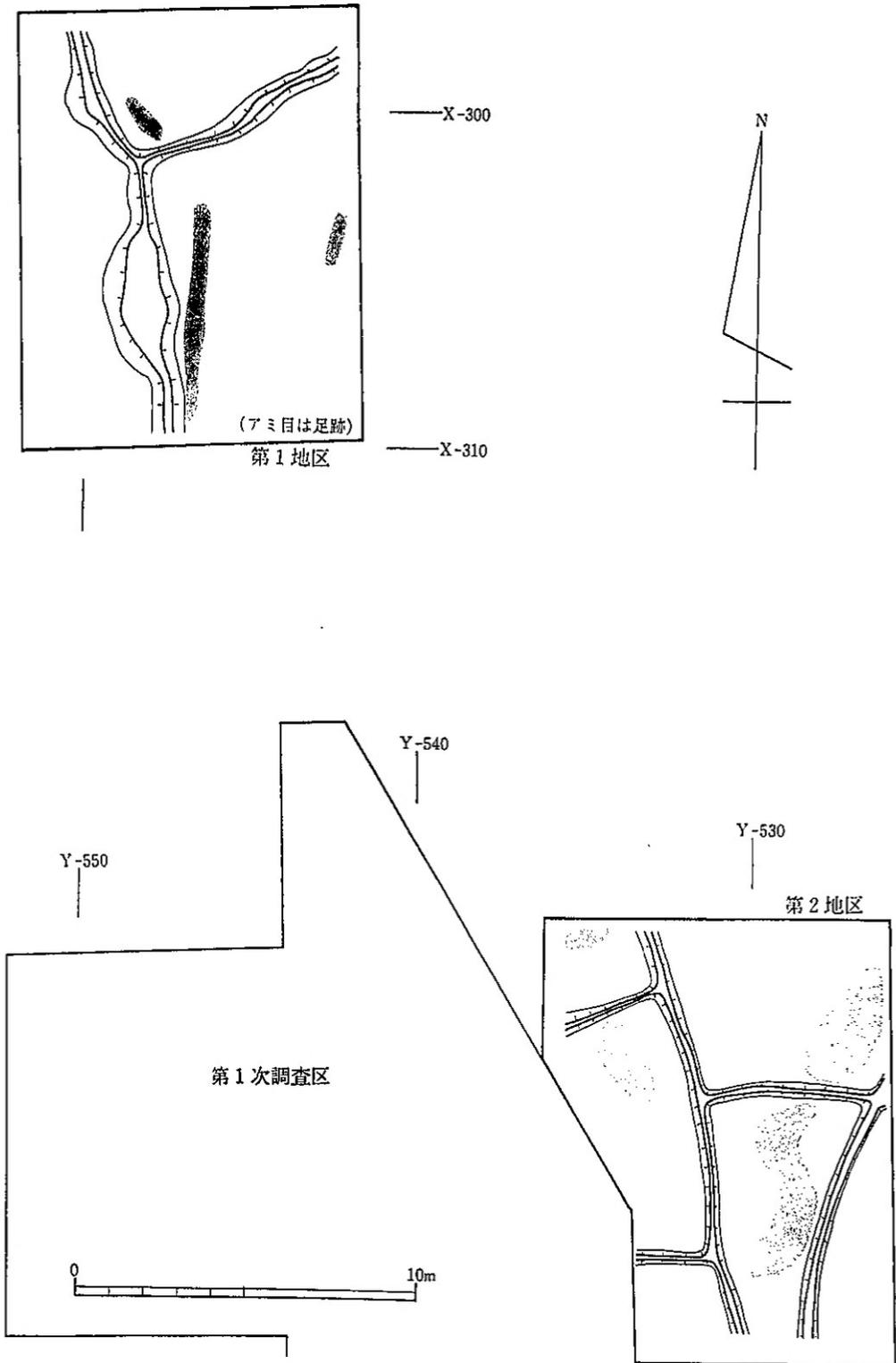
第1地区では、判然としたものではないが南北に延びる畦畔と、ほぼ直交して東北方向へ延びる畦畔を検出した。



第51図 第I遺構面 (弥生時代前期)



第52図 第I 遺構面 (弥生時代前期)



第53図 第Ⅲ' 遺構面（弥生時代中期前半水田面）

畦畔の下幅は、約1mであるが細くなったり、幅2mほどに広がる部分もある。残存状態が不良である点、検出しにくい事にも起因するのであろうか。

水田面は北西側へ低く傾斜している。また、水田面で足跡をいくつか検出した。

第2地区では、南北方向に2条、東西方向に3条の畦畔を検出した。水田は、合計6区画の水田面を数えるが、調査区内で区画が完結しないため規模は明らかにできない。しかし、おおむね30~40㎡程度のもので推定されよう。第2地区でも、粘土層の残存状態が不良なため畦畔の高さは0.05m程しか測れない。水田面と畦畔との区別も、検出は困難を極める状況であった。

この水田面からは、1片の遺物も得ていない。しかし第1次調査で、第Ⅱ遺構面と第Ⅳ遺構面から弥生時代中期前半の遺物を得ているので、この水田面は、弥生時代中期前半のある時点で営まれたと考えてよいだろう。流水堆積層の内部で、一時安定した粘土の堆積を利用して水田を営んだのであろうが、わずかな期間ではなかったかと思われる。

6 第Ⅳ遺構面 (第55図、図版14)

第Ⅳ遺構面も水田である。第1地区では、調査区東端付近で畦畔を一条検出した。畦畔は、南北方向でやや東へ彎曲しており、下幅約1.0mである。畦畔の形は、東側が不明確で西側は段状に低くなり、水田面も畦畔から西に向かって、かなり傾斜していた。

第2地区では、第1次調査の畦畔SC402の続きを検出した。その結果、平行四辺形をした水田区画のほぼ1区画の規模を知ることができる。面積は、約70㎡である。

ただ、周囲の畦畔の状況は整然としたものではなく、水田区画は不定形なものである。第2地区では、足跡を一面に検出したが、遺物は得ていない。

7 第Ⅴ遺構面 (第54・56図、図版14)

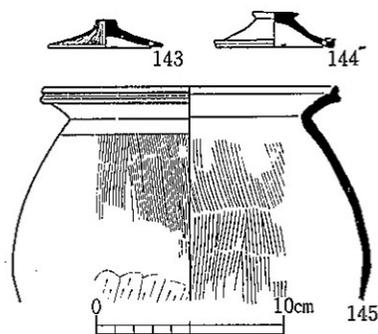
第Ⅴ遺構面は、流水堆積層の上面、青灰色の砂質土層をベース面としている。

第1地区では、ベース面は検出したが、遺構と遺物は認められなかった。

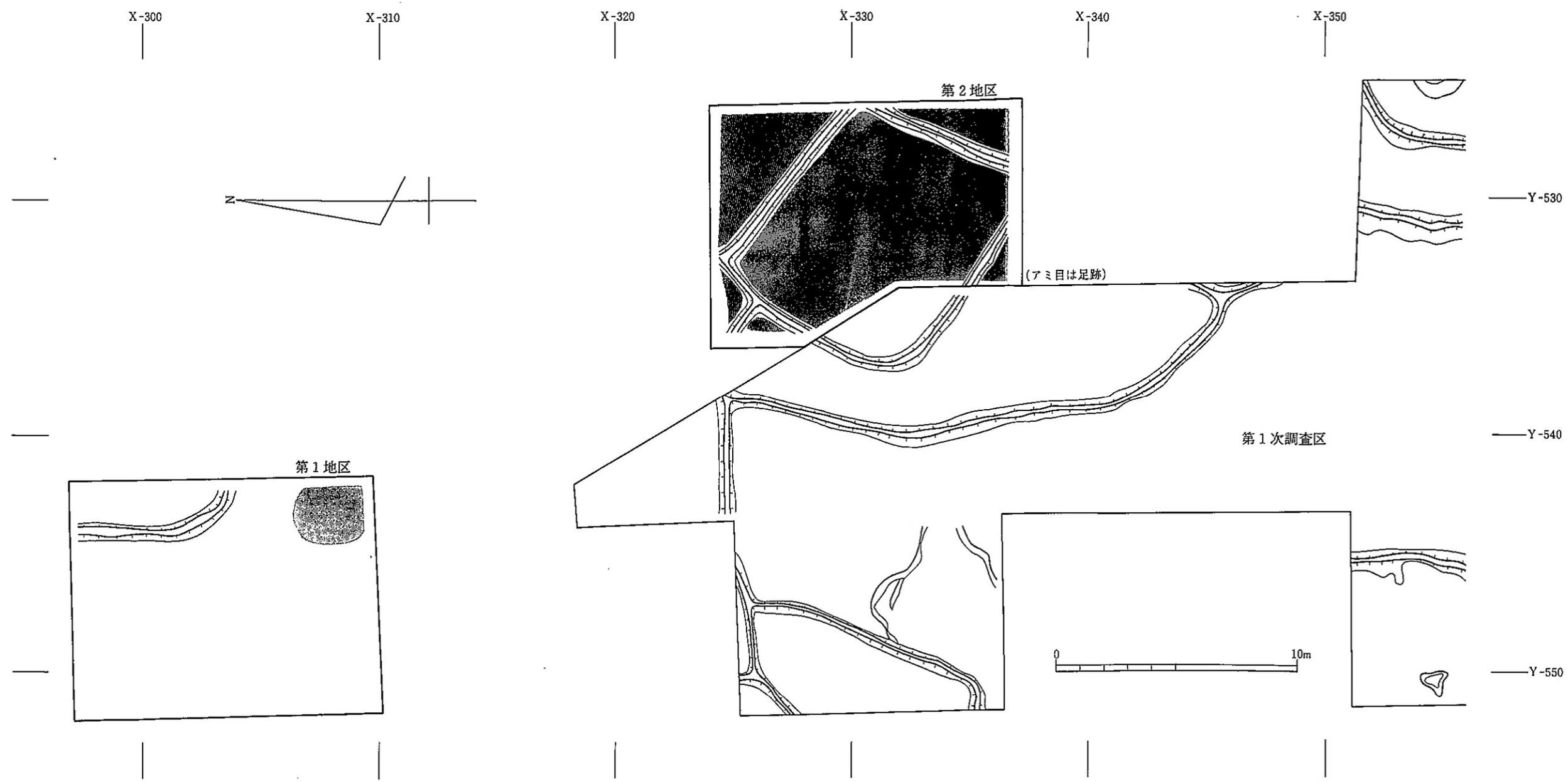
また、第Ⅴ遺構面は、Ⅴ-1面とⅤ-2面に区別しうることが判明しているが、今回の調査では明確にできなかった。従って第Ⅴ遺構面として一括報告する。

第2地区では、南半部を中心にピット溝、土壌などが見られる。SB520としたものは、掘立柱建物となる可能性があるが、全体を検出していないので明らかではない。2間(3.5m)×1(2)間程の規模を想定できようか。溝は、大きく南北方向と東西方向に走るものに分けられ、歪曲の激しいものがある。そのうちいくつかは、第1次調査で検出した溝と連続すると思われるが、調査区境界付近で錯綜しており、明確にはできない。いずれも、幅約0.5m程で深さ0.1~0.3mを測る小溝である。

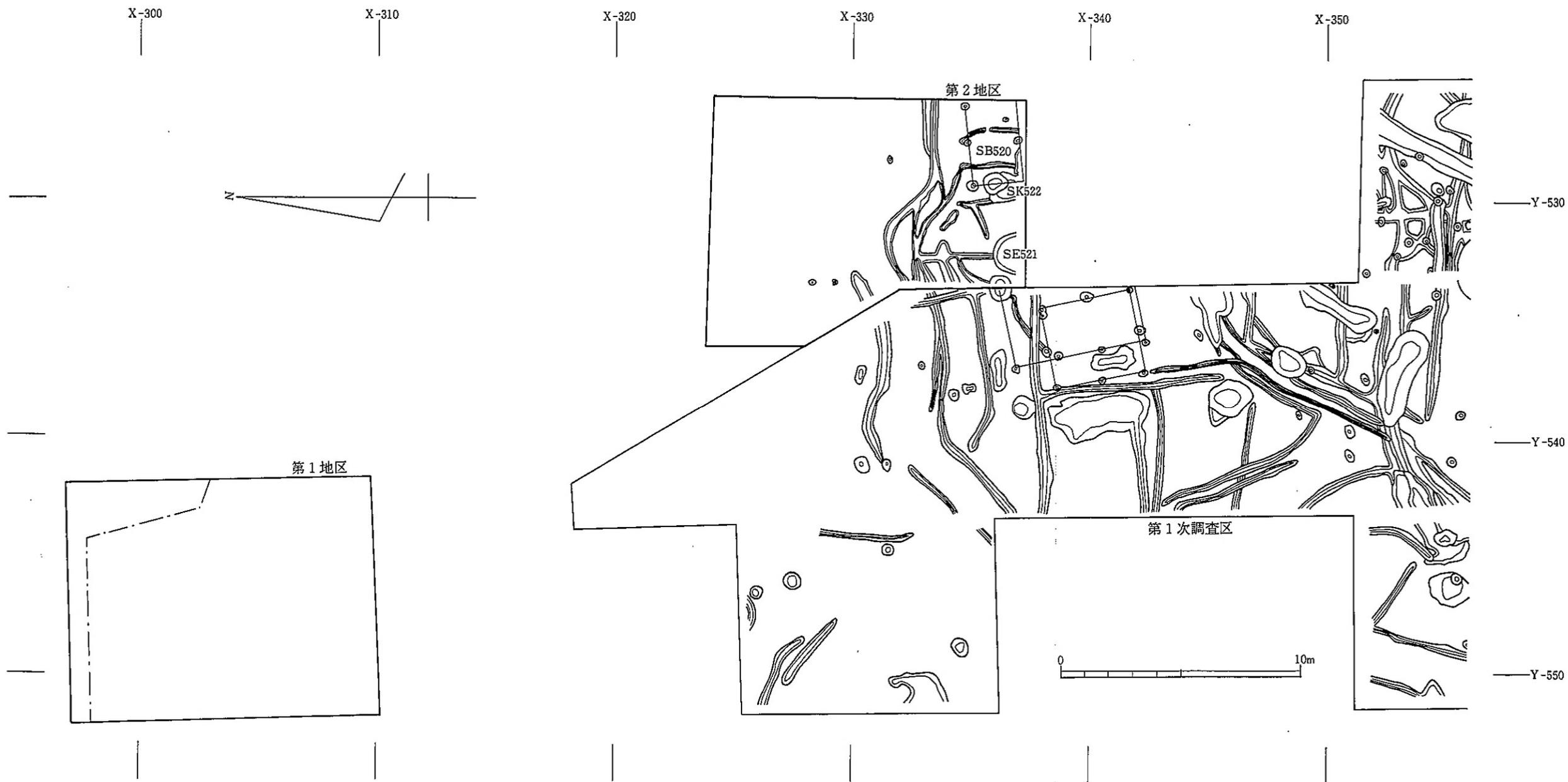
井戸は1基検出された。全形は検出していないが素掘りで、SE521は深さ0.9mと本遺構面では通有のものである。



第54図 第2地区、弥生時代中期
包含層出土遺物



第55図 第Ⅳ遺構面（弥生時代中期前半水田面）



第56図 第V遺構面 (弥生時代中期後半集落面)

その他、S K 522などの土器も存在する。これは、深さ0.3m程のものである。

遺物は、遺構面直上層から土器片が10数点、溝内からも10数点検出している。いずれも、弥生時代中期後半のもので、完形に近い蓋形土器が2点含まれている。

蓋形土器は、いずれも小形で笠形。143は小さいつまみが付き、端部は丸い。外面は篋磨き調整。144は、つまみが平坦、端部はつまみ上げられる。甕形土器(145)は、口縁部が『く』の字形に屈曲し、端部は上方へ拡張する。端面には凹線文。他に外面に叩き目を施す甕形土器もある。

8 第Ⅵ遺構面（第57・60図、図版27）

第Ⅵ遺構面は再び水田面である。ベース面は粘土層であり、第1次調査で部分的に2層に区別されることが判明しているが、今回の調査では遺構の希少性もあって明確にできなかった。ただ、今回の調査で言う第Ⅵ遺構面とは、第Ⅵ-2遺構面に対応すると考えている。

第1地区では、南北にのびる粘土の畦畔状遺構と、その西縁に沿って掘られた溝を検出した。

この溝は、南側で畦畔状遺構を斜めに横切り、調査区外へのびている。北側では、畦畔状遺構が途切れると共に西へほぼ直角に折れて次第に細くなっている。畦畔状遺構は、下幅約1.0mでわず

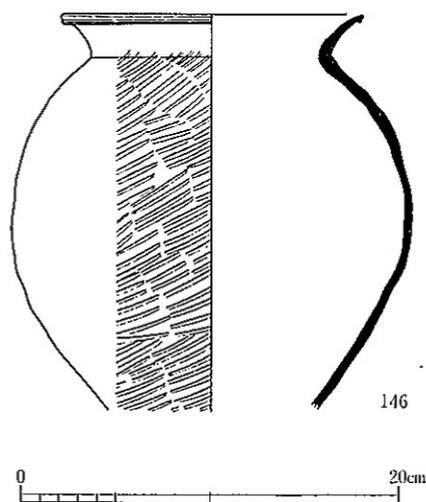
かな高まりを有し、溝は、幅1.0mで深さ0.1m程度のものである。畦畔状遺構は、第1次調査のS C 601に似た状況を示し、溝は、S D 602に連なる可能性があろう。

この面は、上部の流水堆積に洗われたような状態であるため、明確に遺構が残存していないと考えている。

第2地区では、畦畔など遺構は検出しなかった。しかし水田耕土内で、第57図に示す土器が出土した。土器は、破片となっていたがひとかたまりで検出した。

このように、水田耕土内で土器が出土する例は、第1次調査でも弥生時代後期に認められた。

甕形土器(146)は、口縁部が丸く外反する。叩き目は頸部に及び、胴下半で方向が変わる。外面に煤が付着、胴下半内面に炭化物が残る。



第57図 第Ⅵ遺構面、水田耕土内出土遺物

9 第Ⅶ遺構面（第58・59・61・62・63・64図、図版15・27）

第Ⅶ遺構面も粘土層をベース面とした水田である。この面も、2層に区別されることが判明しており、今回の調査では第1地区でそれを確認した。この第Ⅶ-1遺構面を、第58図として単独に掲げ、第Ⅶ-2遺構面は、第1次調査結果と合わせて第61図に示している。

第1地区で検出した第Ⅶ-1遺構面は、畦畔を一条確認しただけであるが、この畦畔は第Ⅶ-2遺構面の大畦畔と重複して直下に存在した。ただ、小畦畔は、検出しえなかった。畦畔は、下幅1.0m程で、高さはわずかしが残っていない。

この畦畔からは、巨摩廃寺遺跡の古墳時代前期水田畦畔にみられたような状態で、木片が2点

埋置されていた（第59図）。

北側の一点は、畦畔上面やや東寄りに埋置されており、長さ0.72mを測る。南側のものは、畦畔西側斜面に置かれ、約0.35m検出したが、調査区外に延びており、全長は不明である。いずれも腐蝕が激しく、加工木かどうかは不明である。

なお、第1地区の水田面では、多数の足跡の他、半月形の鋤が打ち込まれた痕跡を確認している。

第2地区では、第Ⅶ-1遺構面を明確には区別しえなかった。

第Ⅷ-2遺構面は、第Ⅶ-1遺構面の0.2m上部に広がる粘土層で、これも水田である。この水田面は残存状況が良好で第1・2地区共に検出した。

第1地区では、第Ⅶ-1遺構面の畦畔直上にはほぼ同様の大畦畔を検出した。

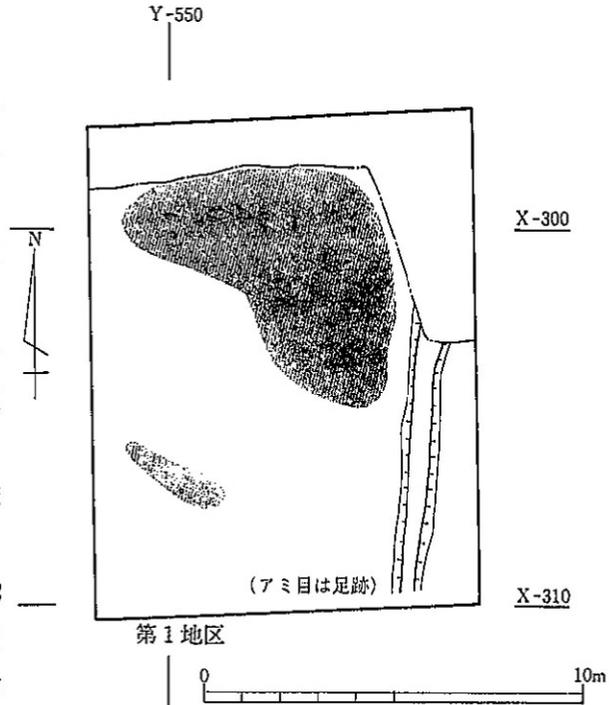
この畦畔は、第1次調査のS C 701に連続するものである。

この畦畔からは、西へ2条の小畦畔（S C 726・727）が延びており、西側で南北に走るS C 705に接続している。さらに、調査区南端部では、S C 701から東へ延びる小畦畔の一部が検出された。同時に西側のS C 705からは、西へ延びる小畦畔の一部が検出された。

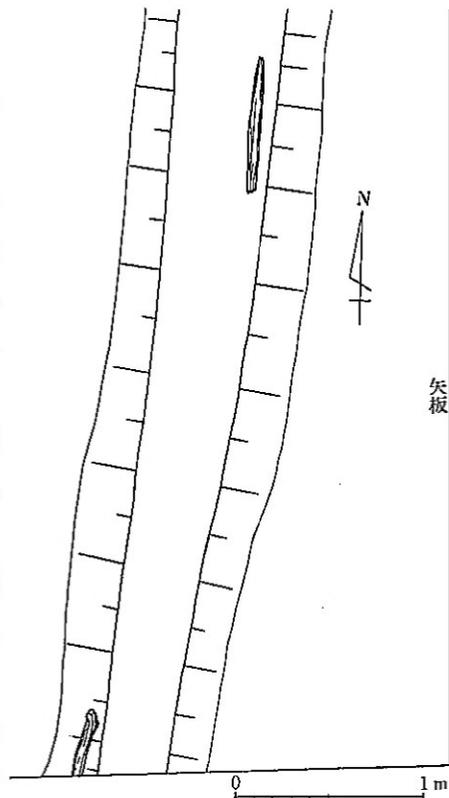
第1地区では、ほぼ水田一区画を検出しており、形状はほぼ正方形である。東西7.3~7.5m、南北6.4mを測り、面積は約48.8㎡の規模を持つ。

また、東西方向の小畦畔中央付近で、一部凹んだ部分が存在する。これは水口であろう。水口であるなら南→北へ流れるものである。

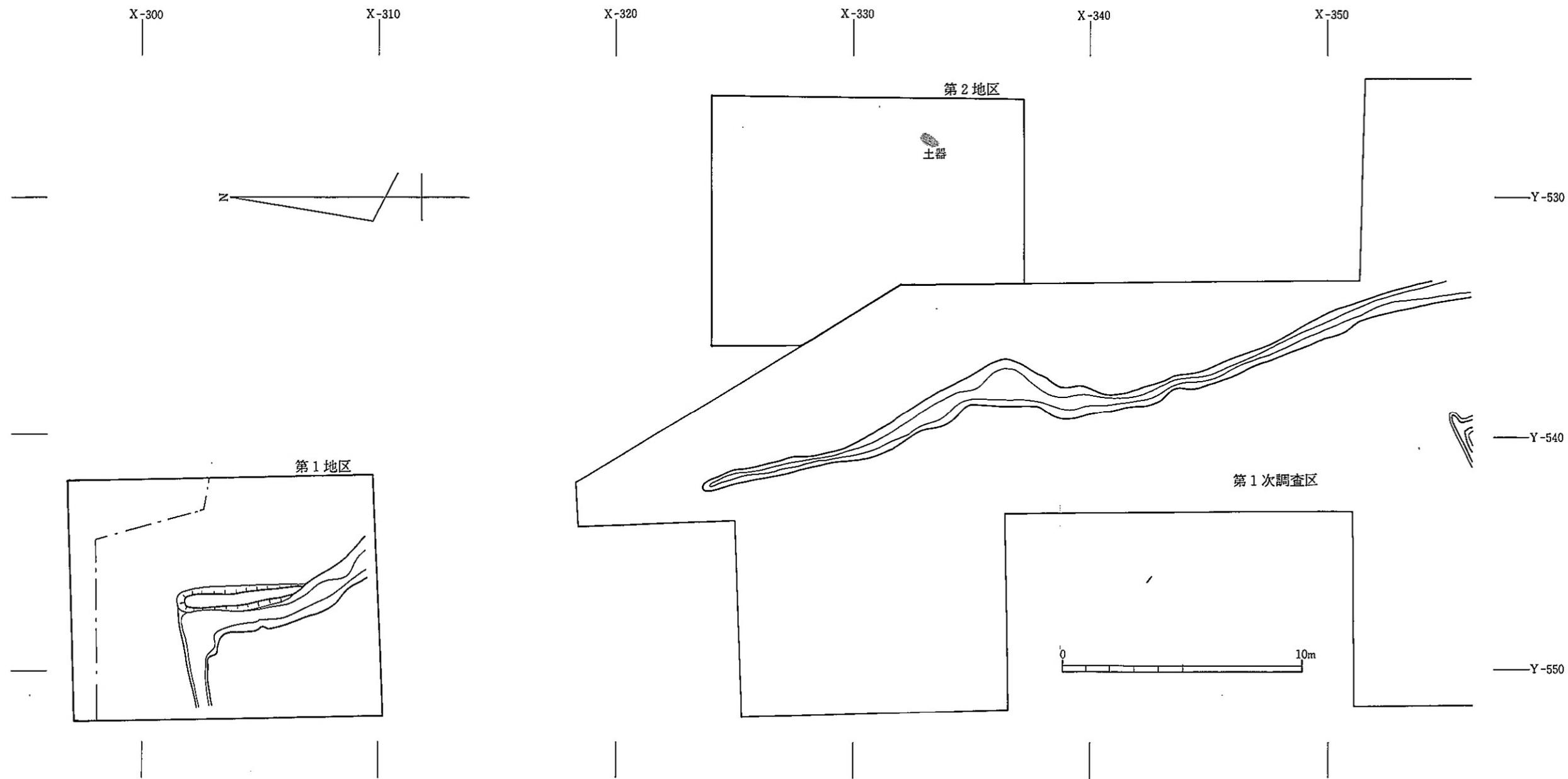
第1地区で検出した水田区画は、水田面として5枚を数えるが、畦畔はほぼ90°の角度で東西南北に延びており、弥生時代の水田と比較して、水田面を方形に



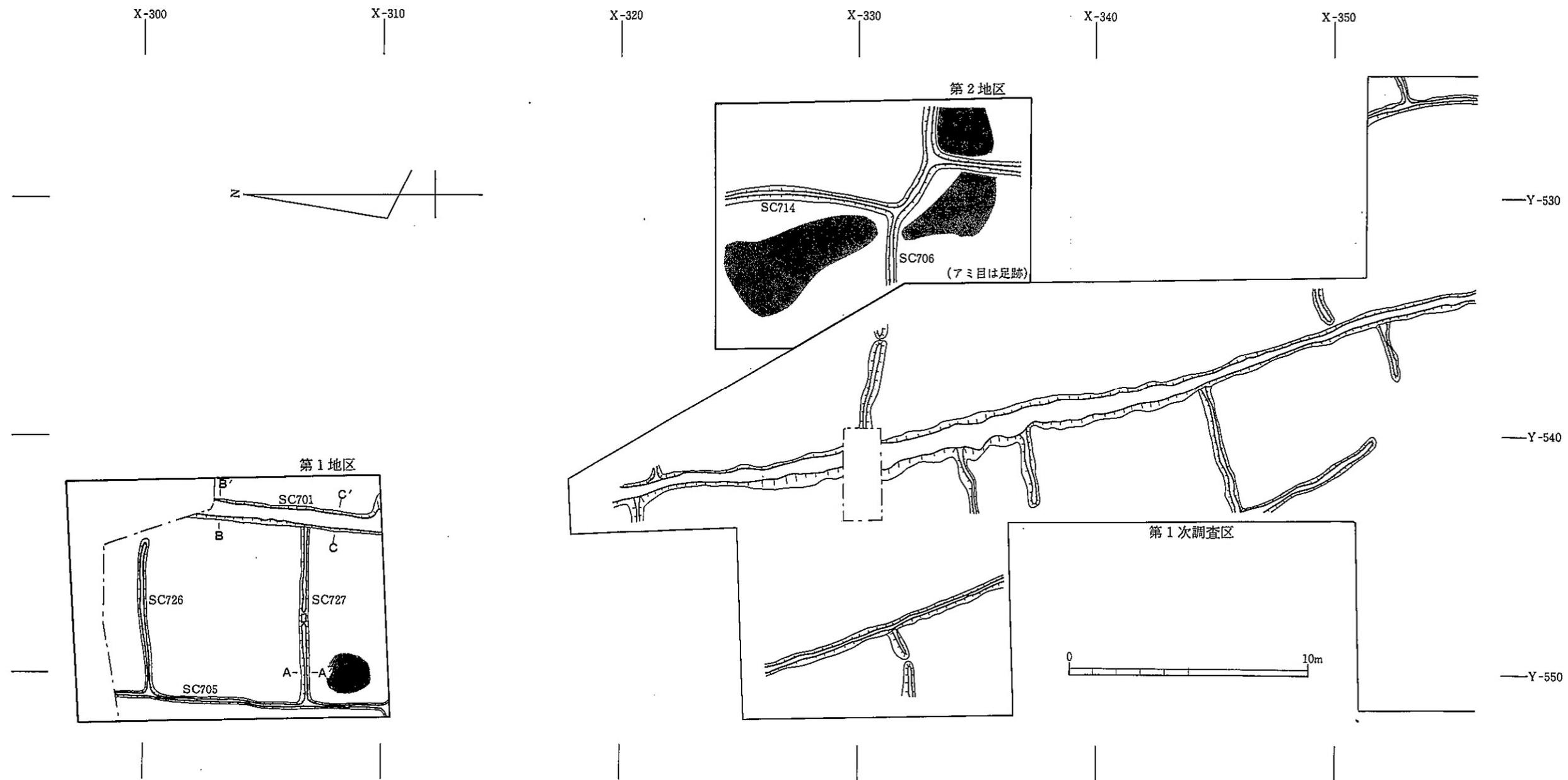
第58図 第Ⅶ-1遺構面（古墳時代前期水田面）



第59図 第Ⅶ-1遺構面水田畦畔内木片



第60図 第VI遺構面(弥生時代後期水田面)



第61図 第Ⅶ-2遺構面 (古墳時代前期水田面)

整然と区画する計画性が窺われる。

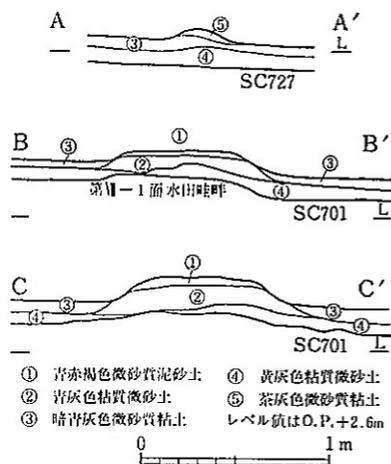
ところで、畦畔の断面観察（第62図）では第Ⅶ-1 遺構面直上には、黄灰色粘質微砂が堆積した後、この層から青灰色の粘質微砂と青赤褐色微砂質泥砂を盛った大畦畔を築いている。この第Ⅶ-2 遺構面の水田は、暗青灰色の微砂質粘土層を水田耕土層として営まれている。

小畦畔も各所で断面観察を実施したが、水田耕土層との関係は不明確である。第62図S C 727のA-A'で示した地点で、茶灰色微砂質粘土を水田耕土上面に盛り上げたのではないと思われる状況が観察されている。

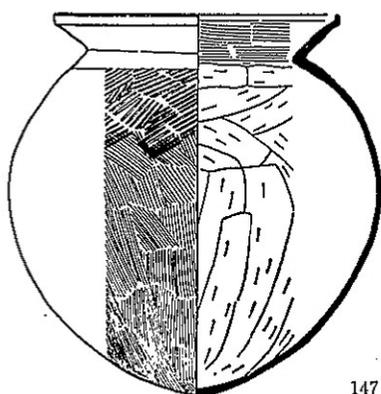
第2地区では、東西方向と南北方向の畦畔を検出した。このうち、東西方向の畦畔は、前回調査のS C 706に連続し、南北方向のものは、S C 714と連続するものである。この地区の畦畔は、水田の区画方法が単に畦畔を直交させるものではなく、ややずれて交わらせているのが特徴的な点である。しかしこの状況は部分的なものようである。両地区水田面には、全面に足跡、農工具跡を検出した。

第Ⅶ-2 遺構面に伴う遺物は、第1地区の水田面直上の流水堆積砂層内で、ほぼ完形の庄内式甕を検出している。流水堆積の際、どこからか流されてきたものであろうか（第63・64図）。

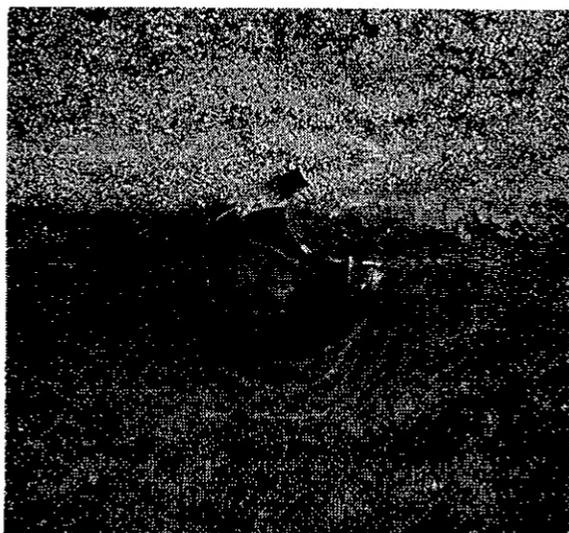
甕(147)は、口縁端部をつまみ上げ、底はやや尖る。外面は細かい叩き（上半）と刷毛、内面はヘラ削り調整。頸部内側の稜は、ヘラ削りのため鋭く、外側はヨコナデ。胴外面には煤が付着。



第62図 第Ⅶ-2 遺構面水田畦畔断面



0 20cm
第63図 第Ⅶ-2 遺構面直上出土遺物



第64図 第Ⅶ-2 遺構面直上土器出土状況（写真）

10 古墳時代中期以降

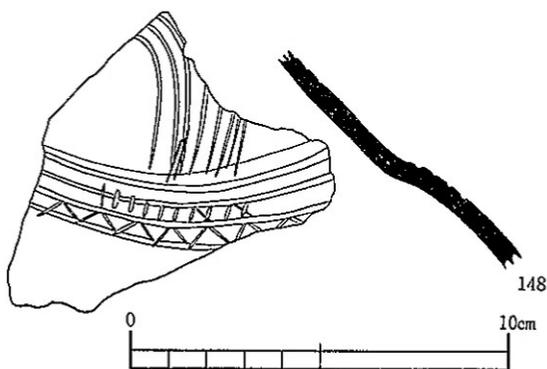
第Ⅶ-2 遺構面直上は、約0.3mの厚さを持つ流水堆積層で、その上面は第1次調査結果と同じ状況である。第1地区では最上層から切り込む江戸時代の土城・溝を検出している程度である。

第5節 若江北遺跡・南地区の調査

1 第Ⅰ遺構面

南地区の第Ⅰ遺構面では、いずれの調査区からも、何ら遺構を検出しなかった。第Ⅰ遺構面は一面暗青灰色の粘土層で黒斑が多数見られる。第3地区では、この面上に堆積する黒色の粘土層から土器片を一片検出した(第65図、図版26)。

遺物は、壺形土器の肩部から胴部破片である(148)。中央部に段があり、段上方には沈線が弧状に描かれ、段下方には沈線文を4条廻らせる。沈線文間には、縦線文と山形文を加える。生駒西麓産の胎土。



第65図 第Ⅰ遺構面直上層出土遺物

2 第Ⅱ遺構面(第66図)

第Ⅱ遺構面は、暗灰色の粘土層で白色または黄色の小粒を混じえる層である。この面では、第3地区で東西にのびる溝を検出した。

溝は、幅1.0mで深さ0.15m程度のものであるが、埋土はやや黒い粘土で周囲の粘土層との区別が困難であった。遺物は、検出しなかった。

第1次調査でやや南にずれて、同方向に走る溝がみられるが、溝の幅も差が大きく、同一のものではなさそうである。これは調査担当者の認識に左右された結果なのであろうか。

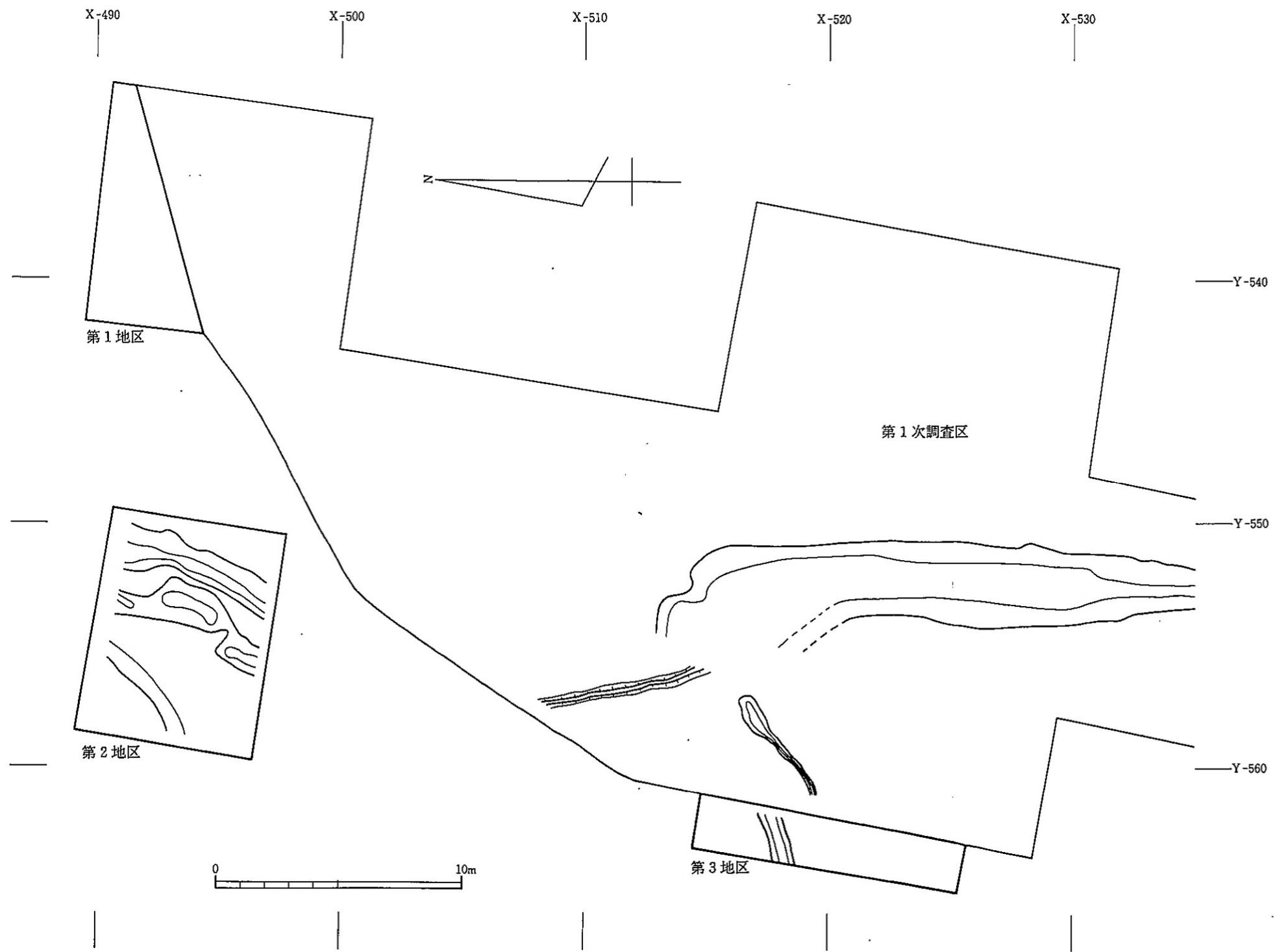
なお、第2地区の第Ⅱ遺構面は凸凹が激しい。これは第1・3地区では薄い流水堆積がこの付近で厚くなっているため、強い流水で遺構面が削られた結果であろう。

3 第Ⅲ遺構面(第67図、図版16・17)

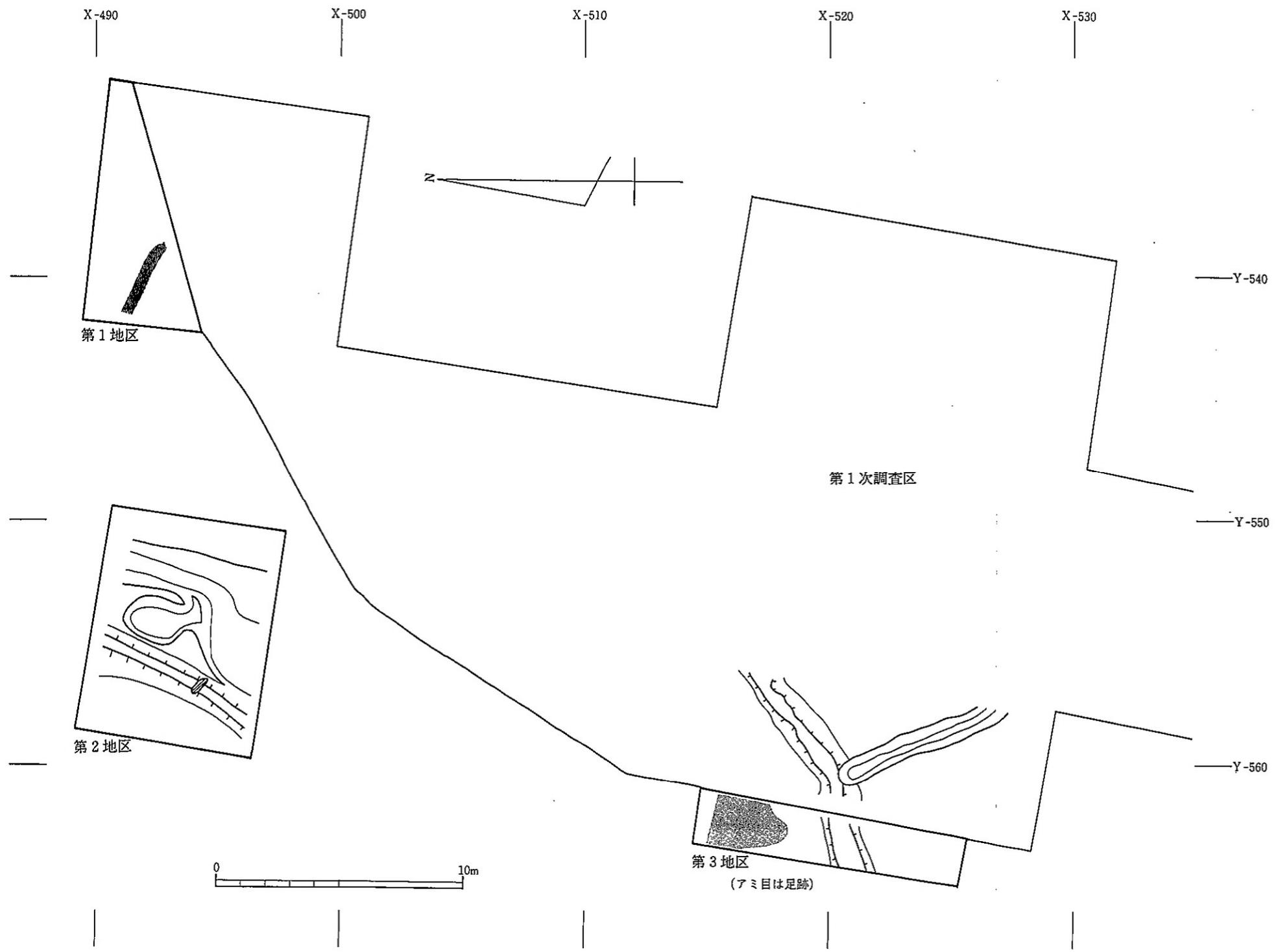
第Ⅲ遺構面では、各地区で畦畔・溝・足跡を検出した。特に第2地区では、南北に走る溝とそれを規制するかのように西側に沿って盛られた畦畔が存在する。

第1地区では、一面の粘土層で、足跡を検出したにすぎない。

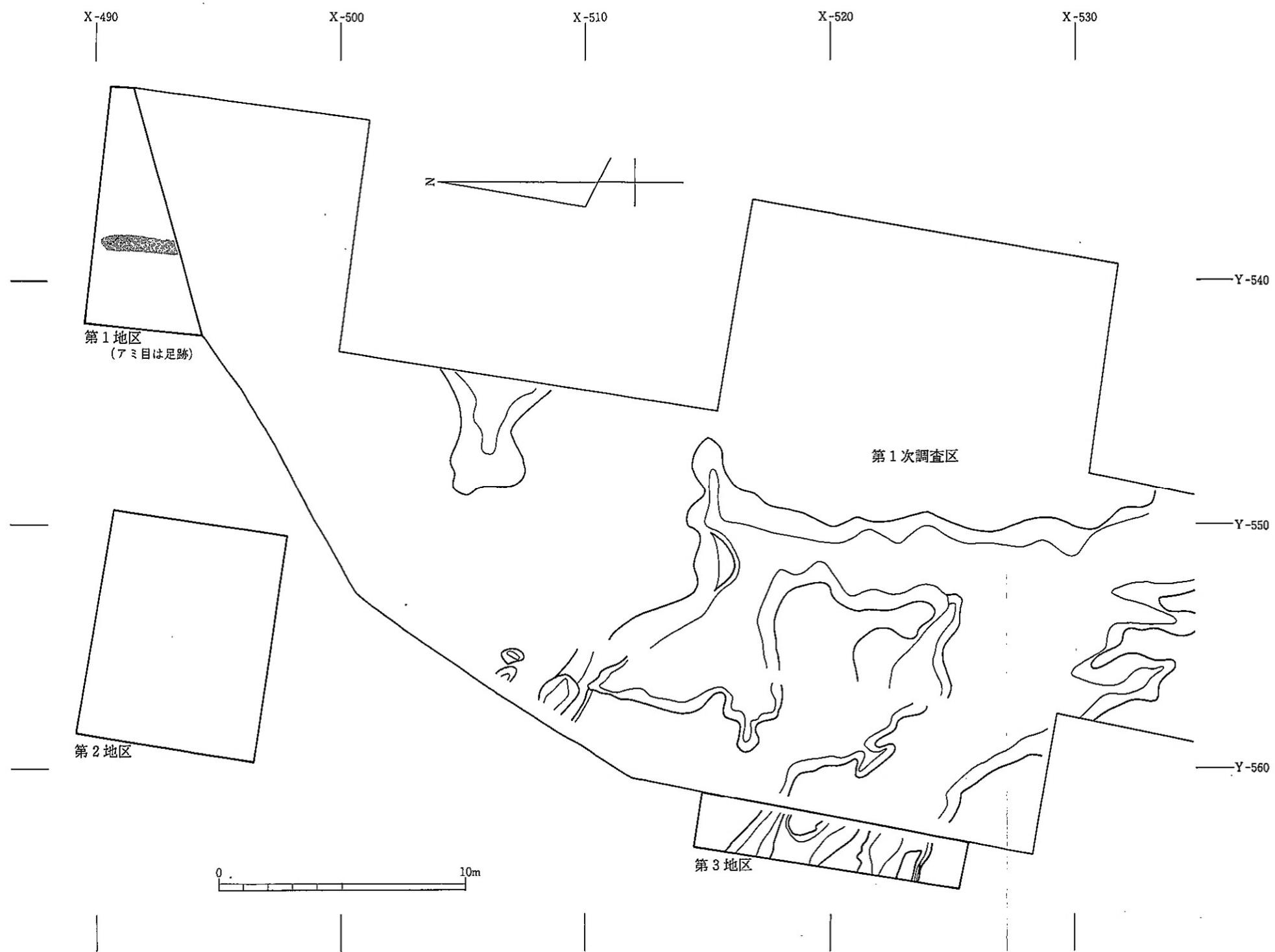
第2地区で検出した溝は、北側で幅約2mを測り、流れは後述する畦畔上面に達する。溝は南に向かって広がっている。なお、畦畔との間にテラスが存在する。テラスには、2.5×2.0mの楕円形の土塊状の落ち込みがみられるが、南に向かって開口するような様子で壁面は完結していない。溝に沿って築かれた畦畔は、下幅で1.4~2.2mの規模を持ち、高さは0.4mを測る。断面の観察では、畦畔の西側は3層にわたる粘土層がみられ、東側は粘質の流水層である。従って、畦畔の東側は用水路として水が流れ、西側では3時期にわたる水田を営んでいたと考えられる。畦畔の盛土は黒灰色の砂質粘土であり、上面に1ヶ所直交する溝が切られている。水口と考えられるが、浅いものなので最上層の水田面に対する水口であろう。



第66図 第Ⅰ遺構面 (弥生時代前期~中期)



第67図 第Ⅱ遺構面 (弥生時代中期)



第68図 第Ⅳ遺構面 (弥生時代中期)

第3地区では、東西に走る畦畔を検出した。第1次調査のS C310に連続するものである。畦畔の下幅は約1.5mとやや大きいものである。なお、この畦畔の上面にも、ややずれて畦畔を確認し、対応する粘土層に足跡を確認した。

これらの事実から次のような事が考えられる。第2地区では、比較的短期間に営まれた3時期にわたる水田が確認され、第3地区でも2時期にわたる水田が認められた。従って前回調査で指摘されたように第II遺構面と第III遺構面が連続して水田として営まれた事に加えて第III遺構面でも2～3時期にわたる細分がなされるので、第II～第III遺構面は、比較的短期間のうちに3～4時期にわたる水田が営まれたものであろう。しかし、それは部分的なものである。

4 第IV遺構面（第68図）

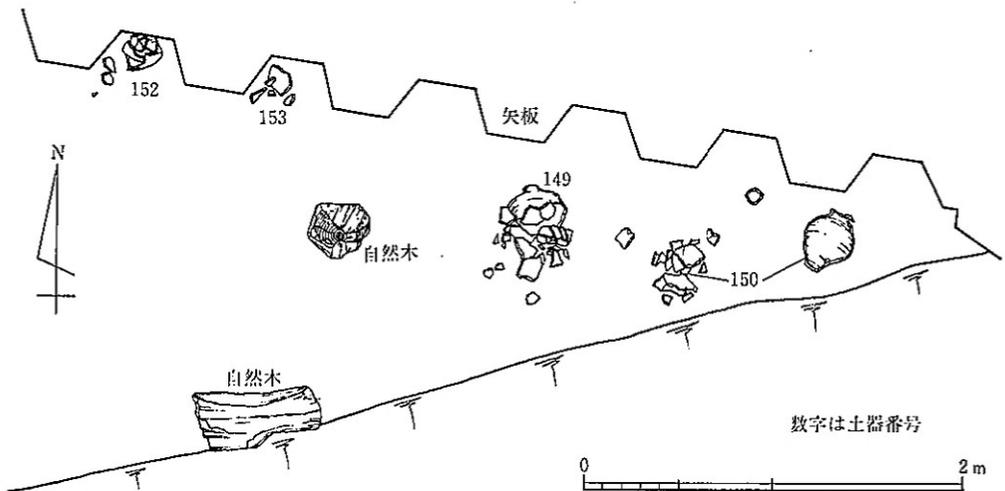
第IV遺構面は、第1地区において足跡を検出したのみである。第2地区は一面の粘土層で遺構は存在しない。第3地区では、上部の流水堆積層に削られた粘土層の凹凸が見られた。第1次調査で想定されたように、一部は水田で、他は湿地か上部の流水に削られた遺構面と考えられる。

5 第V遺構面（第69～71図、図版28）

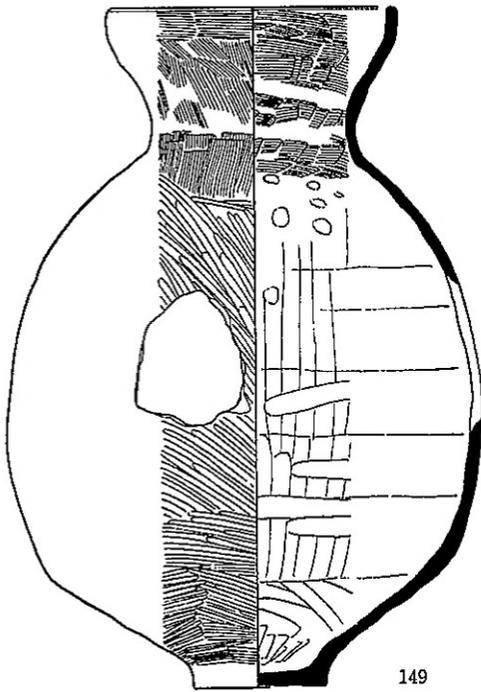
第V遺構面は、北地区でも見られるとおり、第V-1遺構面と第V-2遺構面に区別されることが判明している。今回の調査では、第2地区において、遺構の切り合い等を断面から把握し、区別されることを確認したが、他は一括して第V遺構面としてまとめている。

第1地区では、ベース面となる青灰色微砂層が緩やかに凹んでおり、大きな溝状落ち込みの内部を検出した状況である。第1次調査のS D578の続き部分にあたるものである。

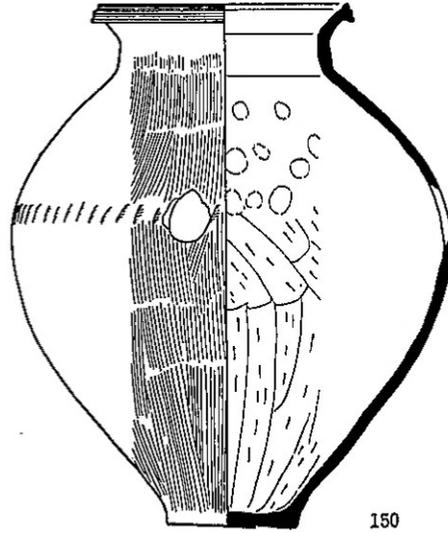
このベース面からは、5個体の弥生土器が、ほぼ個体ごとにまとまって出土した。ただ、完形品となるものはないが、穿孔のあるものを含んでいる。土器の他には、やや大きな自然木も出土している。5個体のうち3個体に穿孔が認められるため、S D578の性格としては、単なる溝と考えるより、特別な意味を想定した方がよいかも知れない。



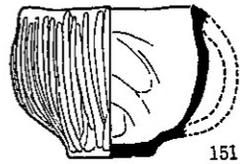
第69図 第1地区、第V遺構面S D578土器出土状況



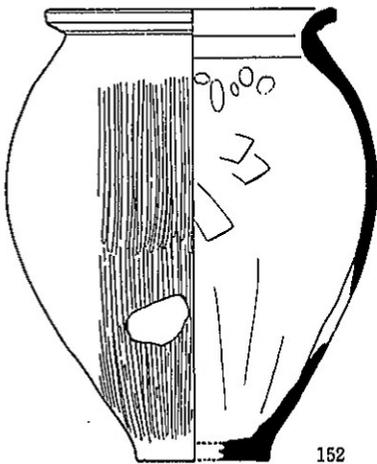
149



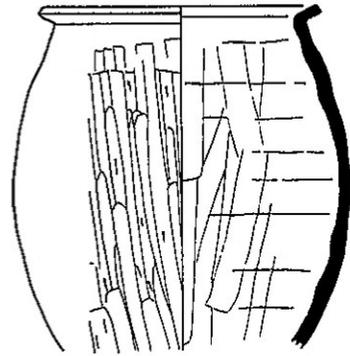
150



151



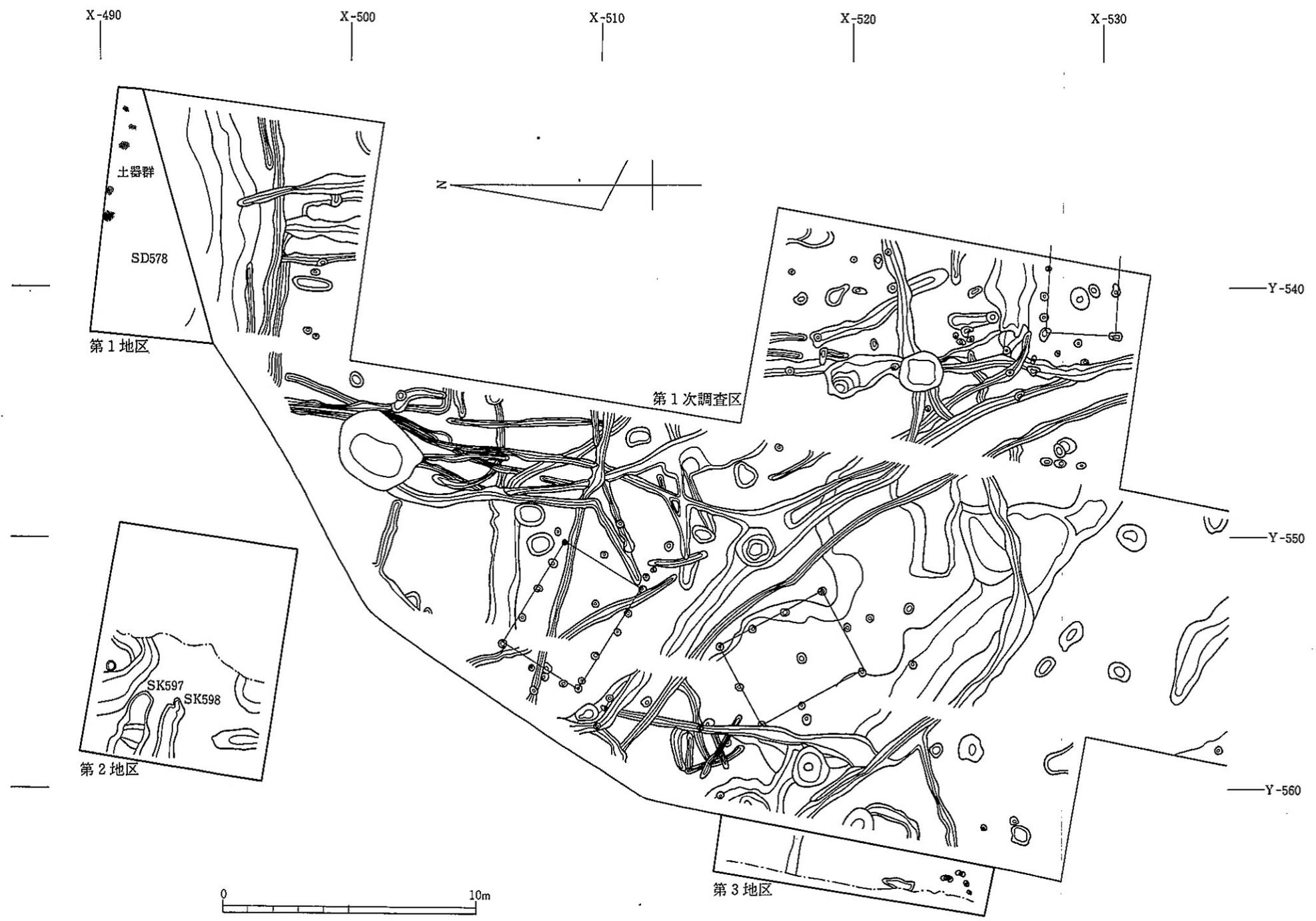
152



153



第70図 S D 578出土遺物



第71図 第V遺構面(弥生時代中期後半集落面)

遺物は、壺形土器(149・150)、把手付鉢形土器(151)、甕形土器(152・153)が出土した。

149は、口縁部が外反し、更に立ち上がる。体部は肩部が丸く、中位でややふくらみ、腰に稜線を残す。口縁部から頸部までの内外面に刷毛目を雑に施し、体部外面は篋磨き調整される。体部内面には、板状工具による調整痕がみられる。150は、内傾する短い頸部から外反する口縁部をもつ。口縁部端面には凹線文、体部には刷毛状工具による圧痕文が施される。外面は頸部以下を粗い刷毛目調整、内面には肩部に指頭圧痕、胴部以下は篋削り調整される。151は口縁部が内彎気味に立ち上がる。外面には篋削り後、篋磨き調整、他の調整は雑である。152は、口縁部が内面に丸みをもって外反する。外面は篋磨き調整で下半には篋削りが残る。153の調整は粗い。149・150は、略完形。149、151～153は、角閃石を含む生駒西麓産の胎土である。なお、第1次調査では、同一遺構の延長上から双把手付台付鉢が出土している。

第2地区では、不定形な土壌、溝が存在する。いずれも深さ0.1～0.3m程で、性格は不明である。

そのうち、S K 597は第Ⅴ-1遺構面から掘り込まれ、S K 598は第Ⅴ-2遺構面から掘り込まれている事が判明した。これらは、すべて断面観察に頼らざるを得なかった所見である。平面的には、ベース面上面で遺構が区別し難く、かなり遺構面を削った後に遺構の肩を検出できるという状況であった。調査区北端では、柱穴と思われるピットも検出された。S K 598上面で甕の破片がかたまって出土した。その他の遺構では、土器の細片が出土したにすぎない。調査区の狭少さもあるが、このような遺構の性格は、まったく不明であると言わざるを得ない。

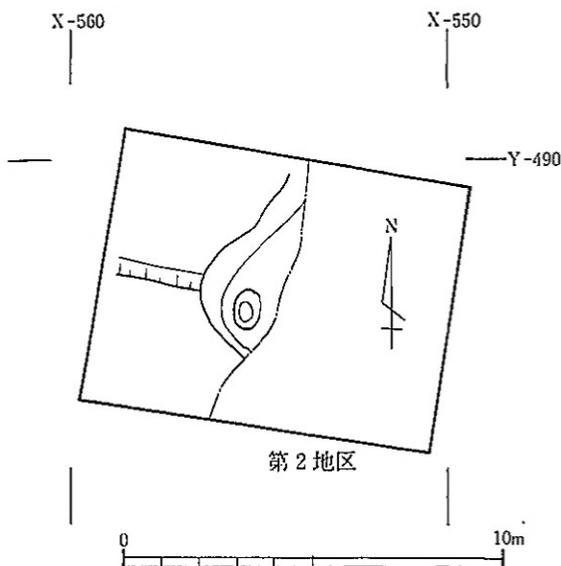
第3地区では、南半部でピット、不定形な土壌が存在する。北側ではやや段差があって低くなっているが、遺構は検出されなかった。第1次調査では、多数の溝などが今回の調査区へ延びてきてはいるものの、その続きは確認できていない。

第Ⅴ遺構面上には、他の地区と同様に黒色の微砂層が存在する。

第2地区では、新たにこの層の上面から掘り込まれた遺構を確認した。東半分は弥生時代後期の流路によって失われているが深さ0.3mほどの楕円形の落ち込みである。

中央部では、さらに深くなる部分が認められた。内部には、暗灰色及び黒灰色の粘土質微砂が堆積している。遺物は出土していない。

この層は、巨摩廃寺遺跡でも溝が掘り込まれており、弥生時代中期末の時期であろう。なお、ベース面は、中央付近から北へやや低くなっている（第72図）。



第72図 第2地区、第Ⅴ遺構面上層の遺構

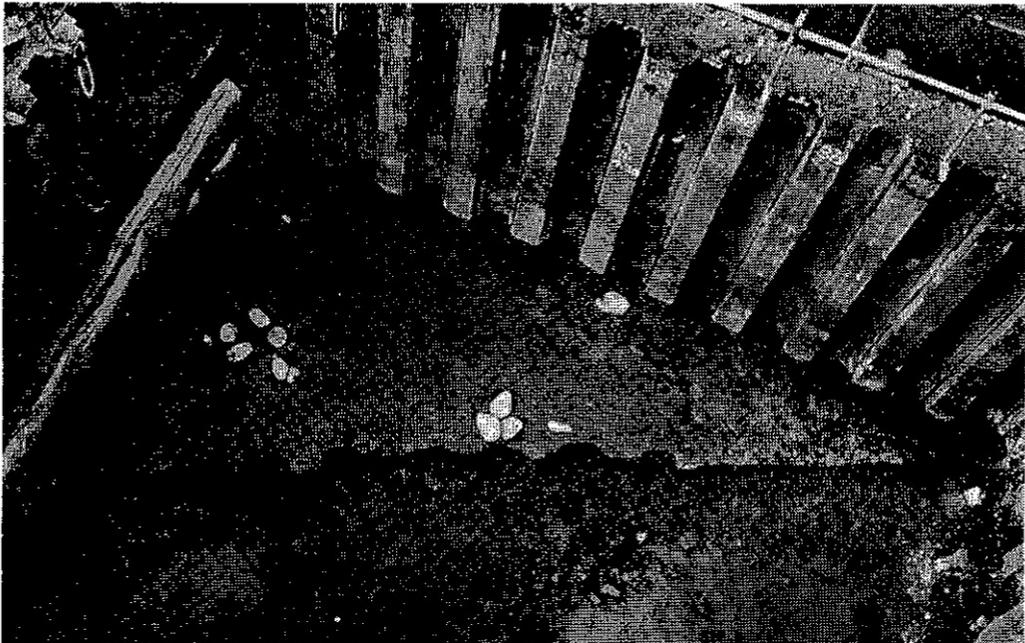
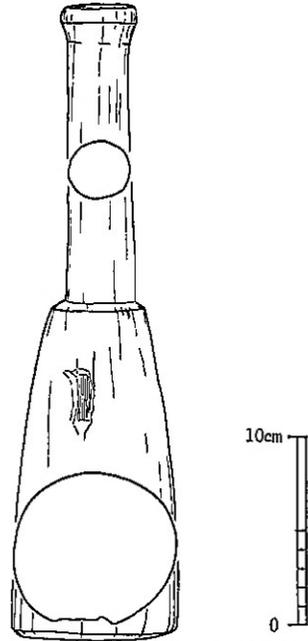
6 第Ⅵ遺構面（第73・74・75図、図版18・28）

第Ⅵ遺構面のベース面は、粘土層である。遺構は、第2地区で径0.5m、深さ0.2mの円形ピットを検出した他は、各地区で自然流路が見られる。第1地区では、第1次調査のSD625の続き、第2地区では東半部にSD627の続き、第3地区では西半部にSD628の続きを検出している。これらは自然流路と考えられ、内部には白灰色の粗砂が堆積し、上面ではオーバーフローが観察される。第2地区のSD627から木器（第73図）が出土した。他に遺物は出土しなかった。

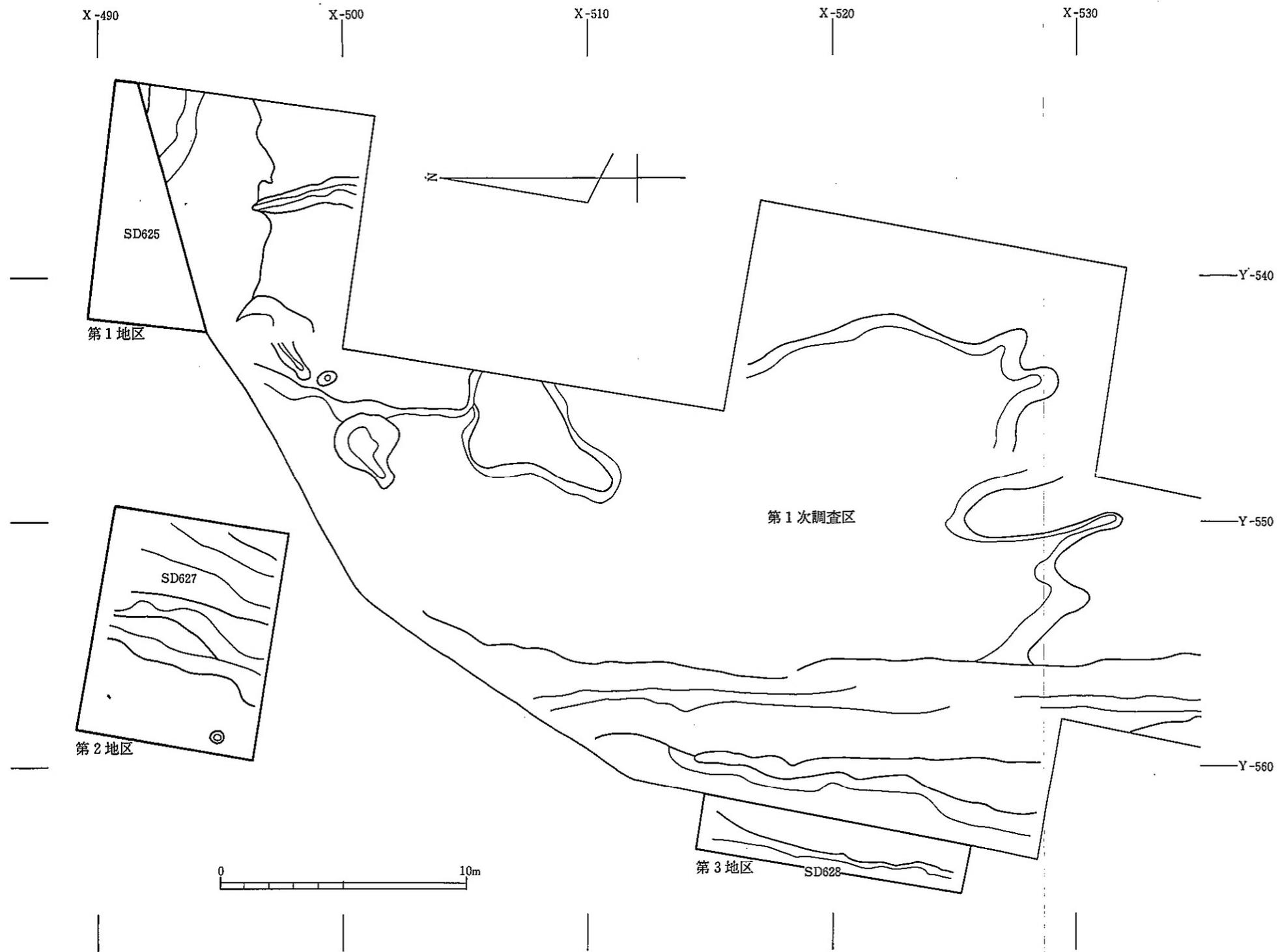
木器（槌）は、全長33.8cm、柄部の直径3.4cm、槌部の最大径9.8cmを測る。柄部と槌部は段で区切られ、柄部の先端はふくらみをもたせる。槌部端面には使用痕が認められる。心持材。

また、第1地区の遺構面下は、弥生時代中期遺構面まで粘土層が続いている。その内部に、河原石が埋没していた。

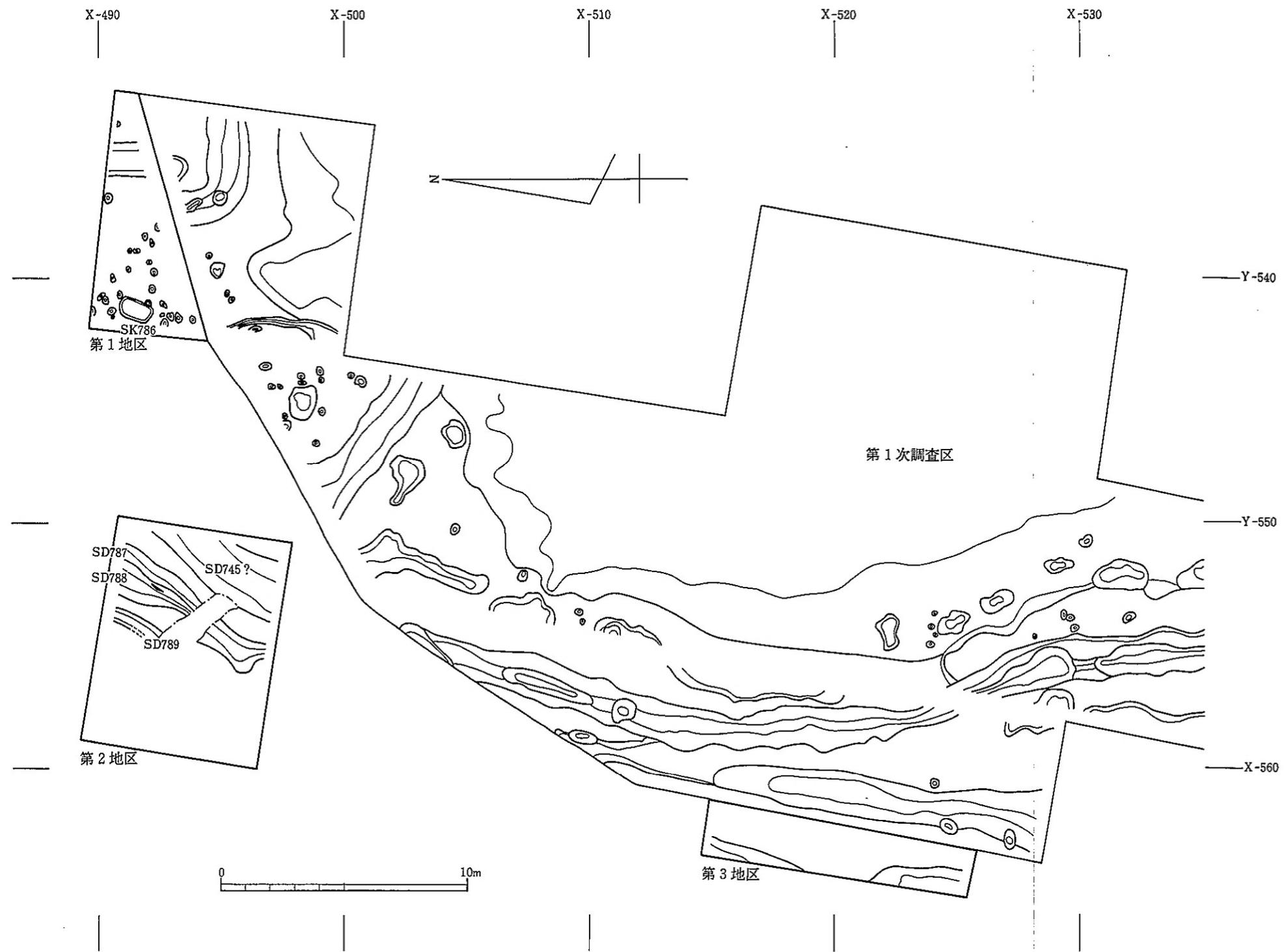
石は、径0.35mを測る楕円形のものから径0.15m程のものまで大小様々で、単独で出土した2個の他は、12個と4個が
第73図 第Ⅵ遺構面自然河川出土遺物
各々ひとかたまりとなっていた。しかし、周囲に遺構は確認されず、配石の状態も意味を見出すことはできないが、人為的に運ばれて、何らかの目的で埋置されたと考えたい。石の出土した粘土層は弥生時代後期の水田層と思われる。



第74図 第1地区、第Ⅵ遺構面下部の配石（写真）



第75図 第Ⅵ遺構面 (弥生時代後期)



第76図 第Ⅶ遺構面 (古墳時代前期)

7 第Ⅵ遺構面（第76図、図版19）

第Ⅵ遺構面は、弥生時代後期以降の流水堆積層上面である。

第1地区では、ピット群、溝、土壌を検出した。ピットは、径0.2～0.3m、深さ0.2m程のもので20数個認められた。しかし柱穴のようなものではなさそうで性格は不明である。S K786は、長径1.4m短径0.8mの長円形で深さ0.2mを測る。内部には粘質土が堆積しており、遺物は土器片がみられた。

この土壌も性格を積極的に推定する材料がない。溝は、南北に延びている。第1次調査（C-1トレンチ）の結果とは合致しない。

第2地区では、溝を4条検出した。4条とも南北に平行に延びている。そのうちS D789は、攪乱を受けて途中で消失し、S D787とS D788は切り合いながら流れている。切り合いは、S D787が新しい。最も東側の溝は、幅約3.0mとやや大きく第1次調査のS D745に連なる可能性がある。これらの溝には、褐色の粘質土が堆積し、古墳時代前期（庄内式）の土器片を含んでいた。

第3地区では、流水堆積層の凸凹を確認したにすぎない。

8 古墳時代中期以降

古墳時代中期以降は、すべて攪乱を受けており、遺構面を検出していない。いくつかの地区で第Ⅵ遺構面上にわずかな土層の堆積がみられたが、遺構面の把握、遺構の検出には至らなかった。

遺物は、古墳時代～現代までのものが攪乱層より出土している。この攪乱は、中央環状線建設以前の工場の基礎や廃棄物によるものである。

第Ⅲ章 まとめにかえて

巨摩廃寺遺跡及び若江北遺跡に対する第2次調査の概略は、以上に述べたとおりである。小規模な調査ではあったが、多くの点で第1次調査の所見を追検証するとともに、また新たな知見を付け加えるに至った事は、予想を超えるものがあった。ここでは、第1次調査の成果を補足する新しい知見の主なものを時期別に簡単に再述して本概要のまとめにかえておきたい。

弥生時代前期では、若江北遺跡の水田経営の開始について、より明確な所見を得る事ができた。第1次調査において第Ⅰ・Ⅱ遺構面間の堆積が2層に分離でき、下層堆積が前期水田に対応するであろうと予測されていたが、今次調査においてこの下層堆積上面(第Ⅰ'遺構面)に自然河川と堤が検出された。堤は、明らかに人為的な盛土によって築かれ、弥生時代前期中葉には既に河川に対する統御を伴って水田が営まれた事を物語っている。一方、巨摩廃寺遺跡では第1次調査より更に深く掘り下げ、その下層の若江北遺跡第Ⅰ遺構面対応面まで精査を実施したが遺構は検出されず、現第2寝屋川付近に弥生時代前期水田の北限を求める事ができよう。

弥生時代中期前半では巨摩廃寺遺跡において一面の水田面が認識できた。流水に伴う自然堆積粘土層の一部ではあるが、畦畔や足跡を伴っており明らかに水田として利用されている。若江北遺跡においても既に数面の水田層が確認されていたが、今次の調査によって更に一面を加えるに至った。度重なる洪水と埋没にも負けず、時々地表面の条件の良好な部分を積極的に水田化して行った状況がよくうかがえる。

弥生時代中期後半には、比較的安定した時期を迎えるのか、両遺跡にはともに集落が営まれる。若江北遺跡では第1次調査Aトレンチ北端部を集落北限とした先の推定が裏付けられ、集落居住域の南北方向への拡がりも確定する事ができた。また、南-第1地区で検出された幅広く浅い溝では、穿孔を施した数点の土器が検出されている。あたかも方形周溝墓の周溝を思わせる出土状況ではあったが、居住域の一面に当たる位置で、しかも検出長が短い事もあって今はその性格については保留せざるを得ない。一方、巨摩廃寺遺跡においても若江北遺跡と同様に中期包含層が2層に分離できること、従って集落面も2面に区別できる事が判明したが、個々の遺構についてはいずれの面に伴うものか必ずしも明確になし得ない点もよく似る。この両遺跡の弥生時代中期集落は、その基盤層や遺物包含層の状況が酷似し、また出土土器も時期的にはほとんど差異を見出す事ができない。この両集落がわずか数10mの空閑地を隔てて同時に併立したものか、あるいはごく短期間の中での一方から他方への移動を考えるのか、遺物の更に精緻な編年的位置付けとともに周辺他遺跡の動向をも含めたこの地における弥生時代中期社会の構造を理解して行く作業の中で解決されるべき問題であろう。

弥生時代後期には、再び両遺跡とも数層の粘土堆積が見られ、その各々が水田として利用された事が、より広範に検出された畦畔や水路などの遺構にうかがえる。

古墳時代に入ってもこの状況は変化しないが、その前期、庄内式期から布留式期にかけての水田遺構についてもいくつかの新しい知見を得る事ができた。巨摩廃寺遺跡では北から南へ向けて水田面が一面から三面へと重複していく事が判明した。この各水田面は、継続的に営まれたものと見え、少なくとも大畦畔はほぼ同位置に同規模で踏襲しており、また、水路に伴う堤も補修を加えながら使用が続けられる。畦畔内に6点もの土器がまとまって埋められていた事は、何らかの農耕祭祀を想わせるし、また若江北遺跡を含めて、梯子の転用品などの木材が畦畔に埋め込まれているのもこの時期に集中する。水田区画の在り方も含めて、この時期に水田農耕が大きく変化した事を想起せざるを得ない。若江北遺跡においても、その北端部では水田面が2層に分かれ、同位置に同規模で踏襲される大畦畔を確認し、併せて上層水田では南北に走る大畦畔を東西に小畦畔が結び、ほぼ方形の区画を採る水田景観が検出された。両遺跡の畦畔や堤、更に水田面を覆う流水砂層出土の土器より見れば、この水田が埋没するのは布留式期の中でもやや古い段階であろう。この時期の堆積が、時の地表面を砂で厚く覆ってしまうような大規模な洪水の最後と考えられ、以後の両遺跡においては厚い砂質堆積は見られない。

古墳時代後期の巨摩廃寺遺跡が墓域となった事は、第1次調査で検出された古墳や、今次調査でもかなり多量に出土した埴輪にうかがえるが、更に1条の特異な溝が検出されている。かなりの時期差を持つと見られる3点の須恵器が、あたかも一括投棄したかのような状況で出土しており、この須恵器及び溝自体の性格については一考を要しよう。

平安時代後期以後は、巨摩廃寺遺跡に集落が営まれている。本遺跡が寺院址として認識されていたにもかかわらず、第1次、第2次調査を通じてその積極的な証左は得られなかった。わずかな量の屋瓦片の出土からは、この集落の一面に位置した小規模な堂屋がしのばれるに過ぎない。むしろ多くの井戸や柱穴、多量の生活遺物の出土からは、本遺跡の東南に位置し、東大阪市教育委員会などによって「若江遺跡」の名称のもとに継続的に調査が実施されている中世集落と一連の遺跡として把える必要がある。若江中世集落の西北部に当る今次調査区遺構群の初源については、井戸出土の土器から、11世紀の中葉と限定して良かろうが、その終焉については今のところ明確ではない。現若江集落付近には、河内国守護代遊左氏の本拠地として築かれ、信長による全国征覇の過程の中で滅んでいく若江城が想定されるだけに、今次調査区遺構群の終焉については、包含層出土遺物を検討する中で考察を加えていく必要がある。また豊富に出土した遺物は、当時の生活を復元する上で重要な資料となるが、今回は特に三辻利一先生に和泉型瓦器碗の胎土分析をお願いした。その結果は、御報文のとおりであるが、和泉型と分類される瓦器碗にも複数の産地が想定され、かなり複雑な動きを示す事が判る。今後、このデータは中世における日常雑器の生産と流通を考える上で大きな基礎資料となるものであろう。

今次調査は、個々の調査区が狭小でしかも分散しており、本概要も断片的な遺構・遺物の説明の羅列となったが、あくまでも両遺跡第1次調査概報の追補版として御理解いただく事をお願いして調査成果の概要報告を終えたい。

付 章

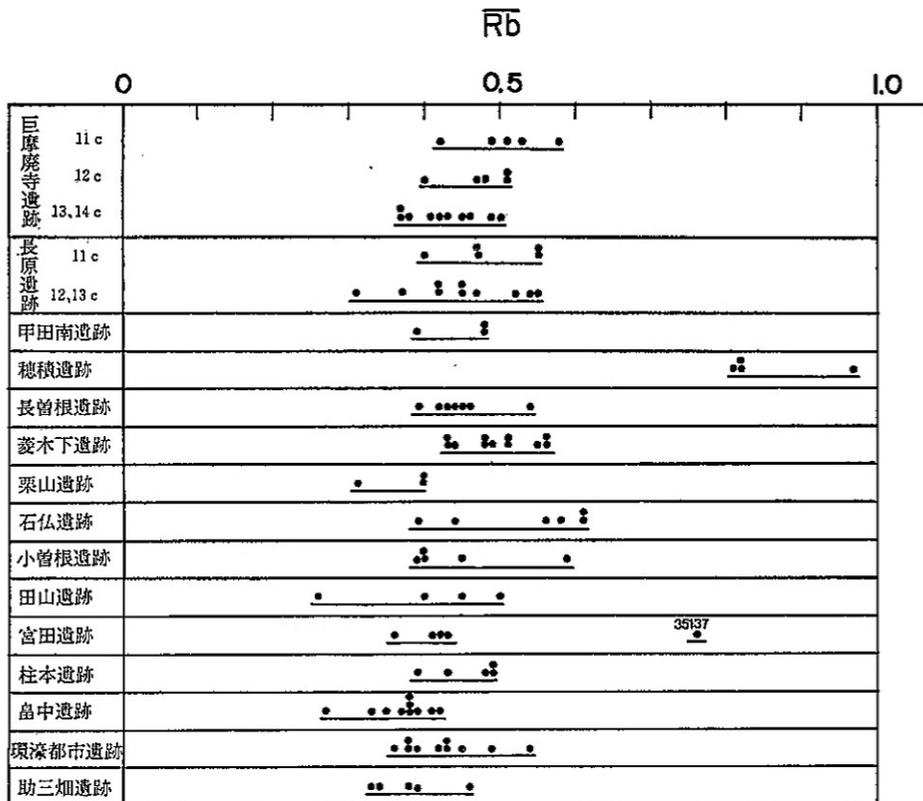
付章 大阪府下の中世遺跡出土瓦器の胎土分析

奈良教育大学教授 三辻 利一

大阪府下の中世遺跡からは多数の瓦器片が出土するが、その産地についてはこれまでのところ一向に手掛りが得られていない。これらの瓦器の産地に関する情報を少しでも得るため胎土分析を試みた。

分析方法は蛍光X線分析法である。土器中の含有元素で蛍光X線分析法で簡単に定量分析できるのは、K、Ca、Fe、Rb、Srの5元素である。瓦器資料は表面を研磨してから200メッシュ程度の粉末にして測定された。分析データは同時に測定された。岩石標準試料JG-1による規格化値で表示された。 \bar{K} 、Rbなどは規格化値を示す。K=1は K_2O にして約4.0%、Ca=1はCaOにして2.2%、Fe=1は Fe_2O_3 にして2.2%、Rb=1は含有量にして180 ppm、Sr=1は184 ppmに相当する。

分析結果を図に描いて瓦器胎土の違いを調べてみよう。第1図には、遺跡ごとに分けて瓦器中のRb量を比較してある。15遺跡から出土した瓦器の分析結果が比較されているが、同一遺跡で



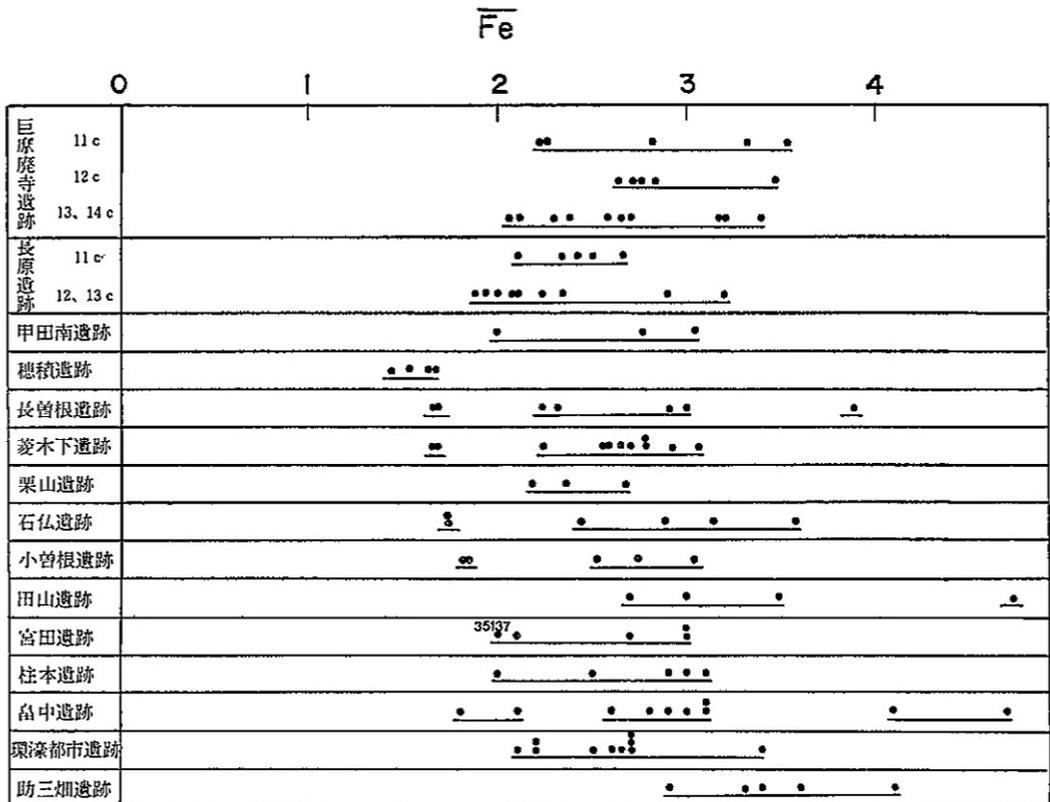
第1図 大阪府下遺跡出土瓦器の Rb 量

をみると、最上段に示してある巨摩廃寺遺跡の瓦器は同じ11世紀のものでも3グループに分かれ、また、12世紀の瓦器と13・14世紀の瓦器の胎土は違うことを示している。ともかく、Sr因子はこれらの瓦器を細かく分類する上に役立ちそうである。Sr因子を使って瓦器を分類した結果は後で述べる。各因子が瓦器の分類にどのように役立つかの点検を先に進めよう。

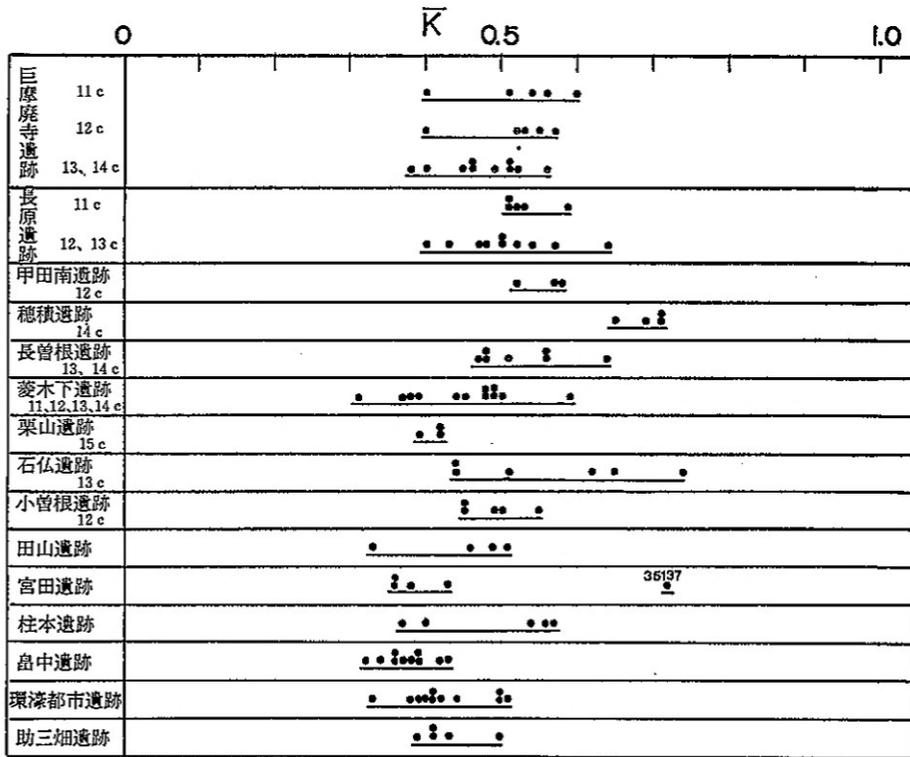
第3図にはFe量を比較してある。Fe量もSr量ほどではないがばらついている。とくに、穂積遺跡の瓦器はFe量が少なく、かつ、まとまっている。Fe量が少なく、しかも、前述したRb量が多いのが穂積遺跡の瓦器胎土の特徴であろう。宮田遺跡の1点の瓦器(試料番号35137)はFe量でも穂積遺跡の瓦器に似ている。Fe因子で他の瓦器をこれ以上分類するのは難しい。

第4図にはK量を比較してある。Rb因子と同様、どの遺跡の瓦器のK量もよく似ている。穂積遺跡と宮田遺跡の1点(試料番号35137)の瓦器だけがK量がやや多い。通常、土器胎土中のK量とRb量の間には正の相関関係があり、この点からみると、この結果は妥当である。

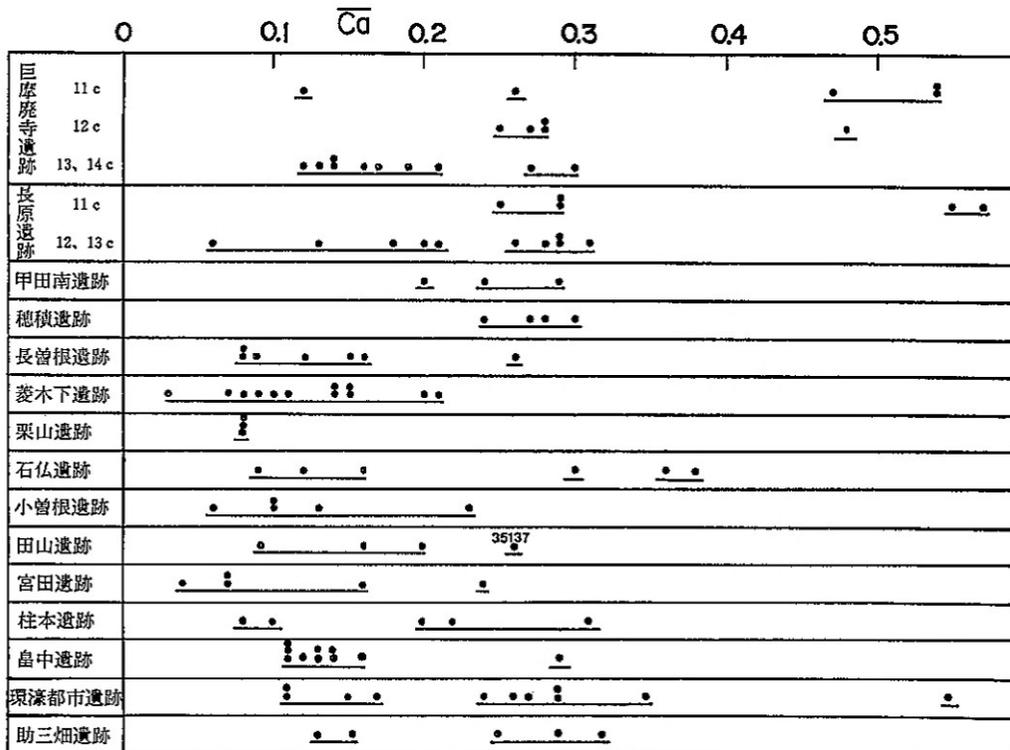
第5図にはCa量を比較してある。土器胎土中のCa量はSr量とほぼ正の相関関係をもつことが知られている。予想どおり、Sr量と同様、Ca量は大きくばらついており、異なる産地で作られたものが混っていることを示唆する。以上は大阪府の14遺跡と岡山県邑久町の1遺跡から出土した瓦器の胎土を比べてみた結果であるが、とくにCa因子とSr因子に大きなばらつきが認



第3図 大阪府下遺跡出土瓦器のFe量

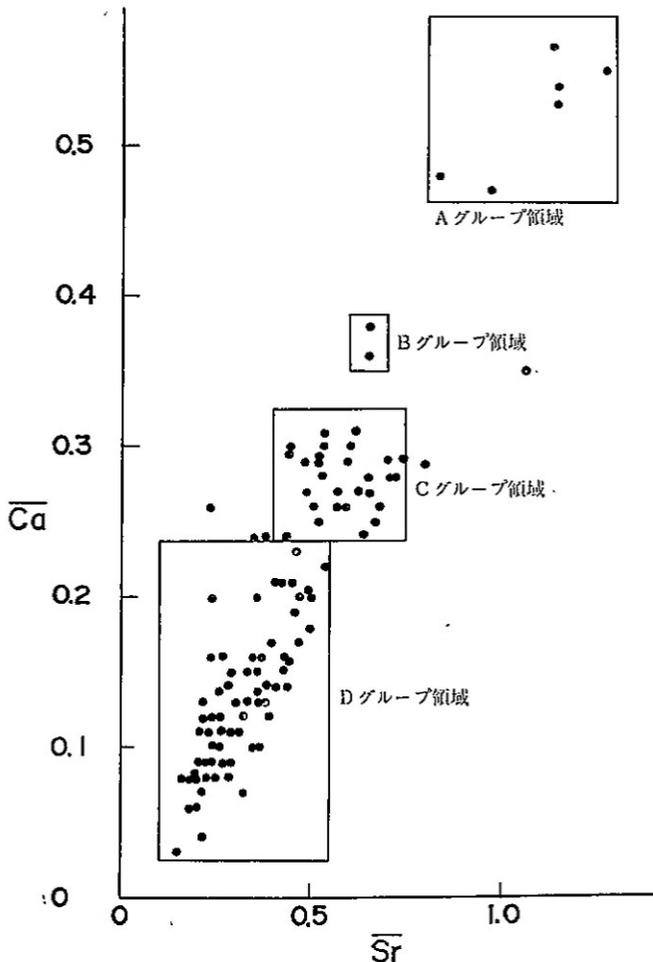


第4図 大阪府下遺跡出土瓦器のK量



第5図 大阪府下遺跡出土瓦器のCa量

められ、もし、これらの瓦器を胎土分析によってグループ分けすることができるとすれば、CaとSrが最も有効な因子であろうと考えられた。そこで、これらの全分析値をCa-Sr分布図上にプロットしてみた。それが第6図である。そうすると、CaとSr因子の間には正の相関があるから、右上がりの直線上にこれらの点は分布するはずである。予想したような直線が得られた。しかもその分布は団子状である。Ca、Sr量の多いAグループから、Ca、Sr量の少ないDグループまで少なくとも4グループに分類できることが分かる。正確にはこのグループ分けはクラスター分析で行うべきであるが、ここではCa-Sr分布図で団子状にまとまったものを1グループとした。C、Dグループは連続して分布するようにも見えるが、 $\bar{Ca}=0.3$ 、 $\bar{Sr}=0.5$ 近傍にとくに点が集中しており、これらはDグループとは区別されるべきだと考えた。この結果、少なくとも、これらの瓦器はCa-Sr分布図で4グループに分けられることが分かった。この分類にしたがって、各遺跡出土瓦器がどのグループに属するかをまとめたのが第1表である。これを見ると、Aグループは東大阪市の巨摩廃寺遺跡と大阪市の長原遺跡に多くみられ、しかも、11、12世紀に集中する。この他には、大阪府南部にある堺市の環濠都市遺跡の12世紀のものの中にわずかに1点検出されたにすぎない。逆に、Bグループは大阪府北部豊中市や高槻市の遺跡には検出されず、大阪府南部の河内長野市の石仏遺跡に2点、堺市の環濠都市遺跡から1点検出された。CグループもAグループの瓦器と同様、東大阪市の巨摩廃寺遺跡と大阪市の長原遺跡に集中し、しかも、11・12世紀のものに多い。一方、Dグループはもっとも普遍的に検出された瓦器で大阪府下全域の遺跡から検出されたが、とくに、12世紀以後に目立って検出され、13・14世紀の瓦器はほとんどDグループである。この結果は時期によって瓦器の産地が異なっていることを示唆する。そこで、これ



第6図 Ca-Sr 分布図による瓦器の分類

大阪府南部にある堺市の環濠都市遺跡の12世紀のものの中にわずかに1点検出されたにすぎない。逆に、Bグループは大阪府北部豊中市や高槻市の遺跡には検出されず、大阪府南部の河内長野市の石仏遺跡に2点、堺市の環濠都市遺跡から1点検出された。CグループもAグループの瓦器と同様、東大阪市の巨摩廃寺遺跡と大阪市の長原遺跡に集中し、しかも、11・12世紀のものに多い。一方、Dグループはもっとも普遍的に検出された瓦器で大阪府下全域の遺跡から検出されたが、とくに、12世紀以後に目立って検出され、13・14世紀の瓦器はほとんどDグループである。この結果は時期によって瓦器の産地が異なっていることを示唆する。そこで、これ

遺跡地名	遺跡名	時代 (C)	A	B	C	D	E
東大阪市	巨摩麿寺遺跡	11	3	0	1	1	0
		12	1	0	4	0	0
		13	0	0	1	4	0
		14	0	0	1	4	0
大阪市	長原遺跡	11	2	0	3	0	0
		12	0	0	4	1	0
		13	0	0	1	4	0
富田林市	甲田南遺跡	12	0	0	1	2	0
豊中市	穂積遺跡	14	0	0	0	0	4
堺市	長曾根遺跡	13	0	0	0	4	0
		14	0	0	0	3	0
堺市	菱木下遺跡	11	0	0	0	1	0
		12	0	0	0	1	0
		13	0	0	0	5	0
		14	0	0	0	5	0
河内長野市	栗山遺跡	15	0	0	0	3	0
河内長野市	石仏遺跡	13	0	2	1	3	0
豊中市	小曾根遺跡	12	0	0	0	5	0
阪南町	田山遺跡	13	0	0	1	3	0
高槻市	宮田遺跡	12	0	0	0	4	1
高槻市	柱本遺跡	13	0	0	1	4	0
貝塚市	畠中遺跡	12	0	0	1	6	0
		13	0	0	0	3	0
堺市	環濠都市遺跡	12	1	1	2	1	0
		13	0	0	3	2	0
岡山県邑久町	助三畑遺跡	13	0	0	3	2	0

第1表 大阪府下遺跡出土瓦器の分類

時代 (世紀)	A	B	C	D	E
11	5	0	4	2	0
12	2	1	12	20	1
13	0	2	11	34	0
14	0	0	1	12	4
15	0	0	0	3	0

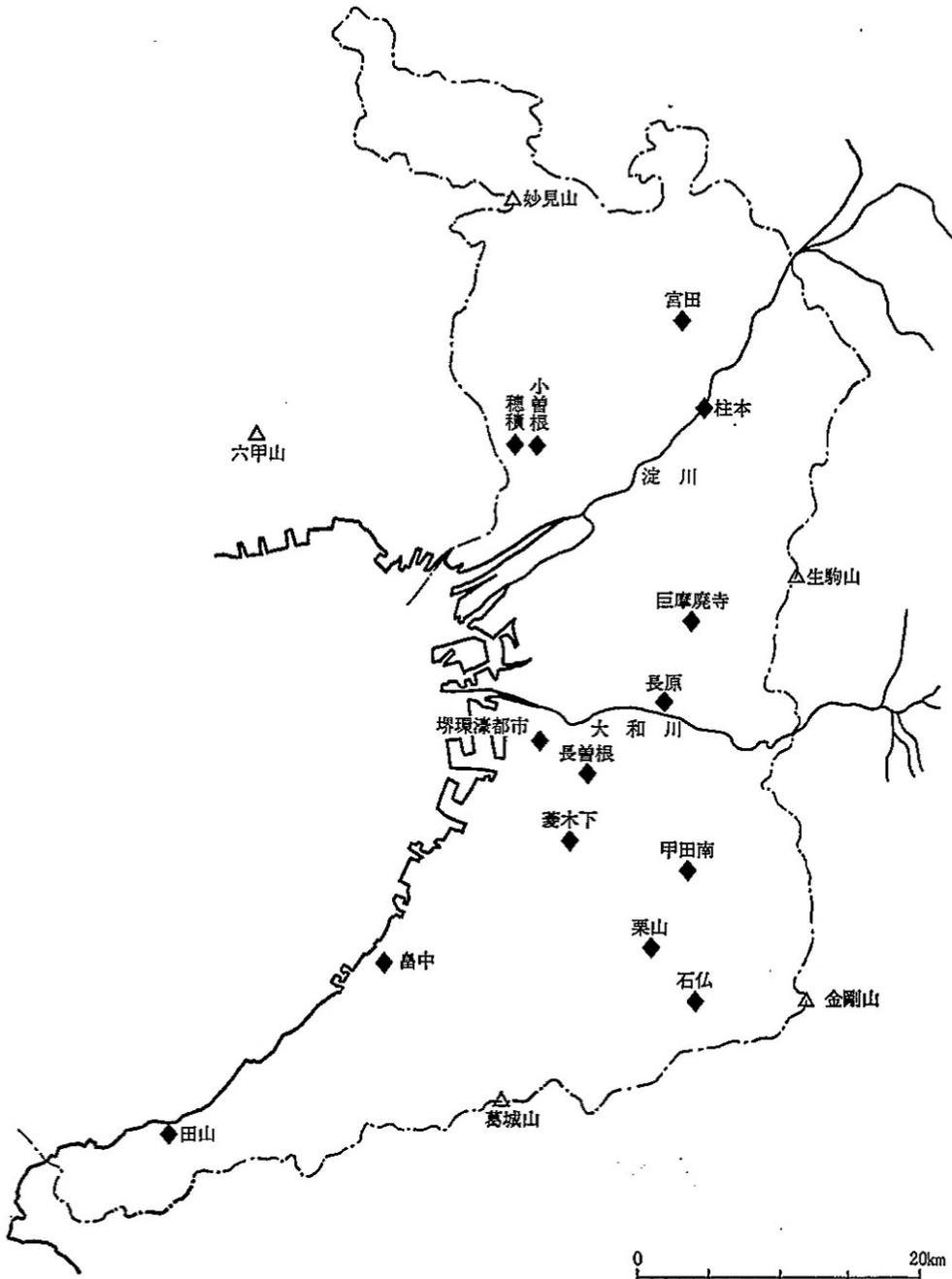
第2表 遺跡出土瓦器の時代ごとの分類

ら5グループの瓦器を時期別に整理したのが第2表である。そうすると、Aグループは11・12世紀にのみ検出され、Bグループは12・13世紀にのみ検出される。一方、Cグループの瓦器は11世紀にもあるが、12・13世紀に多くみられ、14・15世紀にはほとんど姿を消す。これに代わってDグループの瓦器が14・15世紀の瓦器を独占するようになる。Eグループは穂積遺跡の瓦器であり、これは他のグループの瓦器とは異質であることは前に述べた。Eグループに属するものには、12世紀の高槻市の宮田遺跡から1点出土しているが、大阪府南部の遺跡からは検出されていない。このようにA、B、C、D、Eに分類された瓦器は、A、C、Eグループは大阪府北部の遺跡に多くBグループは逆に大阪府南部に多いという工合に地域によって分布差があることが分かった。また、Aグループは11・12世紀に、Bグループは12・13世紀にのみ検出されるし、Cグループは12・13世紀に、また、Dグループも12世紀以後に多くみられるというように時期による分布差の違いがあることも認められた。

さて、これらA、B、C、D、Eグループの瓦器の産地は一体何処なのだろうか。窯跡が残っていないので、何処と指定する訳にはいかないが、ある程度推察することは可能である。遺跡に近いという条件を優先するとすれば、A・Cグループは大阪市と東大阪市の遺跡に集中するところから、大阪市か東大阪市周辺に産地があるものと推定される。Bグループは河内長野市と堺市の遺跡にのみ検出されたから、大阪府南部に産地があると推定される。一方、Dグループの瓦器は堺市と貝塚市の遺跡に集中して検出されることから、泉南地方に産地があるものと推定される。Eグループの瓦器は特別で、Rb量やK量が多いところから、六甲山系の花こう岩地帯に産地があるものと推察される。また、時期的にはA・Cグループが早い時期に出現し、時代が下がるにつれて瓦器生産の中心地は泉南地方へ産地が移動していったと推定される。

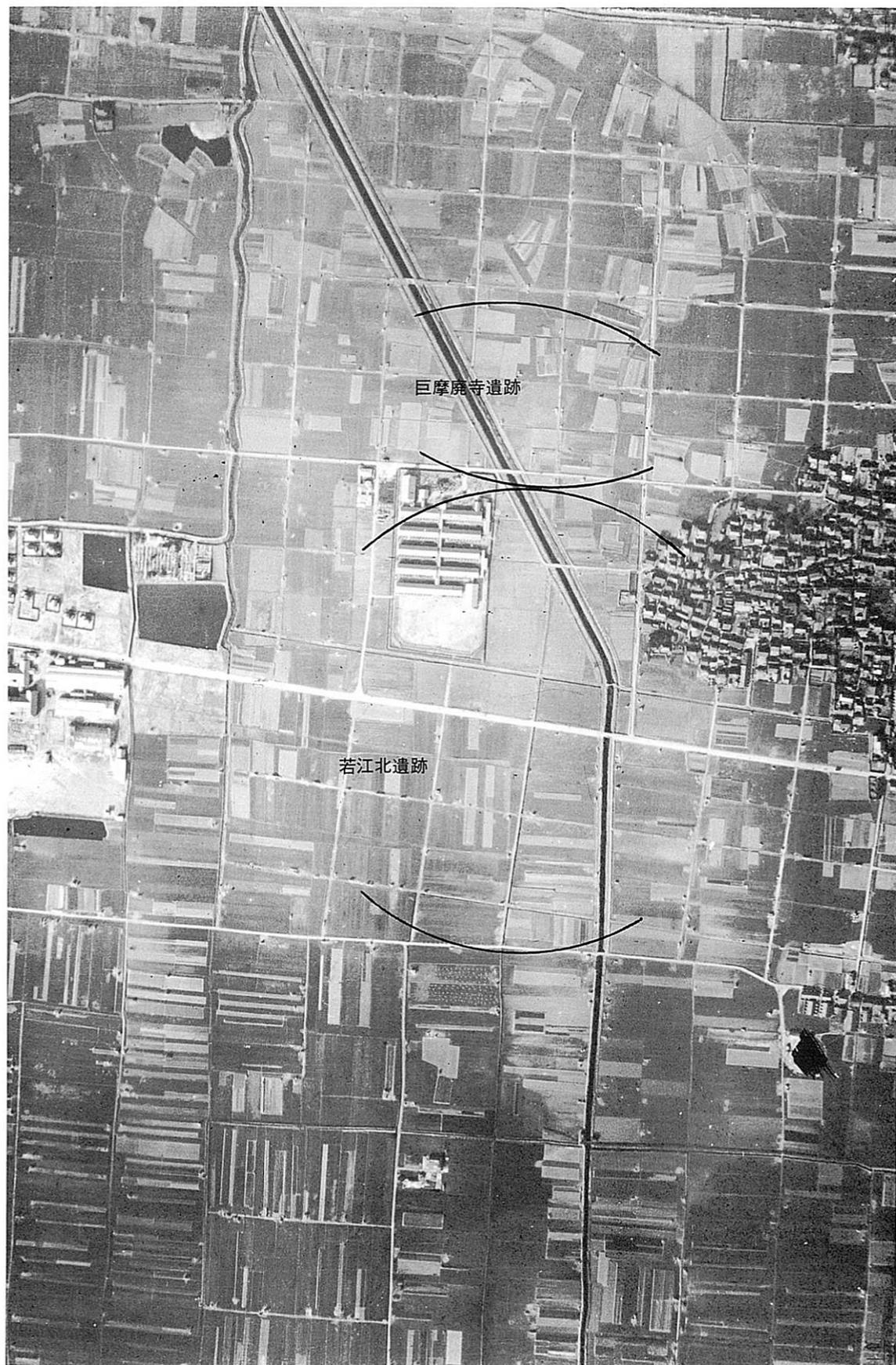
以上の結果は飽くまで、Ca-Sr分布図による分類にしたがって推定した結果であり、これらの結果が顕微鏡観察による岩石学的研究によっても裏付けられれば大変面白い。

なお、13世紀の岡山県邑久町の助三畑遺跡の5点はC・D群に属し、大阪から搬入された瓦器である可能性がある。同じ13世紀の大阪府の遺跡から出土する瓦器もC・D群に属するものが多いところがよく対応しており、大阪からの搬入品である可能性は高い。



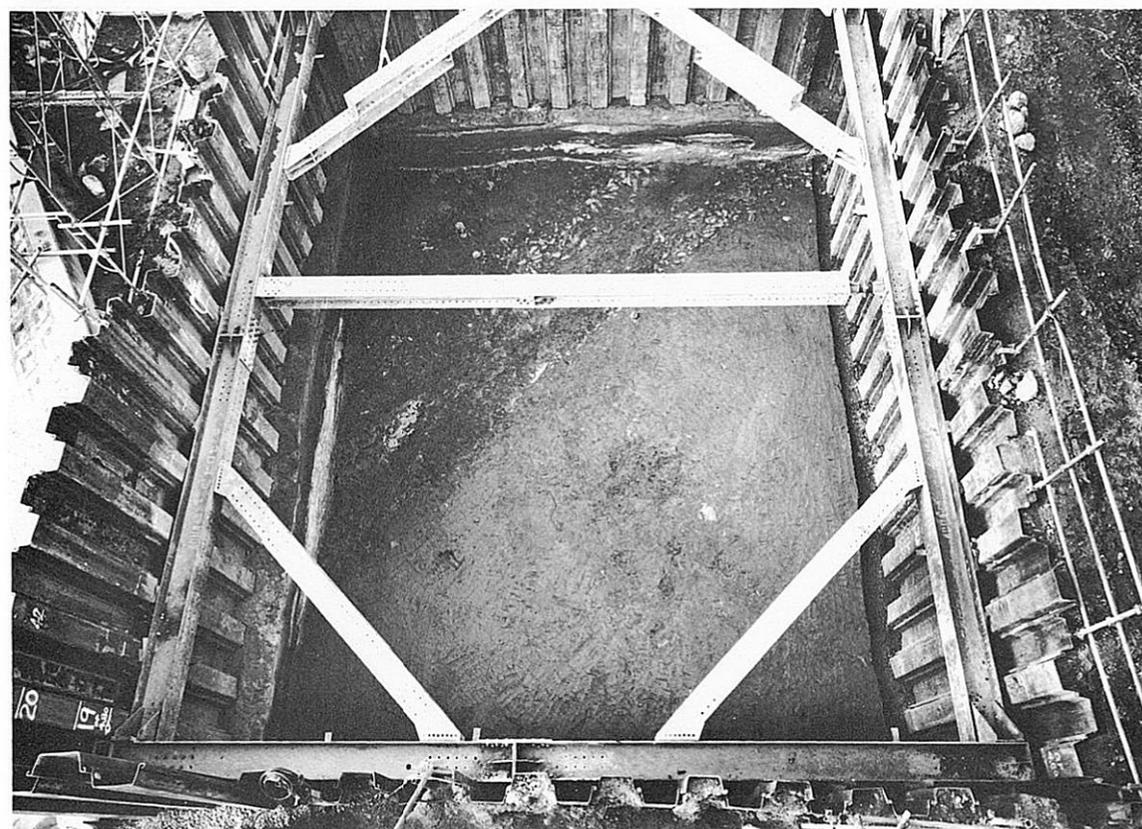
第7図 遺跡分布図

版 圖





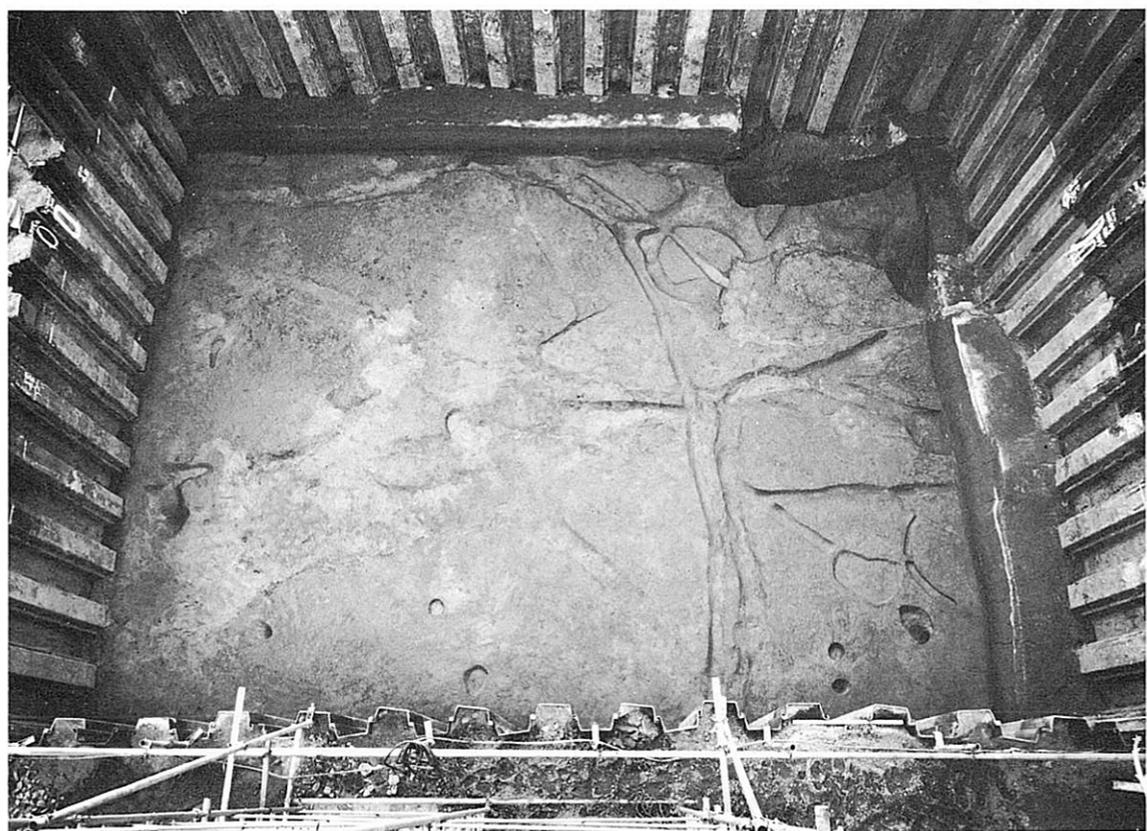
第4地区、自然河川（東から）



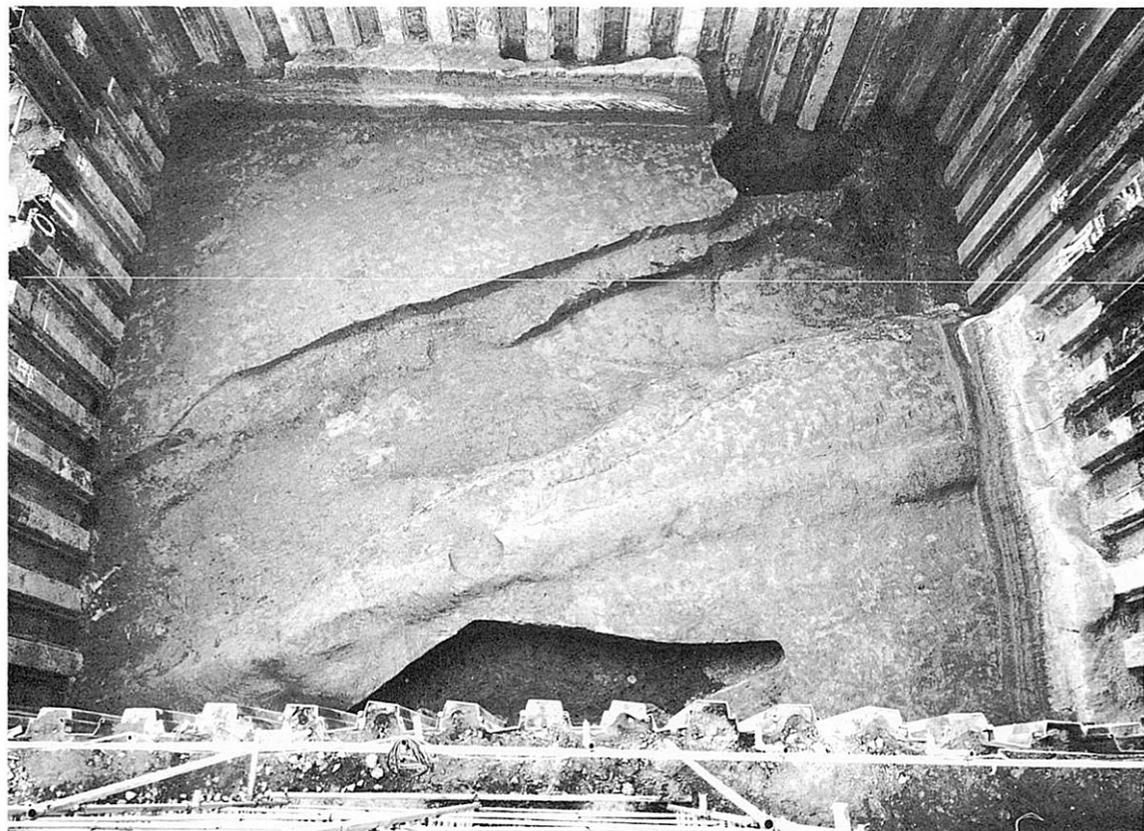
第6地区、自然河川（南から）



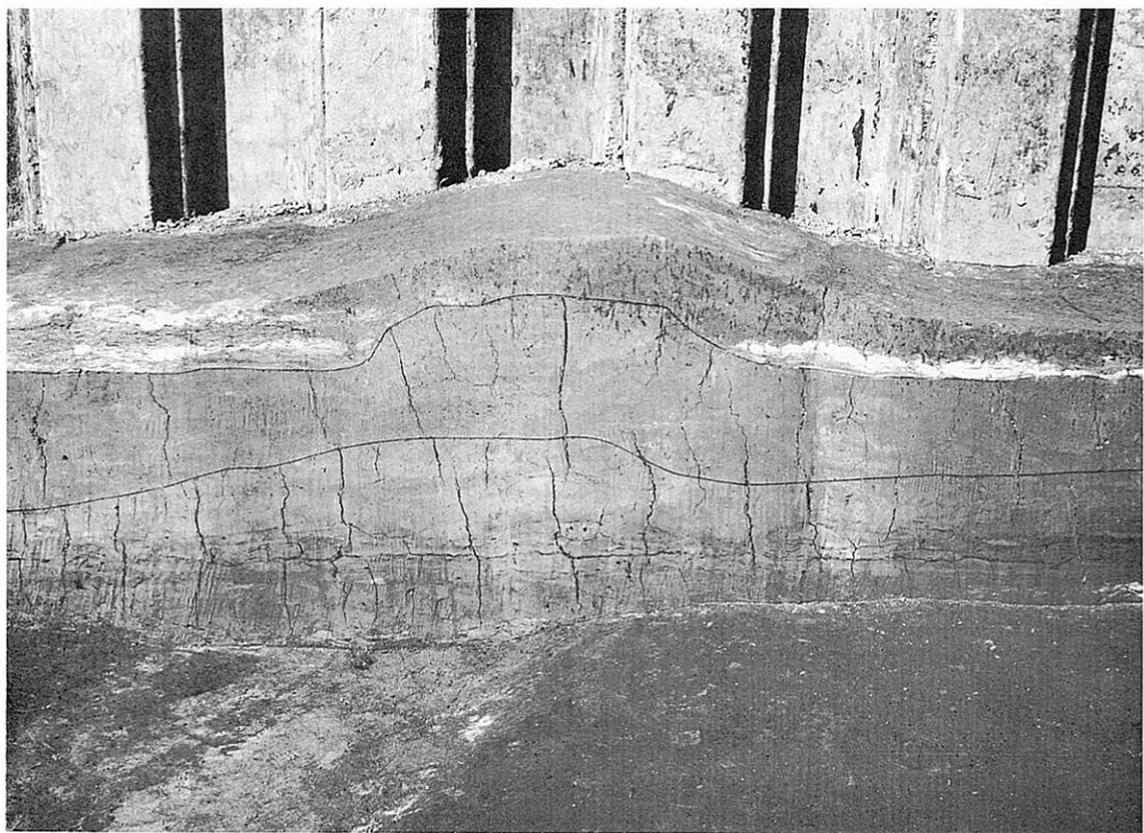
第4地区、中期水田面（東から）



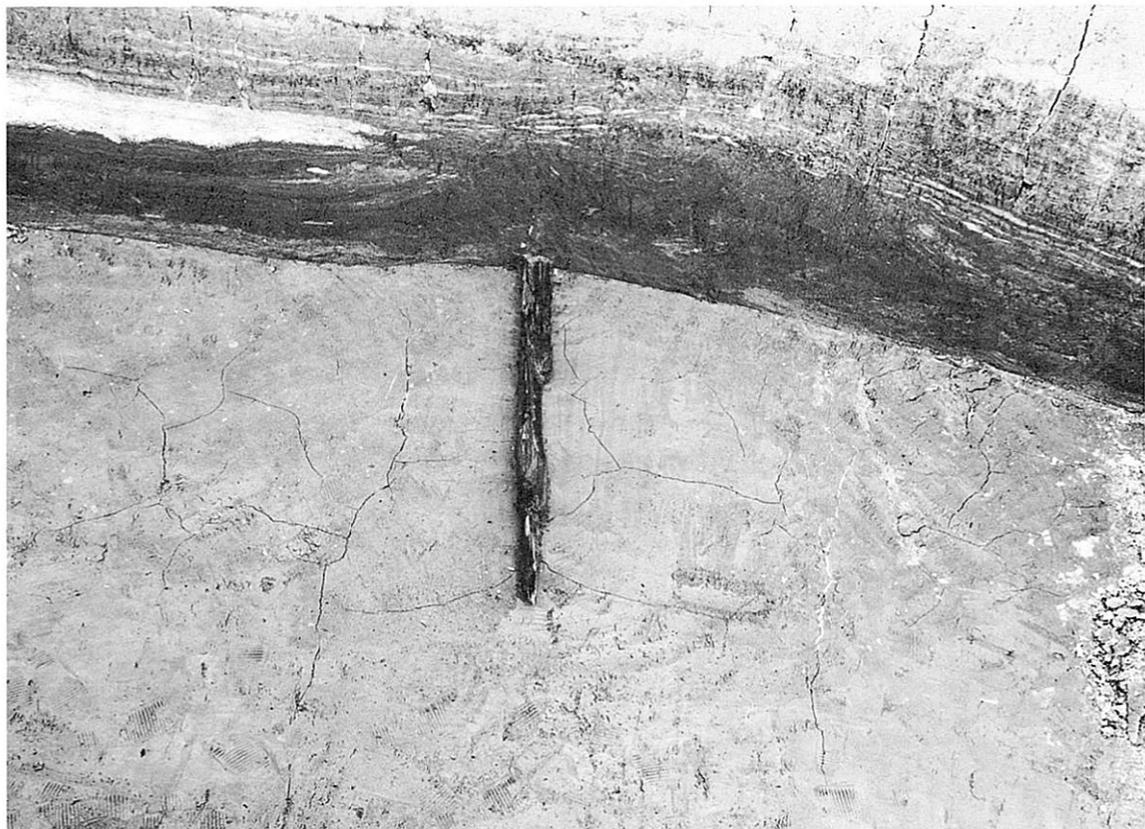
第4地区、中期後半集落面（東から）



第4地区、庄内水田面Ⅱ（東から）



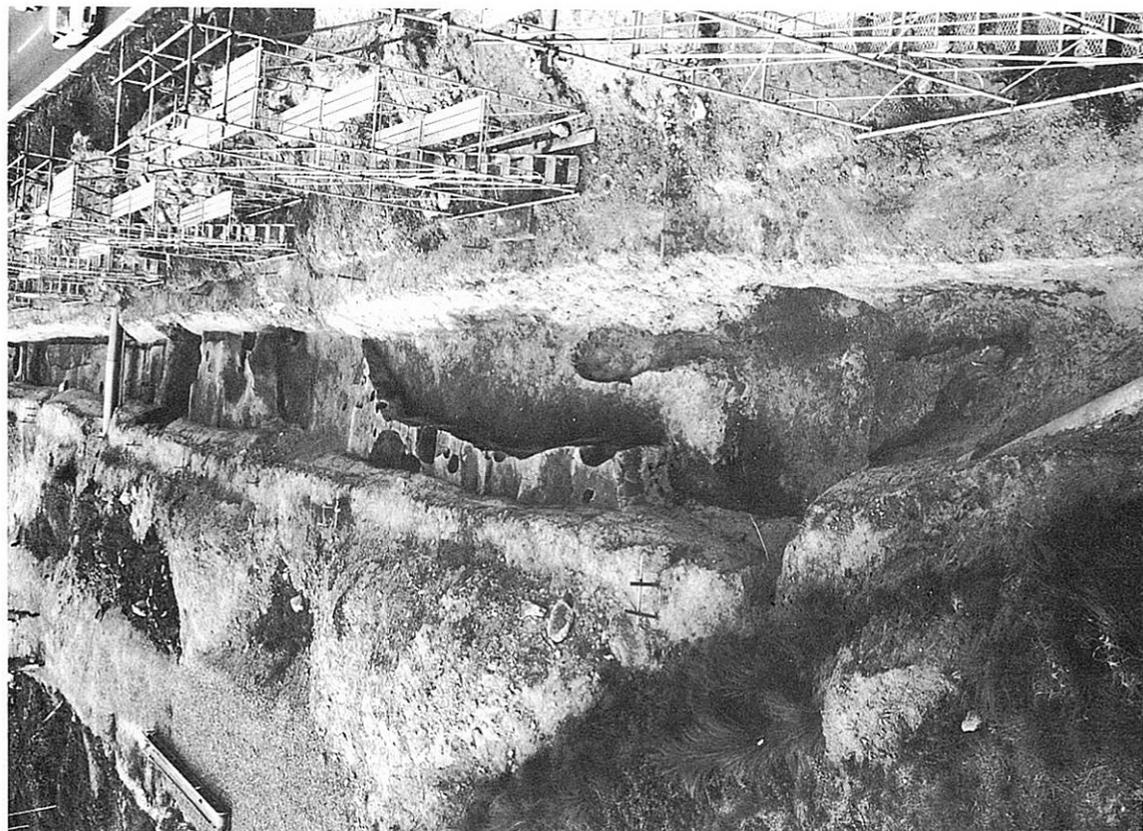
第4地区、古墳時代前期水田面の重複状況



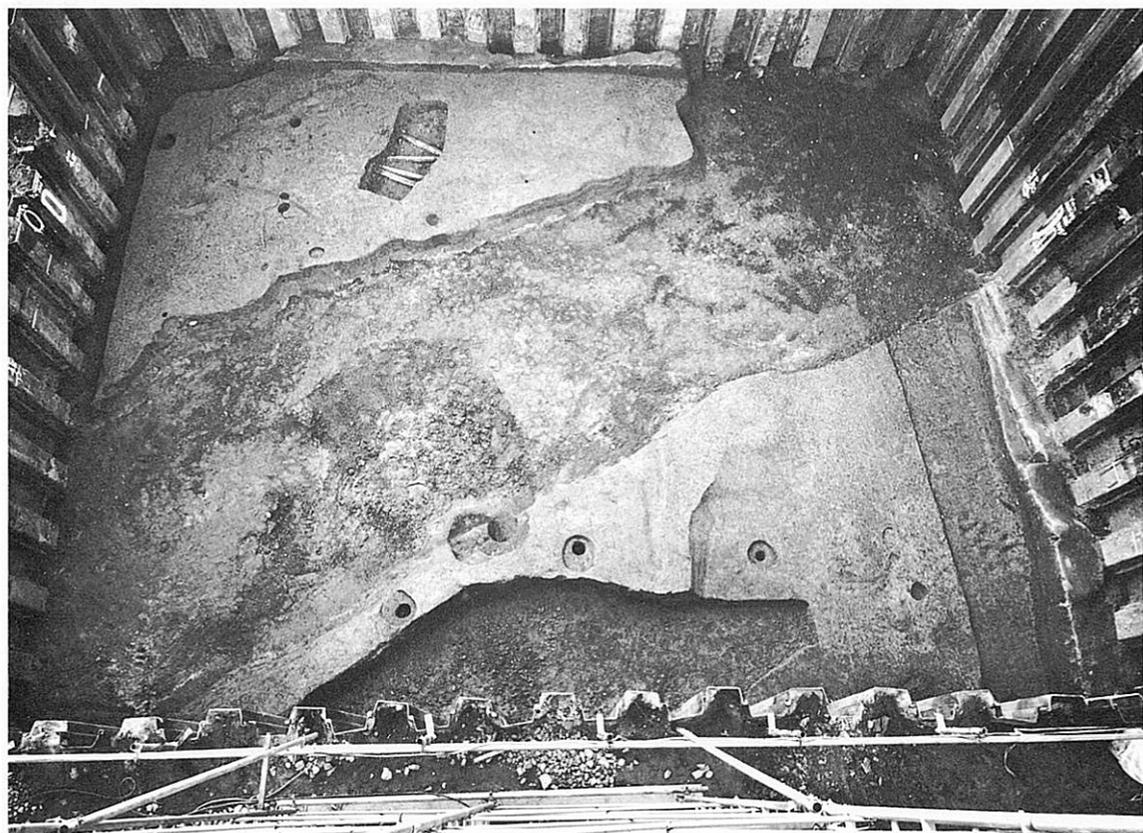
第1地区、庄内水田面Ⅱの畦畔と木片（梯子）（南から）



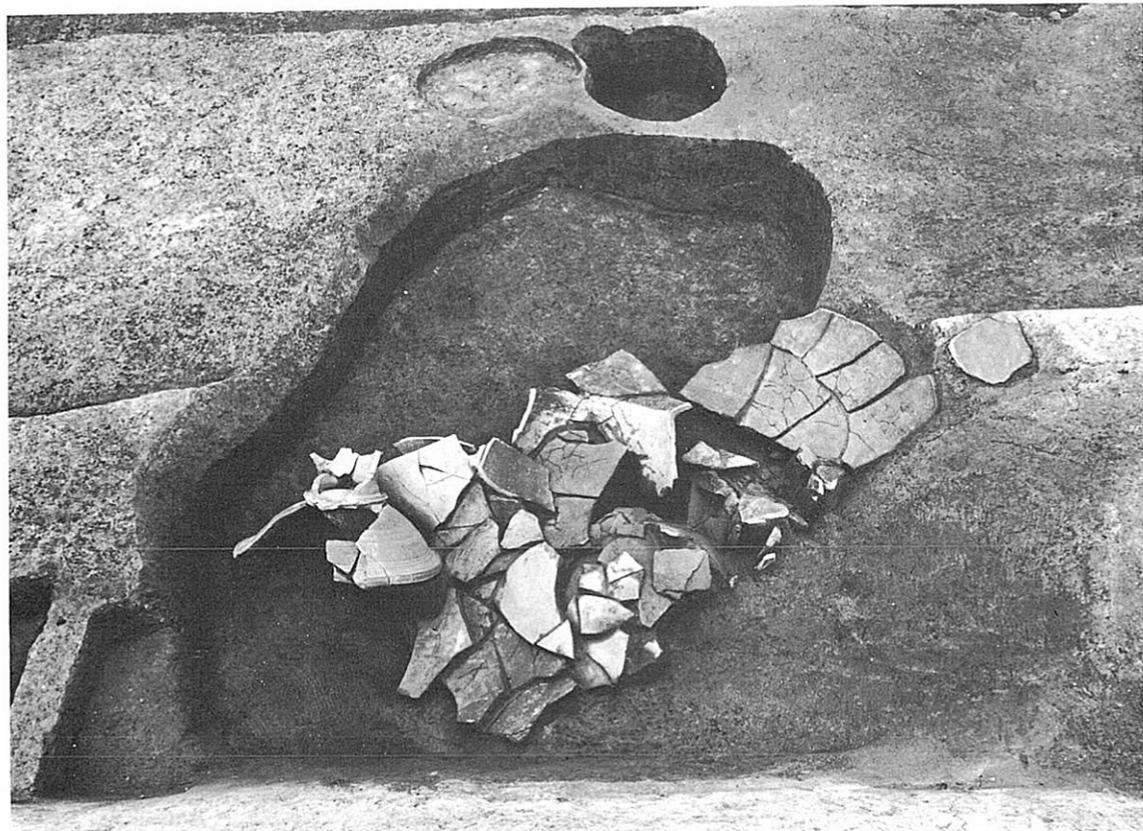
第4地区、古墳時代前期水田面Ⅲの畦畔内土器出土状況



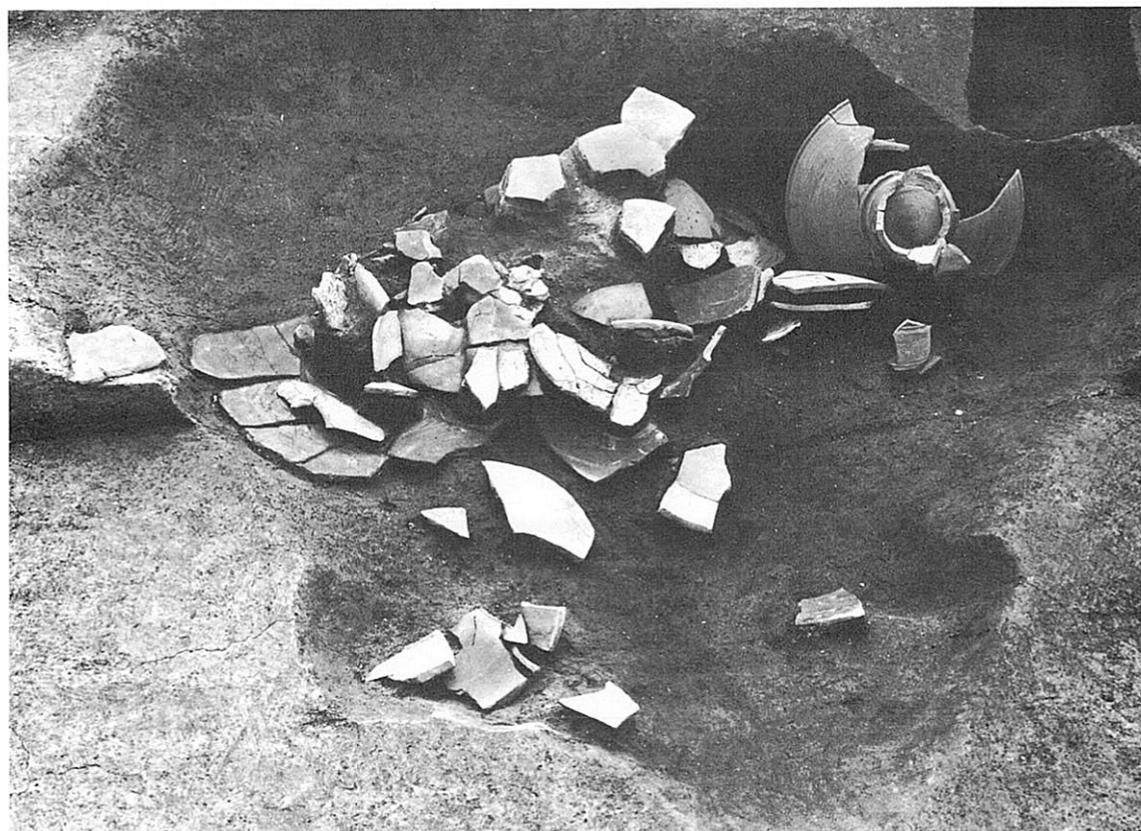
第3地区 (南から)



第4地区 (東から)



(西から)



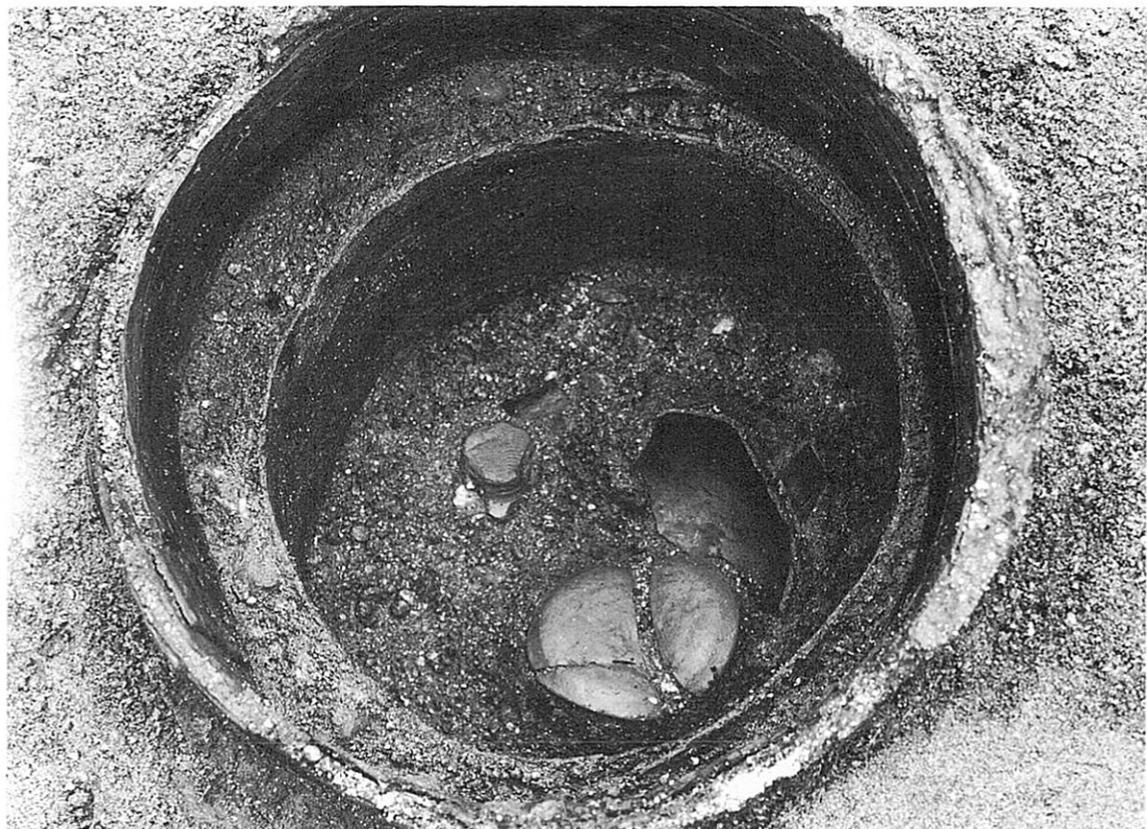
(東から)



井戸17(右)・18(左)(東から)



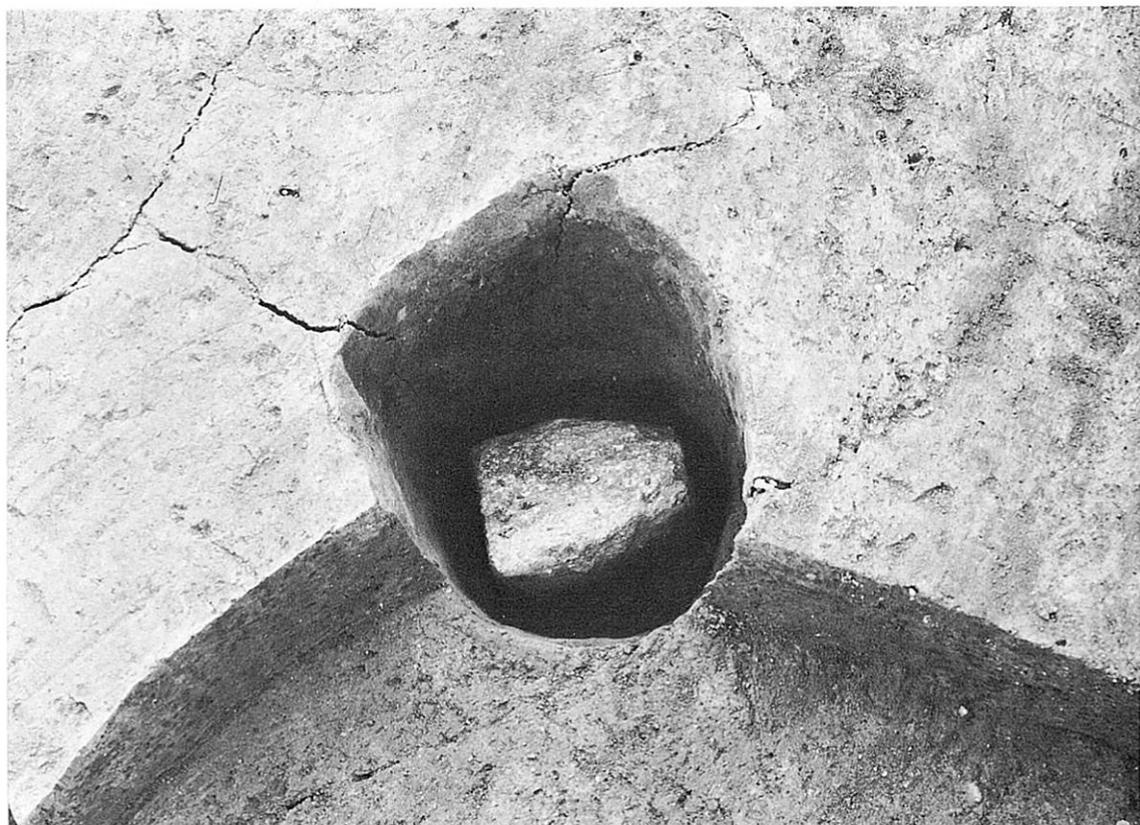
井戸20(右)・21(左)(西から)



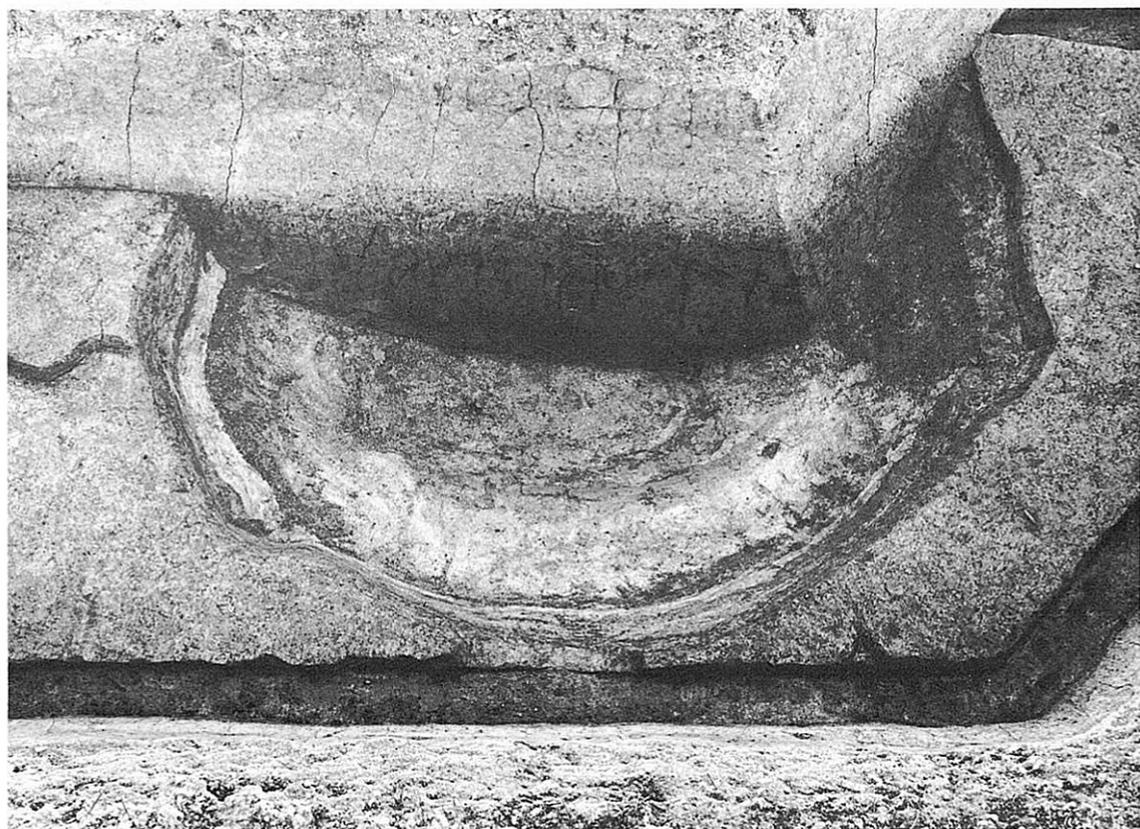
井戸22 (南から)



井戸24 (南から)



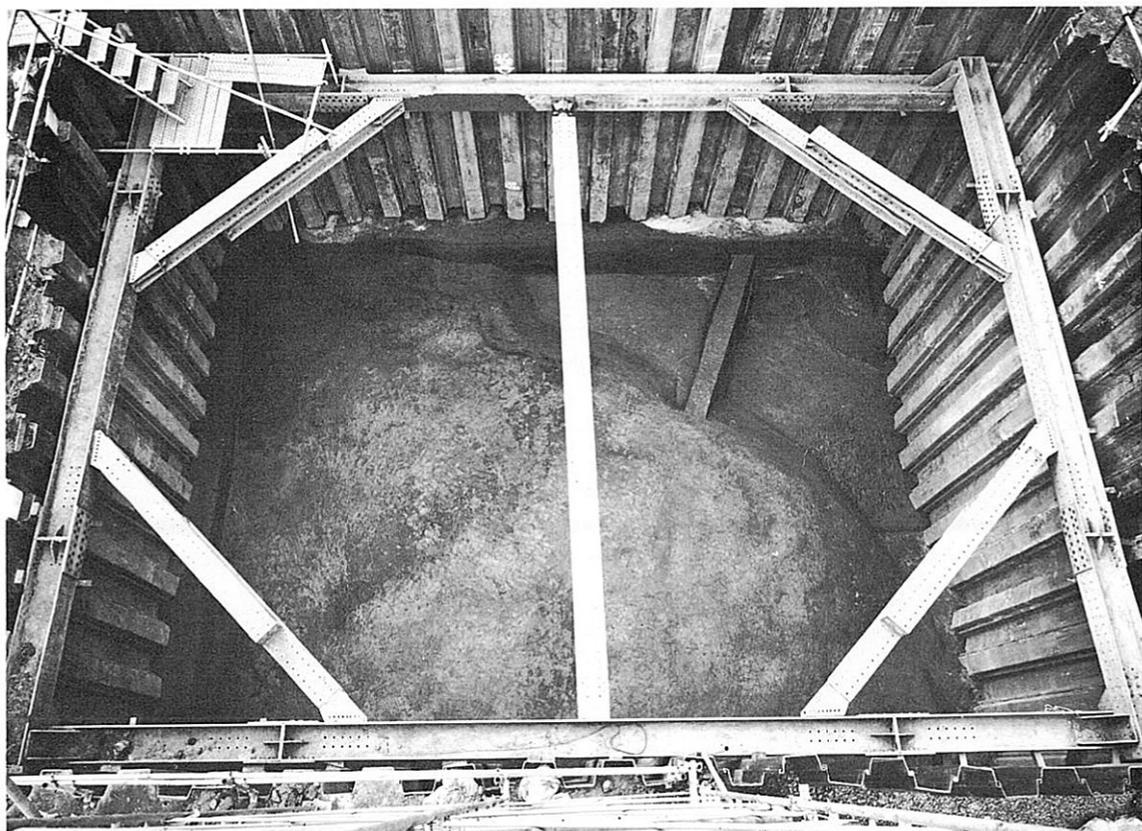
柱穴1、小礎石出土状況



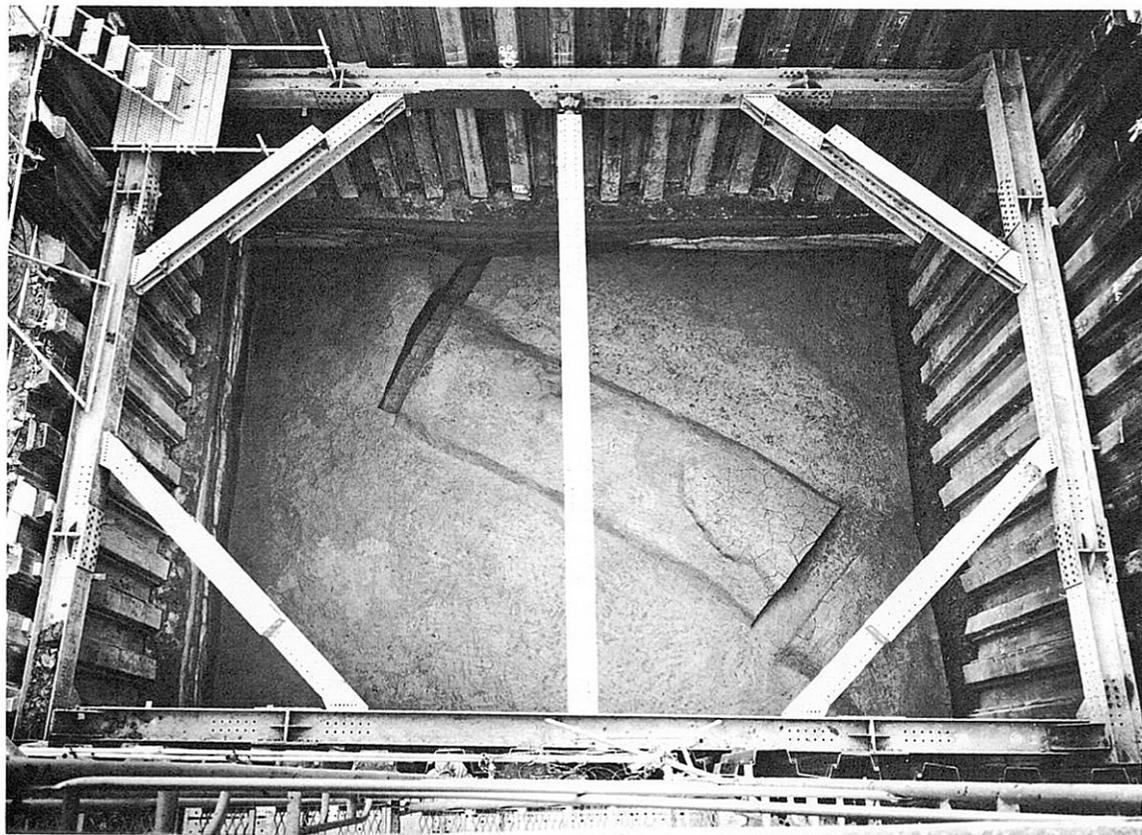
土壇38 (東から)



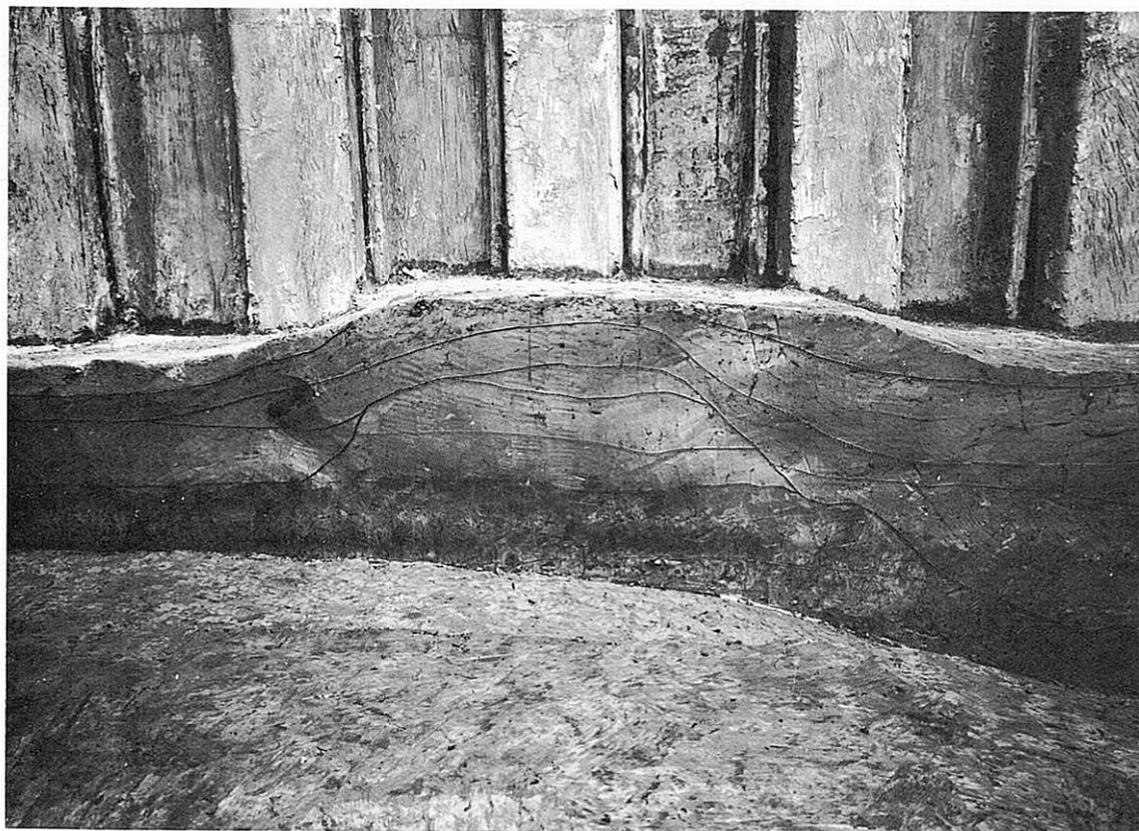
第1地区、第I遺構面溝（西から）



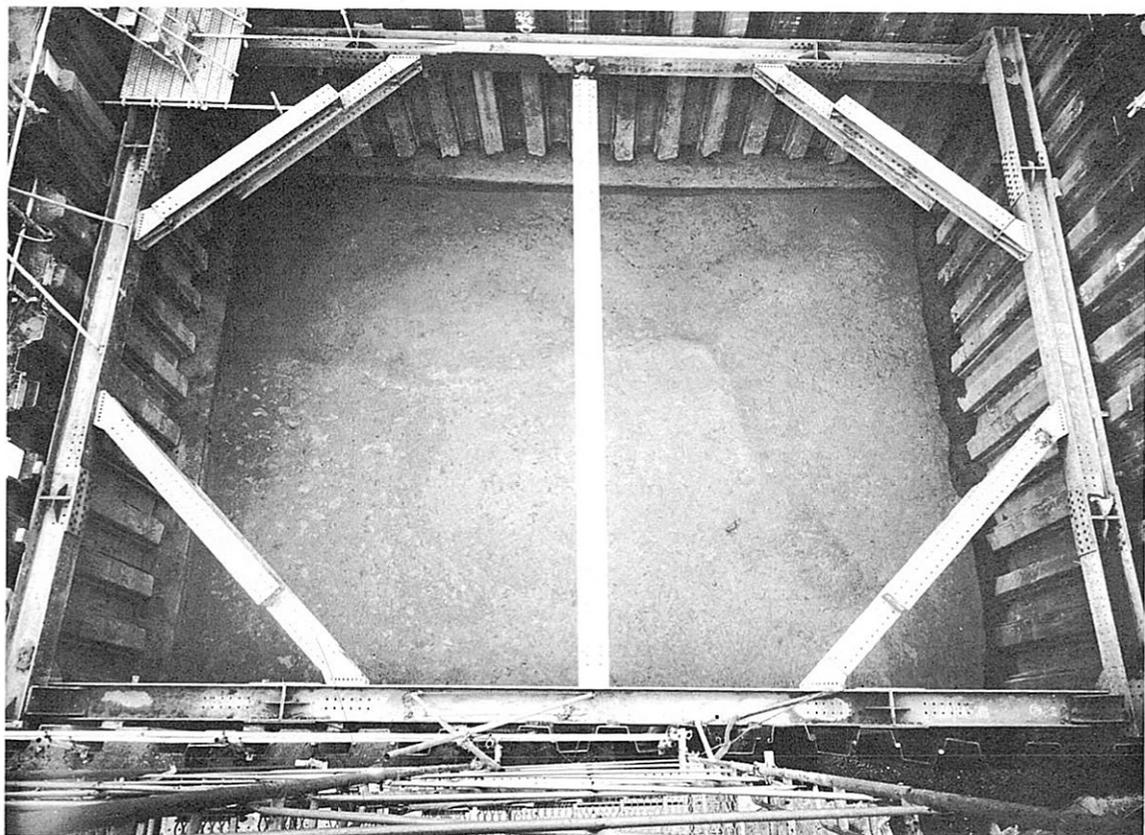
第1地区、第II遺構面下層自然河川（東から）



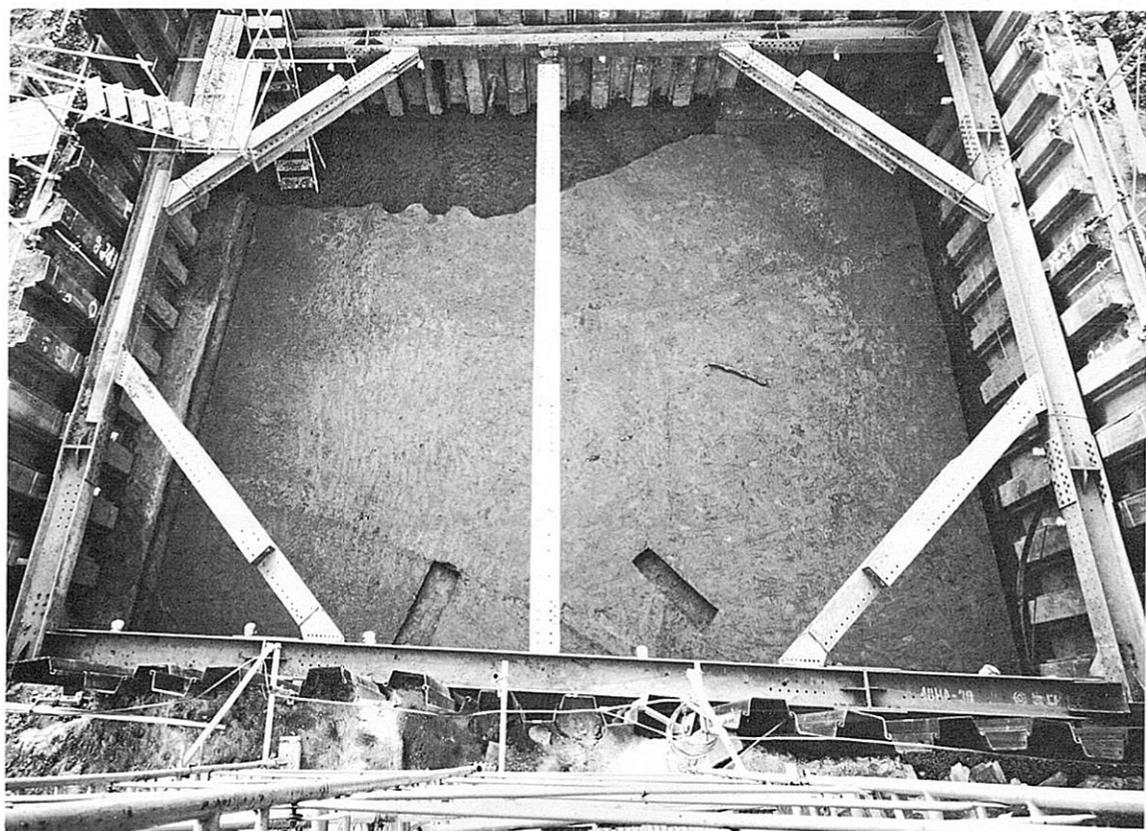
第1地区、堤検出状況（自然河川は未掘）



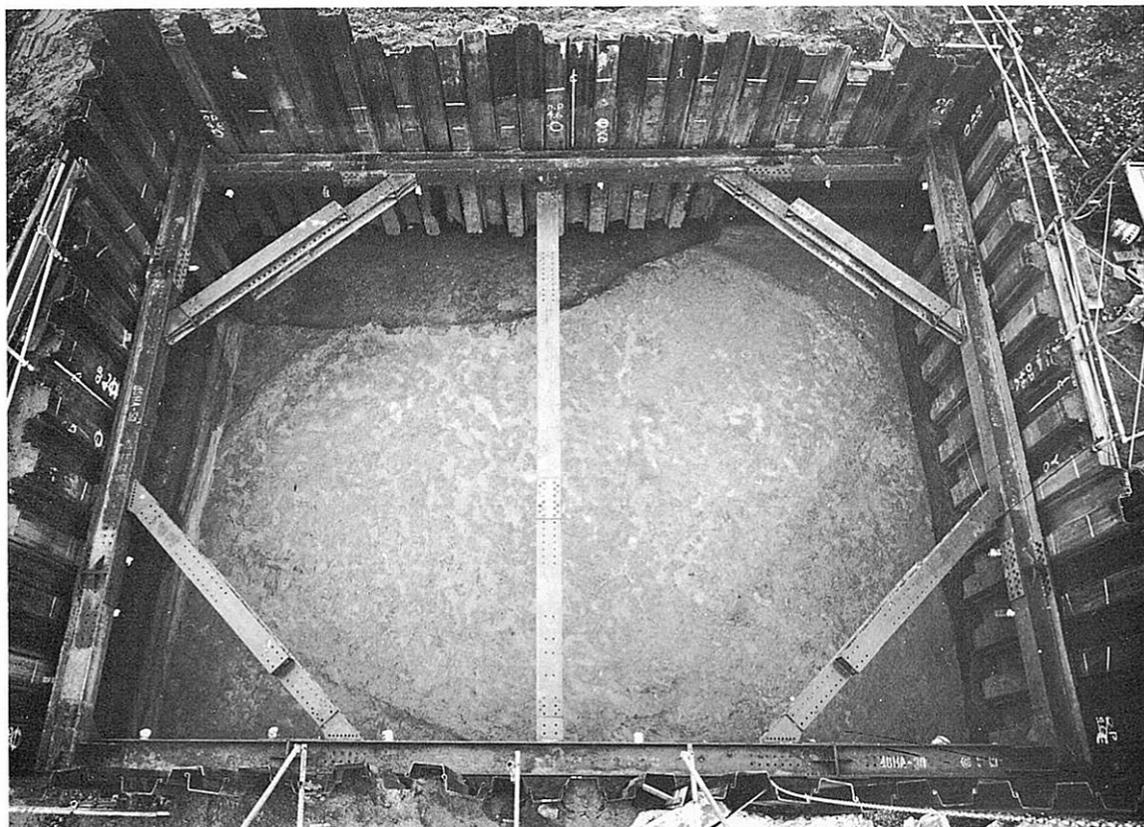
堤断面



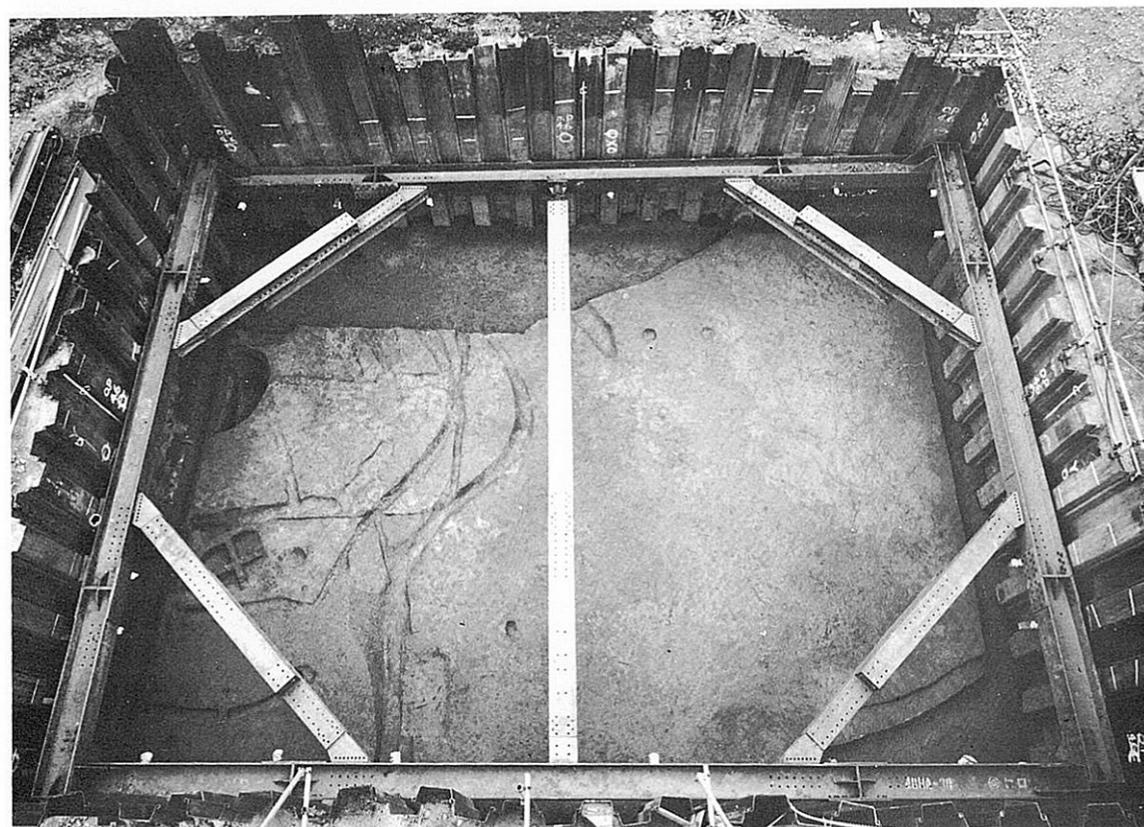
第1地区、第Ⅲ'遺構面（東から）



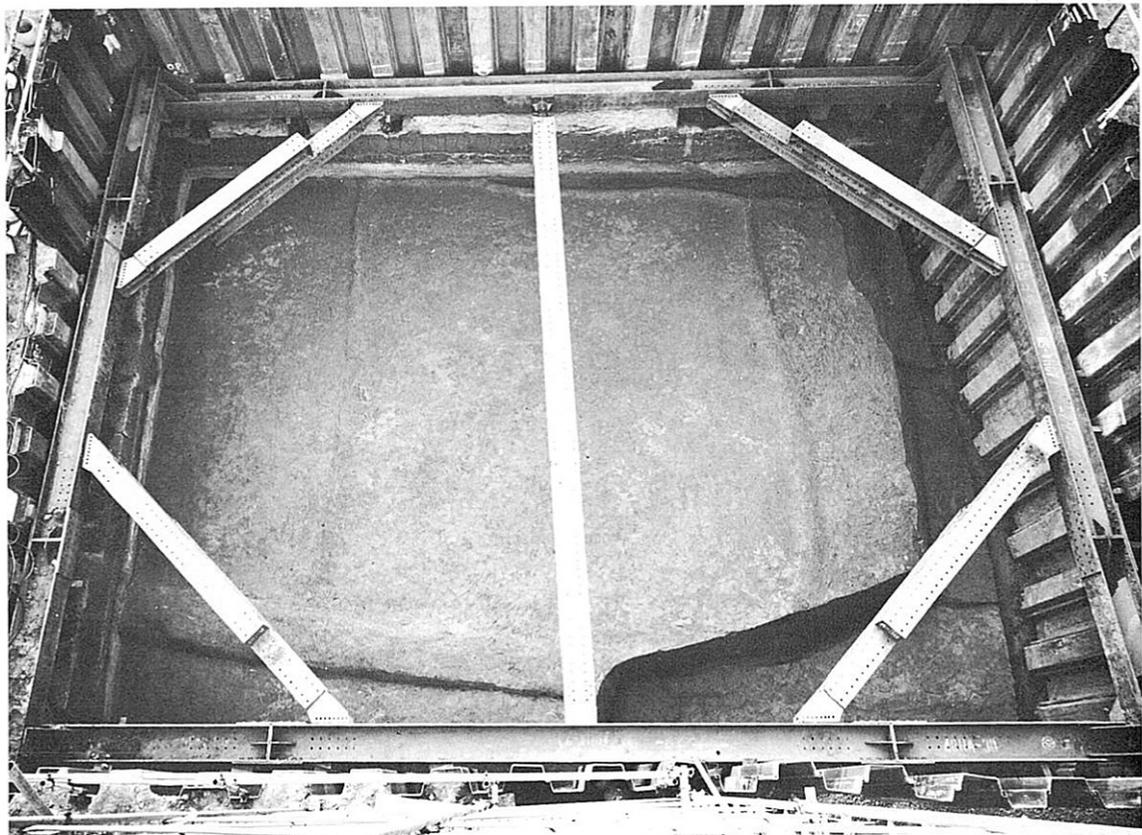
第2地区、第Ⅲ'遺構面（東から）



第2地区、第Ⅳ遺構面中期前半水田面（東から）



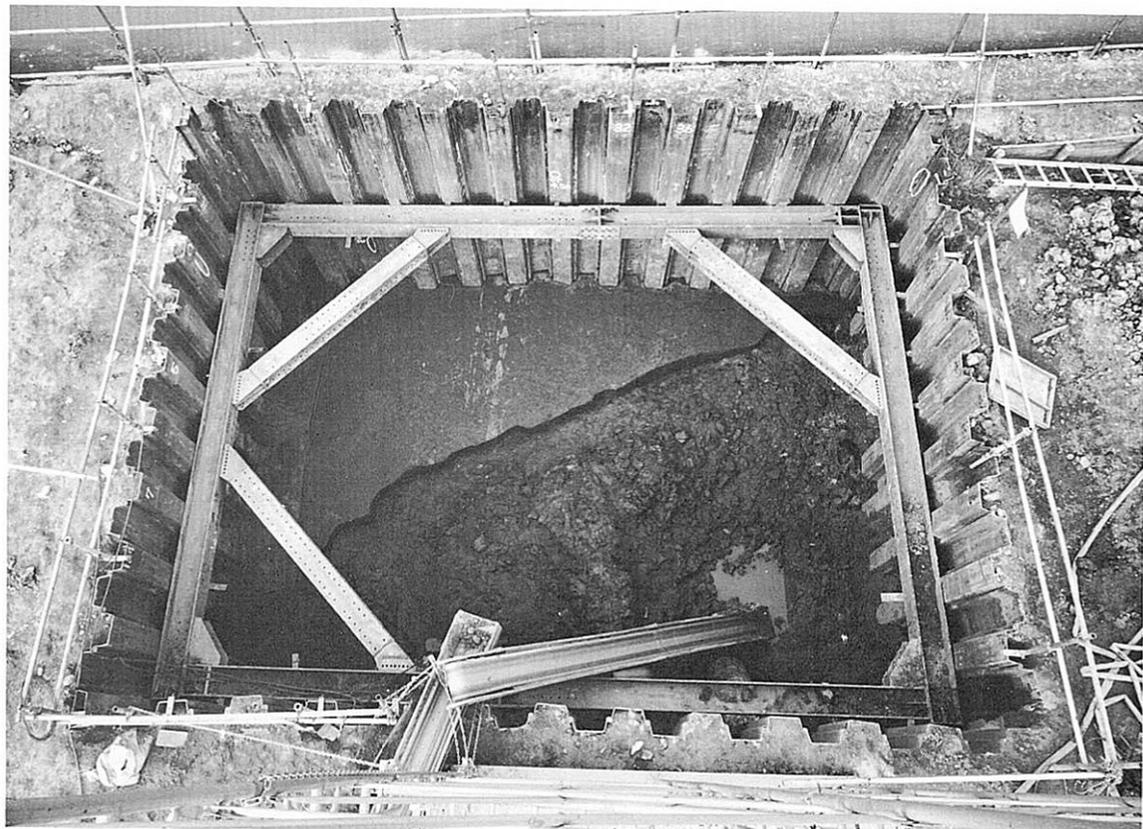
第2地区、第Ⅴ遺構面中期後半集落面（東から）



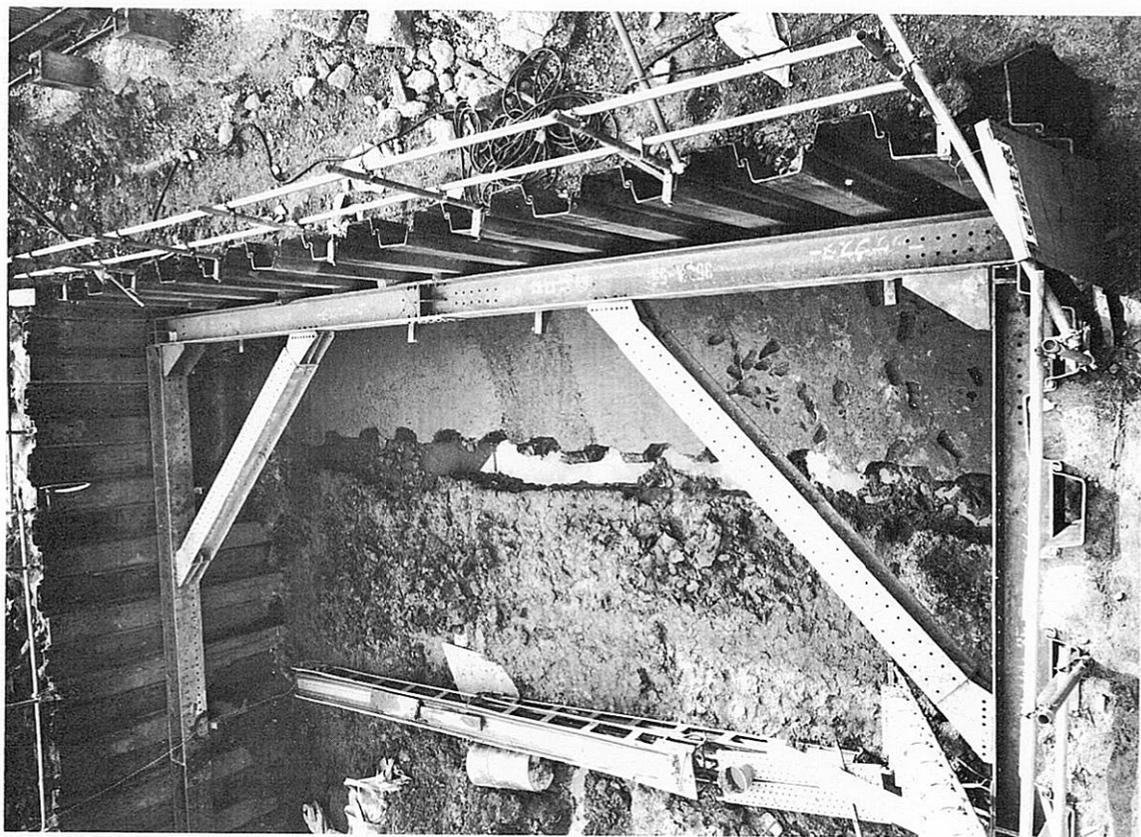
第1地区、第Ⅶ遺構面水田（東から）



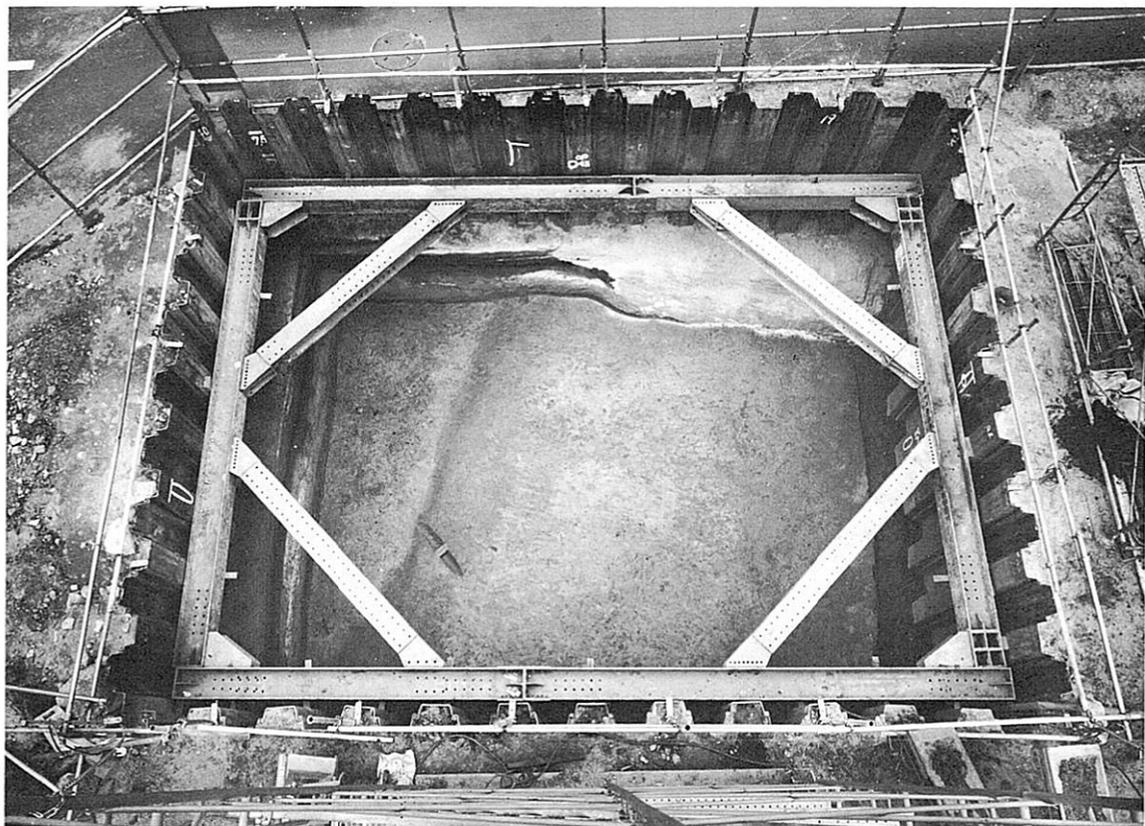
第2地区、第Ⅶ遺構面水田（東から）



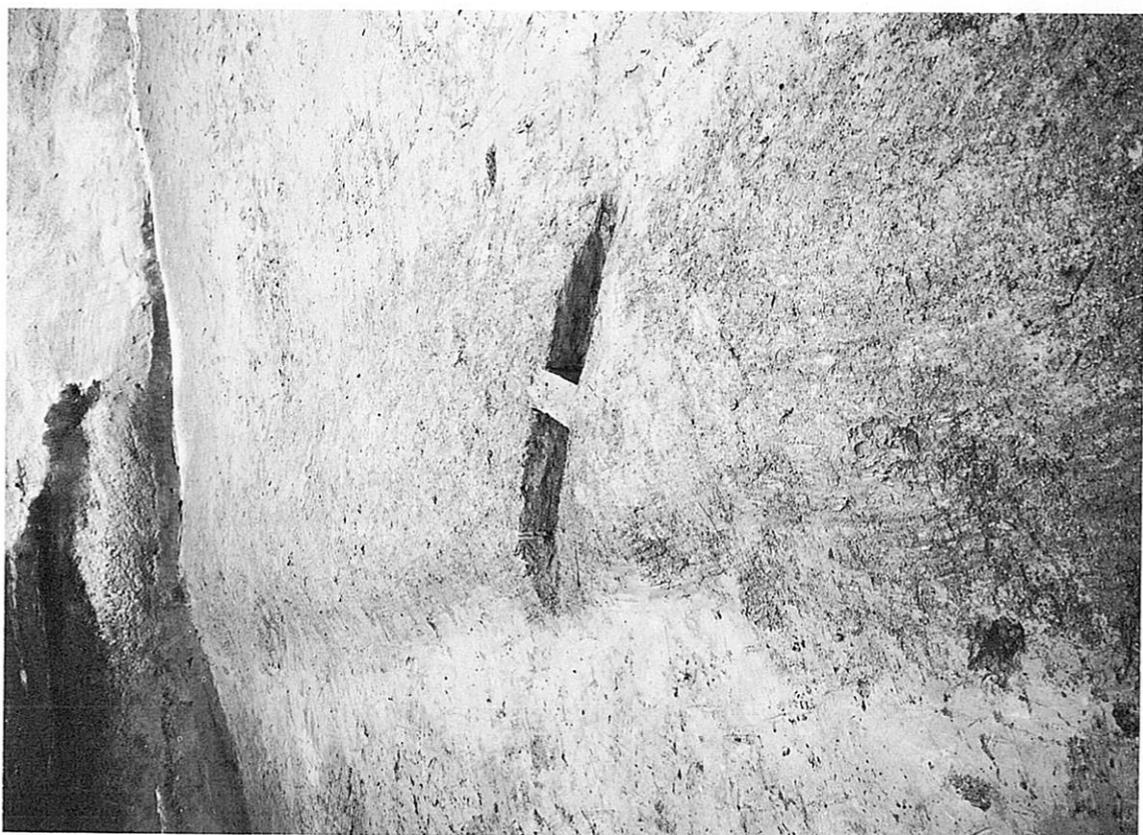
第1地区、第Ⅲ遺構面中期前半(南から)



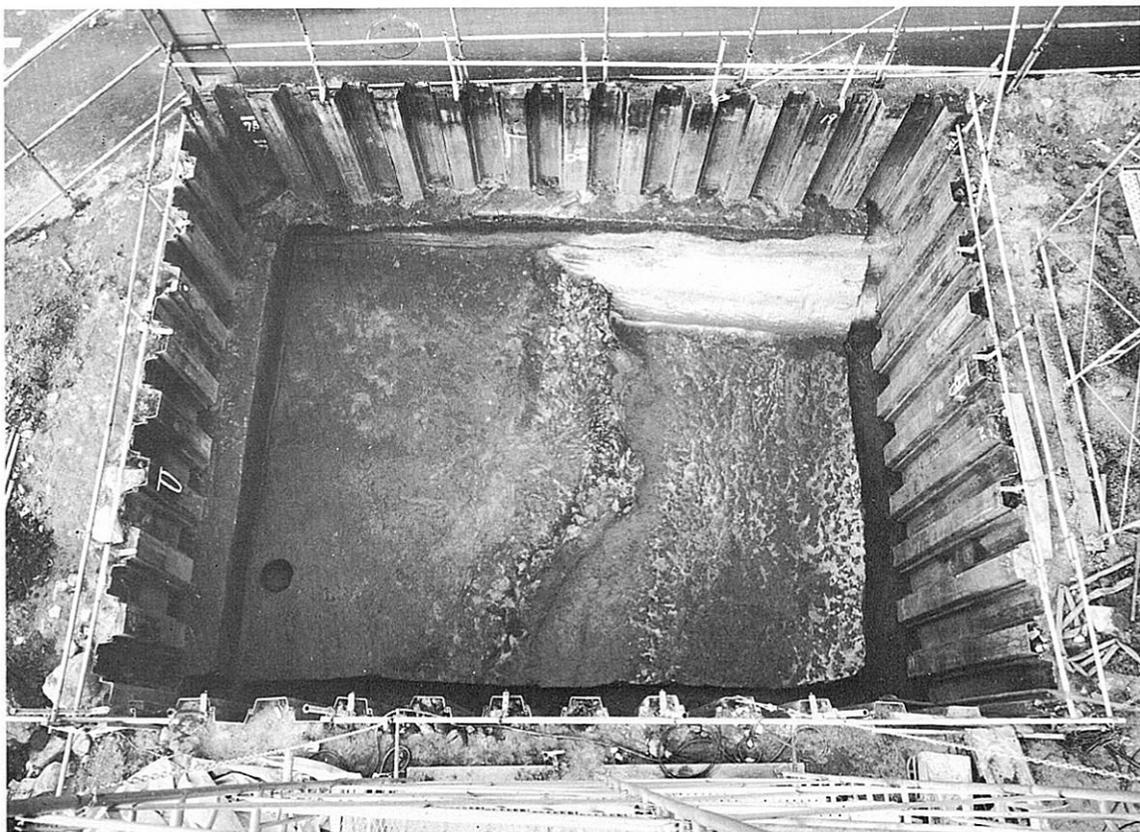
第3地区、第Ⅲ遺構面中期前半水田面(北から)



第2地区、中期前半水田面畦畔検出状況(南から)



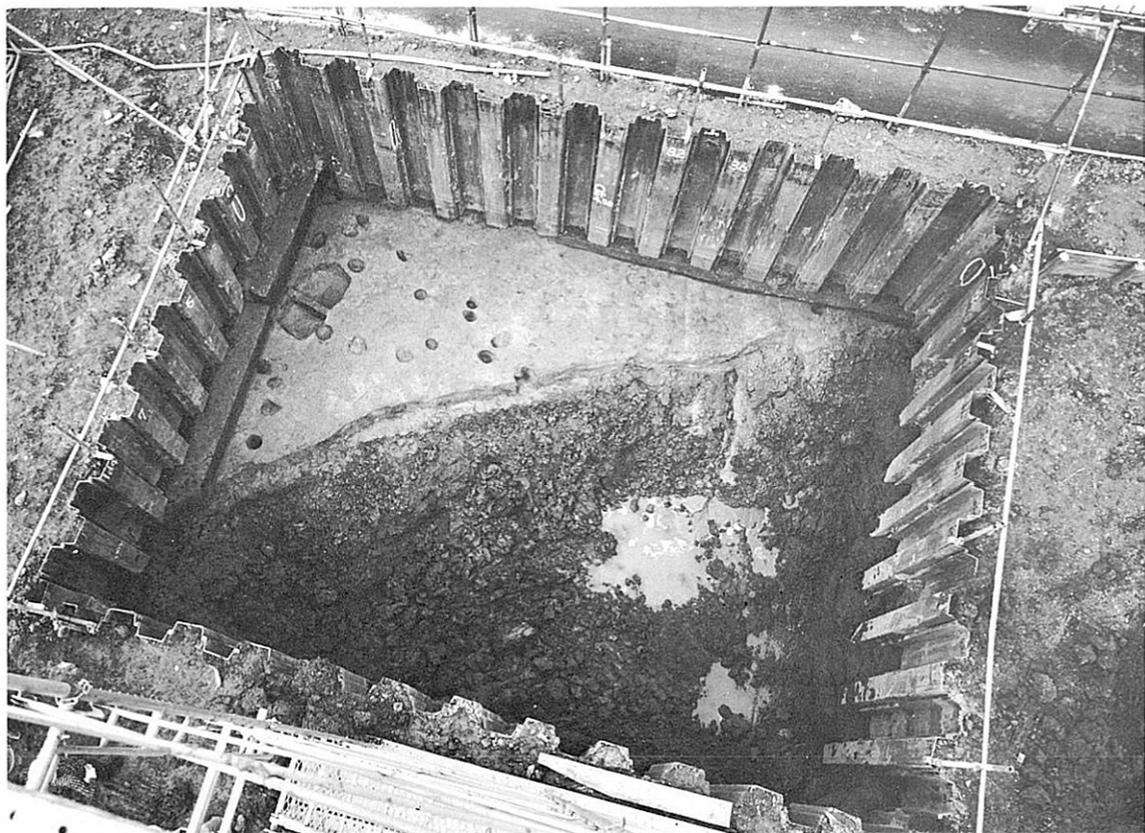
第2地区、畦畔と水口(南から)



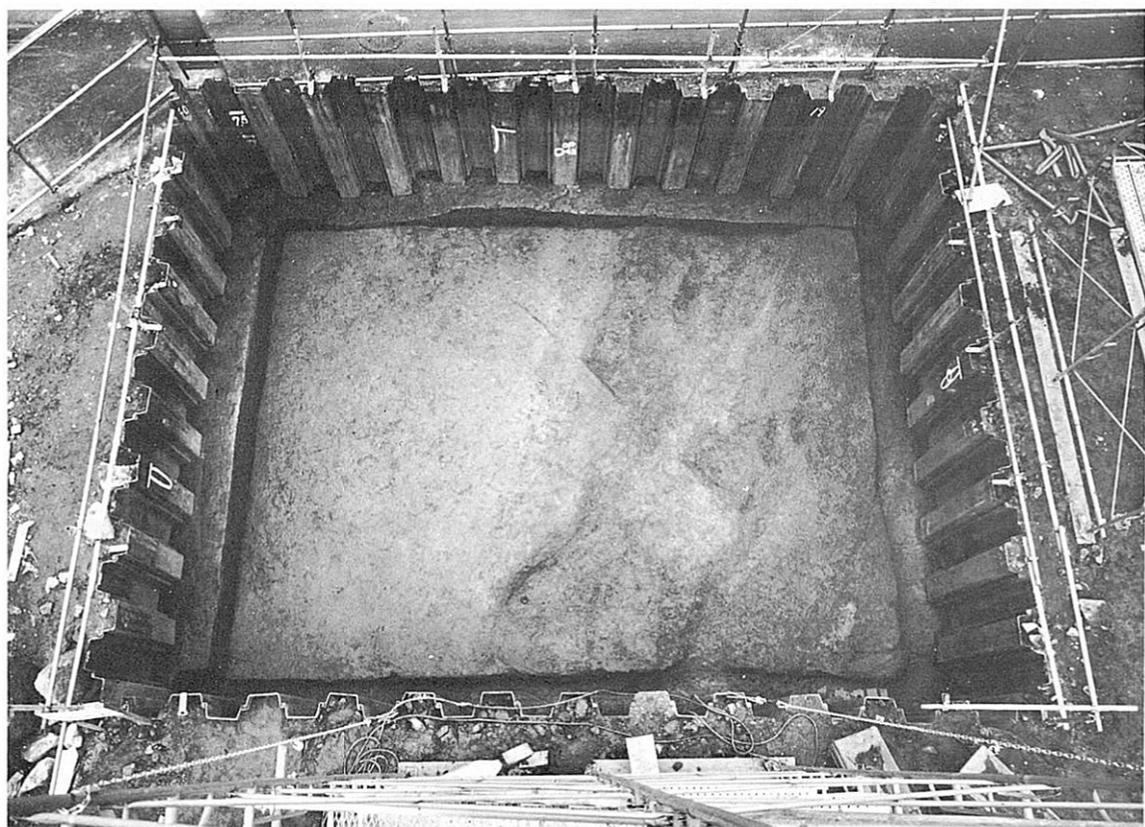
第2地区、第Ⅵ遺構面SD627（南から）



第3地区、第Ⅵ遺構面SD628（北から）



第1地区、第Ⅶ遺構面（南から）



第2地区、第Ⅶ遺構面（南から）

図版二〇 巨摩廢寺遺跡、古墳時代前期水田Ⅲ畦畔内出土遺物



8



9



10



11



12



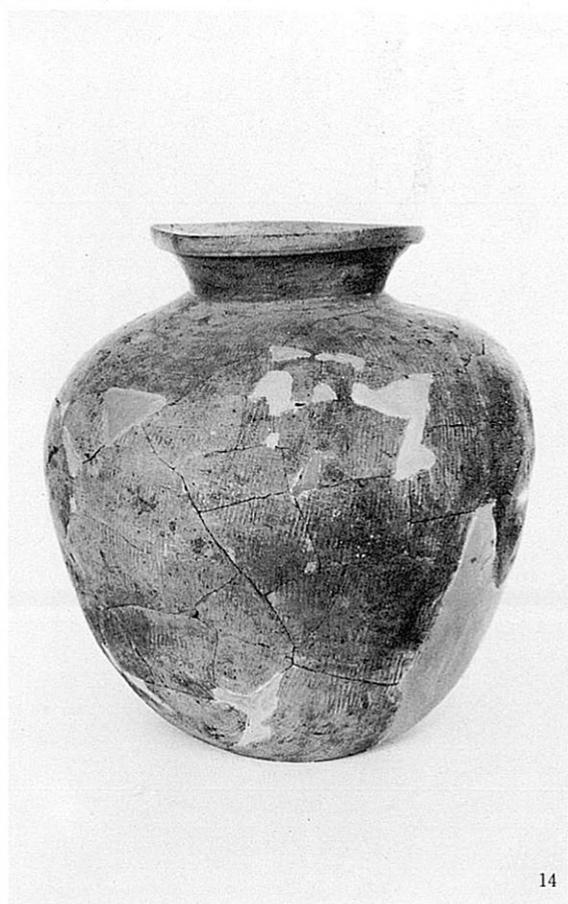
13



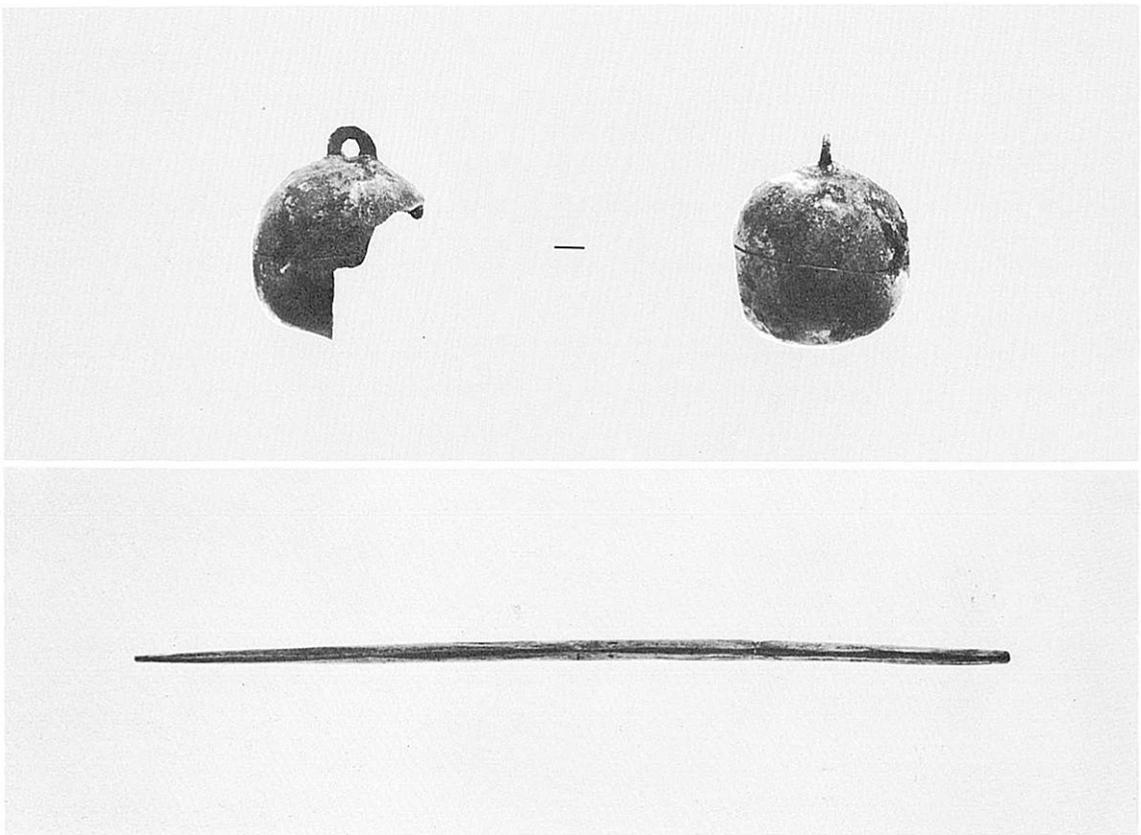
16



15



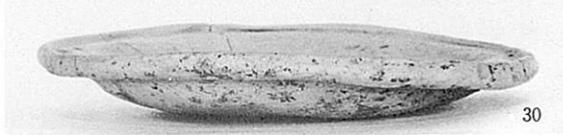
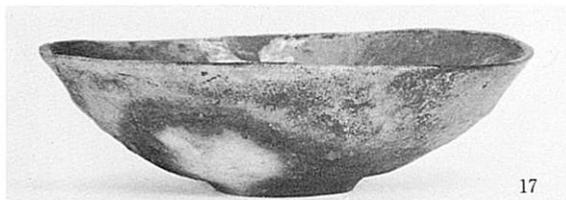
14



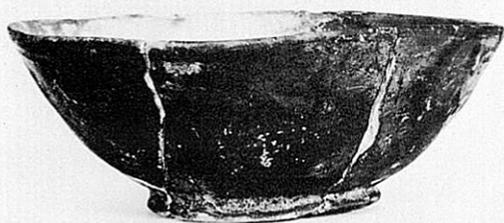
(上) 井戸20出土銅鈴、(下) 井戸23出土箸状木製品



② 石庖丁 (1、2) 弥生時代中期前半流水堆積、(3) 弥生時代中期後半溝31



(17) 溝88、(19~31) 井戸17、(35~48) 井戸18



50



51



52



39



41



42



43



53



54



55



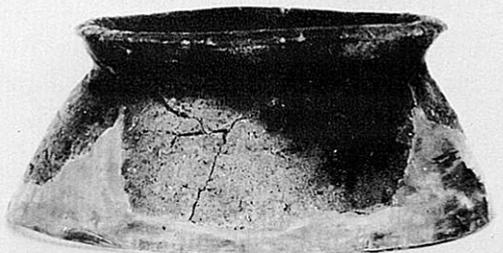
56



57



58



61



63



67



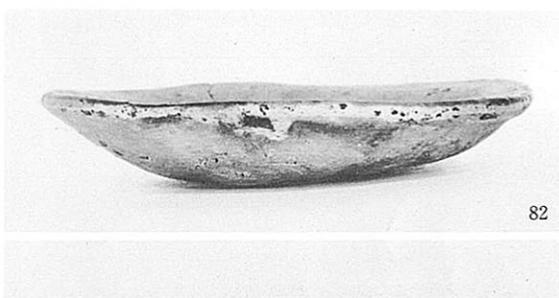
64



70



77



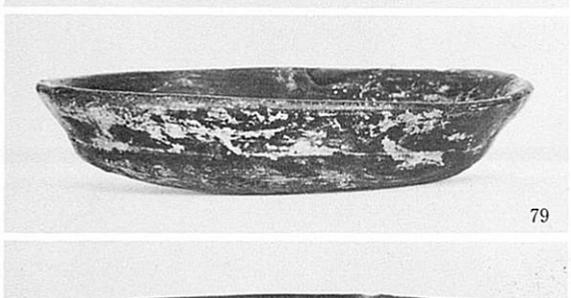
82



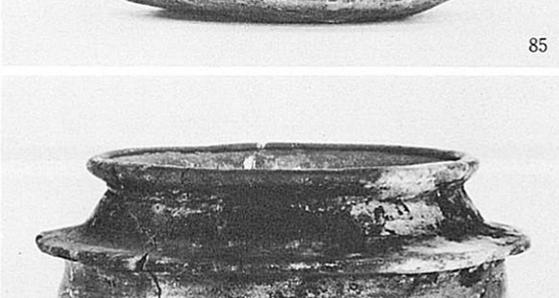
78



83



79



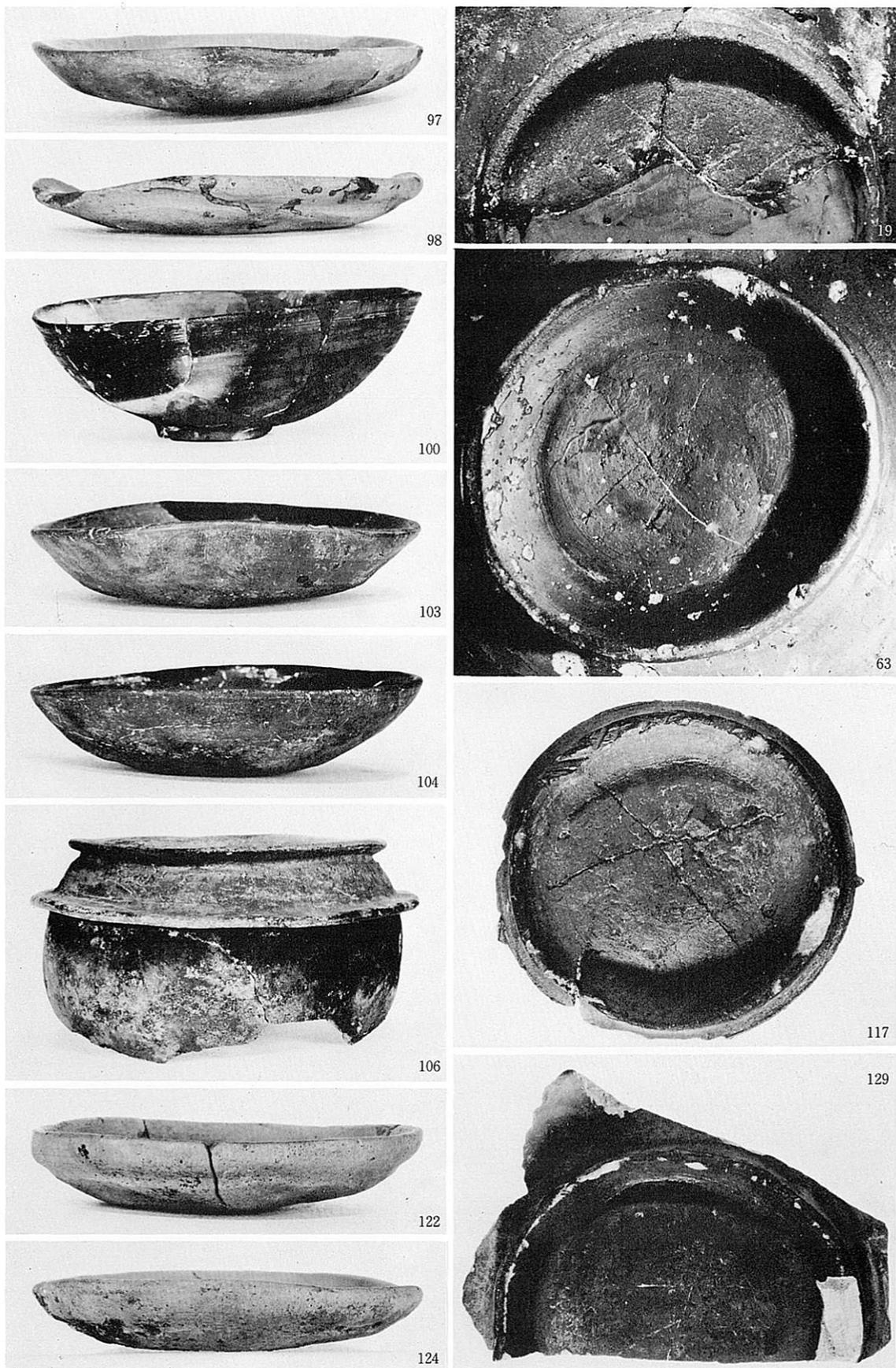
85



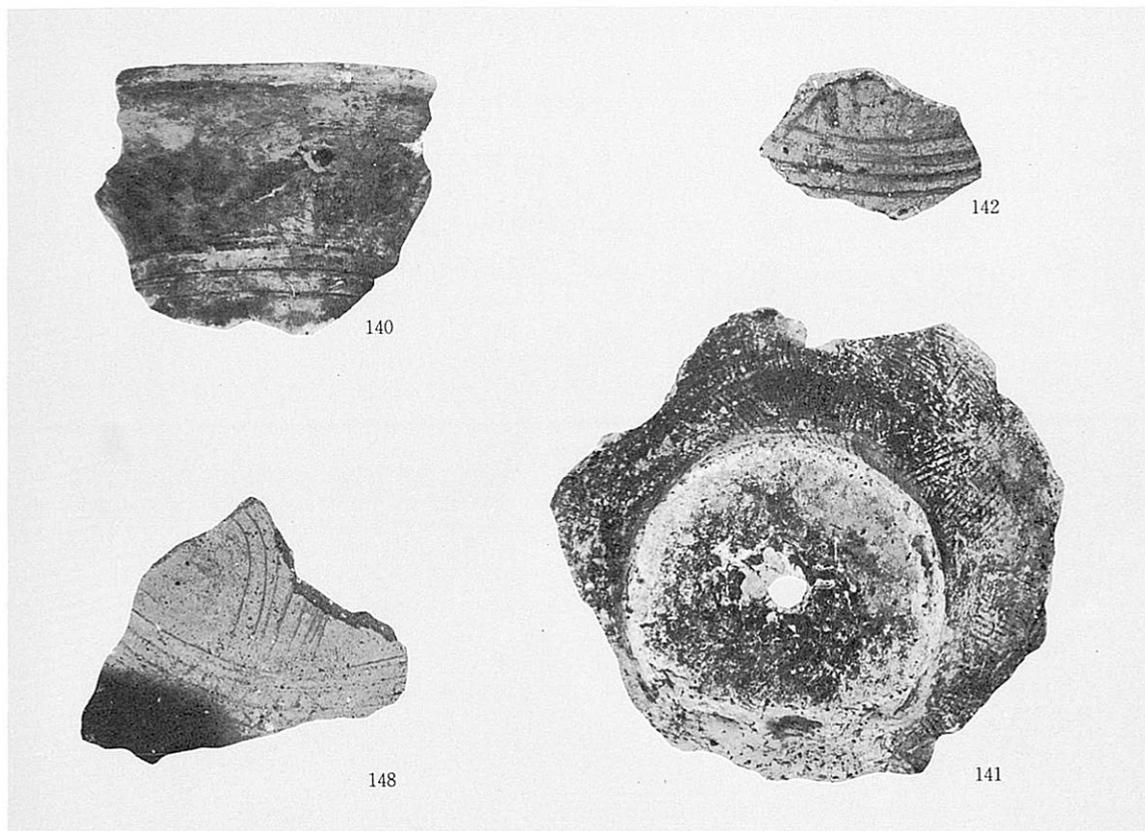
80



88



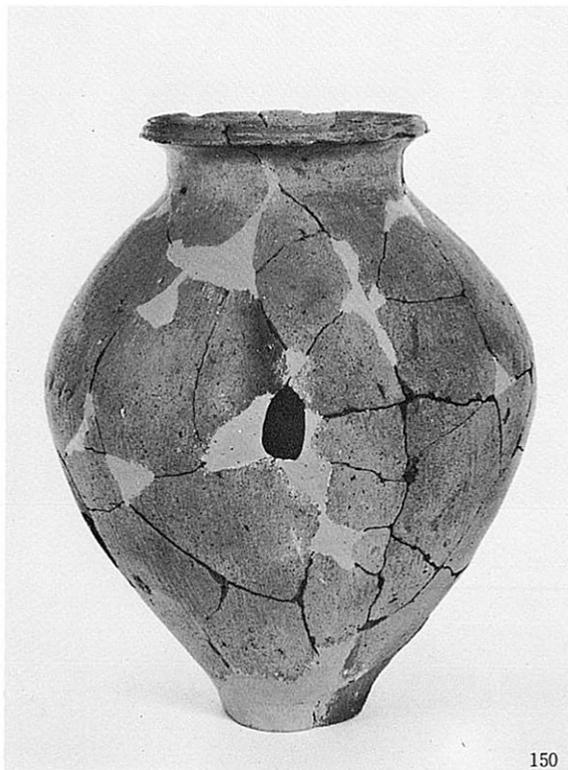
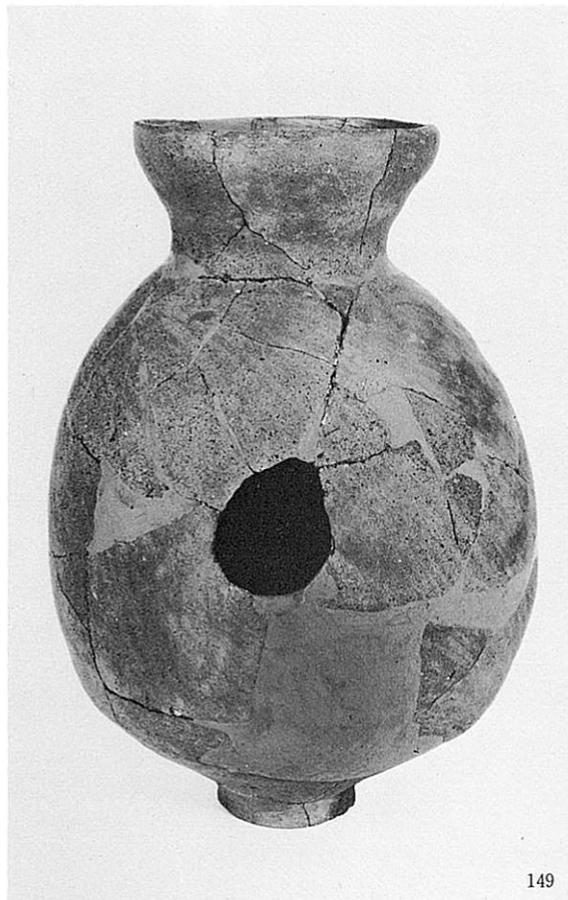
(97~98) 井戸23、(100~106) 井戸24、(117~124) 土城35、(19) 井戸17、(63) 井戸19、
 (129) 土城36、右段は底部外面刻線の例



(140~142) 第1地区、弥生時代前期自然河川出土土器、(148) 第3地区、第I遺構面直上



(146) 北一第2地区、弥生時代後期水田面、(147) 北一第1地区、古墳時代前期水田面直上



(149~152) 第1地区、弥生時代中期後半SD578、(槌) 第2地区、弥生時代後期自然河川

巨摩・若江北

(その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

昭和59年2月28日発行

編集著作 財団法人 大阪文化財センター
発行者 大阪市城東区蒲生2丁目10番28号

印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号